

中谷宇吉郎隨筆集二

中谷宇吉郎



目次

I 駅の一夜	6
硝子を破る者	16
流言蜚語	29
イグアノドンの唄	34
淡窓先生の教育	55
語呂の論理	59
日本のこころ	72
天災は忘れた頃来る	88
ツーン湖のほとり	92

一人の無名作家 103

九谷焼 107

面白味 120

由布院行 124

サラダの謎 138

南画を描く話 145

『日本石器時代提要』のこと 168

楡の花 172

おにぎりの味 176

かぶらずし 180

貝鍋の歌 183

真夏の日本海

.....

188

『西遊記』の夢

.....

198

私の生まれた家

.....

215

I
駅
の
一
夜

まだ戦争中の話である。

三月十日の未明、本所深川ほんじよふかがわを焼いたあの帝都空襲の余波を受けて、盛岡もりおかの一部にも火災が起きた。丁度その時刻には、私は何も知らずに、連絡船の中でぐっすり寝ていた。

青森に着いても何事も知らされず、いつものように乗客は先を争って汽車に乗ろうとし、それを制止する駅員の声がとぎれとぎれに雑沓ざつどうの中に響く、普段通りの連絡駅風景であった。雪が少しばかり降っていた。

やっと座席がとれてほっとした。やれやれこれでとにかく東京まで行けるのである。黙って坐すわってさえいれば、いつかは東京に着けるということが、この頃は少し不思議なことのように感ぜられるくらいである。

ところがこの時は、折角のその安心感が僅わずかか半日で打ち切られてしまった。盛岡へ着いてみたら、駅の周囲がすっかり焼けていて、まだ余燼よじんが白く寒空に上たち昇っている風景に遭あった。今朝の夜明けに初めての空襲があつて、駅も少しばかりの被害を受けた。とにかく汽車は此処ここで打切うちきるから、次の盛岡始発の列車に乗れという話である。

重い荷物を持ちあぐみながら、いわれた通りに三時間ばかり待って、次の列車に乗ろうとしたが、恐ろしい雑沓ざつどうでとうとう乗りはぐれてしまった。もう二時間待つ

て、その次の青森から来る上野行にやつと乗ることは乗ったが、それがまた満員で、漸くデッキの所に割り込ましてもらったくらいであった。初めのうちはどうにか我慢していたものの、夜に入ると共に風は冷くなるし、脚は疲れてくるし、このまま上野まで立ち通しではどうにも身体が持たないような気がして来た。

車掌に相談してみたら、I 駅で下車して一泊すれば、明朝早く始発の上野行が出るから、それに乗ればすいているだろうとのことである。但し宿屋は今からではむつかしいかもしれないがという。しかしとうとう我慢し切れなくて、思い切つてI 駅で下りてしまった。夜の九時過ぎのことで、しかも燈火管制のやかましい最中のこととて、何処も此処も真暗である。それに雪がまた少し強く降り出して来ている。

とりあえず闇の中を駅前の交番まで辿りついてきいてみたが「さあ、今頃になって宿は無理でしょうな」と巡査は極めて冷淡である。戦時研究の大事な要件で上京すること、途中の不測の災害でこういう始末になったことを説明しても、戦時研究員などというものには全然縁がないらしく、てんで相手にしてもらえない。やつとのことで二軒ばかり宿屋の名前を教えてもらつて、真暗な町の中をたずねて行つてみたが、全部満員ですとあっさり断られてしまった。

仕方なく再び交番まで帰つてみると、巡査はひどく不機嫌である。「何度来たつて駄目ですよ。此処に電話があるんで、ちよつと宿へ電話でもかけてくれたらと思う

んでしようが、これは警察電話で町へはかからない電話なんですよ」と頼まないことまで先手を打って断られてしまった。

かかわり合つても仕方がないと諦めて、再び街へ出てみた。雪は益々ひどくなり、真暗なこの田舎の街には人は一人も通っていない。もう十時を過ぎているかもしれない。望みはなさそうである。しかしそうかと言って、この雪の中では野宿も出来ないのも、今一度宿屋らしい家はないかと盲滅法に当つてみることにした。

駅前の大通りを少し下つて行つてみると、さつき断られた大きい宿屋の向いに、平屋の広い背の低い家があった。その恰好が夜目にも何となく昔の宿の宿屋を思わせるものだったので、思い切つて前の硝子戸をあけてみた。戸には鍵がかかつていなくて簡単にあいて、中に広い土間がある。家の中は真暗であるが、真中に長い廊下があつて、その一隅に燈火管制をした電燈がついている。其処の障子の蔭が帳場らしい様子である。果して宿屋らしい。

簡単に事情を言つて、食事は要らないから一晩だけ泊めてもらえないかと頼んでみた。すると真暗な中から女中らしい女が出て来て、気の毒だが、もうすっかり満員で、蒲団がないから泊められないと言う。これだけでもひつかかりが出来れば脈がある。防寒具は持つているから、とにかくこの雪では外で寝るわけには行かないからと頼んでみた。

すると「はなや、一体蒲団は一枚もないのかね」と帳場の障子の蔭から、綺麗な言葉使いで若い女の声が出た。「夏蒲団が二枚残ってるだけでさあ」と女中は帳場の方と私と両方にかけてような返事である。「それだけあれば結構です、毛皮を用意して来ていますから」と私の方も一所懸命である。

「お気の毒ですから、泊めておあげなさい。誠にすみませんが、其処で御所と御名前を言つて下さいませんか」と若い女の声は依然薄暗がりの障子の中からの応対である。此処で断られては大変なので、官職を書いた名刺を出して、こういうもので決して怪しい者ではないからと、女中さんに取次ぎを頼んだ。

ところが名刺を持った女中が、障子の蔭へはいって行って、なかなか出て来ない。何か薄暗がりの中でごとごとと音がしている。大分待つてからやつと出て来たのは、さっきの女中さんではなく、声の主らしい。玄関は真暗なので、身体付きも分らないが「どうも失礼致しました。この頃ちよつと物騒なものでとんだ失礼を致しました。どうぞお上り下さいませ」という丁寧な言葉付である。

「靴はお持ち致しますから。さあどうぞこちらの方へ、御二階の方で御座いますか」とその美しい声の主は、真暗な梯子段を先に立って案内してくれる。足許を探り探り上つて行く私を、中段で待ち受けながら、その声の主は「こんな時に、こんな所に先生が御出でにならうとは思いませんでした。私は先生の随分熱心な愛読

者なんで御座います」と言う。

「実はお部屋がもう御座いませんで、相宿あいやどを御願いしようと思つたので御座います、それも余り失礼なので。あの誠に失礼で御座いますが、私の部屋でおやすみになつて戴いたくよりないので御座います」という話である。梯子段を上つたすぐ右がその部屋である。

前後一時間ばかり真暗な中をさまよつた末に、初めて明るい部屋に通された。四畳半の部屋である。美しい声の主は紺緋こんがすりのもんぺをはき、同じ紺緋のちゃんちゃんを着ていた。そして丁寧ていねいに御辞儀をされた。三十近い智的な美しい人である。

先方も驚いたと言われるが、私も一層驚いた。誠に思いがけない時に、思いがけない所で、思いがけない人に会うものである。その人よりも更に驚いたのはその部屋である。四畳半の二つの壁がすっかり本棚になつていて、それに一杯本がつまつている。岩波文庫が一棚ぎつしり並んでいて、その下に「国史大系」だの、『古事記伝』だの、「続群書類従くんしよるいしゆづ」だのという本がすっかり揃そろつていたのである。そして今一方の本棚には、アンドレ・モロアの『英国史』とエブリマンらしい英書が並んでいる。畳の上にもうず高く本が積まれていて、やつと蒲団を敷くくらいの畳があいてあるだけである。私はたった今の今まで、東北線の寒駅の暗い街をさまよい歩いていたことをすっかり忘れてしまつていた。

火鉢とお茶を持って上つて来た夫人に、私は不躰ながら、色々な質問をせざるを得ない気持であった。きいてみると、目白の女子大の出身で、専攻は英文学であったそうである。卒業後ピクターの宣伝部とかに暫く勤めていたが、郷里に帰つて女学校に奉職し、今の夫君のところに来られたのだそうである。夫君は国文学専攻で、この土地の中学校に奉職されているということであった。

「主人の両親が旧くからこの宿をやっております、私たちこういう商売には不向きなもので御座いますから、父親が亡くなりましてから商売を止めようとしたので御座いますが、何分このIという土地は宿屋の少いところで御座います、それにこの頃附近の田舎から徴用された方たちが、此処で集つて東京の方へ参りますので、毎日のようにその方たちを沢山割り当てられるので御座います。それで警察の方でどうしても廃業させてくれないんで御座います」

「もつとも徴用の方たちだつて、宿屋がなくてお困りなんでしょうから、私たちこういう不馴れな商売を致しましても、これでやはり幾分かはお国の役に立っているのかと思ひまして、一所懸命やることに決心致しました。まあ私たちなど手近なところで出来るだけお役に立つようにするより仕方御座いませぬもの」

「それでも一番困りますのは、本を読む時間がないことで御座います。この頃女中といつてもなかなか御座いませぬし、それに小さいのもおりますし、もう一日中追

われ通して御座います。何の御かまいも出来ませんので」

私は何だか日本の国力というものが、こういう人の知らない土地で、人に知られない姿で、幽かに培養かすされているのではないかという気がして来て、静かに夫人の話に聞き入っていた。ふと目をやると、机の上に岩波文庫の『島津斉彬言行録しまづなりあきらげんこうろく』が載っている。

「それはそうと、これだけの本をお集めになるのは大変でしたでしょうね。昔の本は別として、その『島津斉彬言行録』なんか、最近出たものでしょう。どうしてそんな本が此処こゝらの土地で手に入るんですか」

「実は、すぐ近くのK町に変わった本屋がおりまして。私実家がKなもので、前からよく知っているのです。御座いますが、その人がこの附近で本を欲しがってる人から、毎月新刊の註文ちゅうもんをとりまして、東京まで買い出しに行つてくれるんで御座います。毎月一回上京して自分で背負つて来てくれますので、どうにか手に入るので御座います」

「随分御喋りおしゃべを致しました。明日は一番でお立ちで御座いますね。私は毎晩大抵十二時になりますので、朝一番で御座いますと、御目にかかれなにかと思ひます。御疲つかれで御座いましょう。何卒どうぞゆつくりお寝やすみになつて下さい。今女中にお床をのべさせますから、本当にこんな所で先生に御目にかかれようとは思ひませんでした。主人も御目にかかりたがつておりますが、生憎あいにく風邪かぜをひいて休んでおりますもので」

と言ひ残して夫人は下りて行つた。入れ代りに上つて来たさつきの中中さんが、明日の朝御飯の代りにと奥様がいわれましたからと言つて、紙包をくれた。あけてみたら真白な餅もちが五切れはいつていた。

翌朝四時半に起き出した私は、皆の眼を覚まさないように、静かに玄関へ下りて、真暗な中で靴をはいて、そつと外へ出た。雪はもうやんでいて、星が二つ三つ見えていた。

汽車はすいていて、二等車の中には三人しか客がいなかった。私は昨夜の出来事がひよつとしたら、夢ではなかったかと思ひながら、だんだん白しろんで行く東の空を眺めていた。

附記

この話は戦争が第三年に入つて、我が国が最後の苦しい段階に乗りかかった頃の話である。その時でも勿論この話は或る意味を持つていたと思われるが、今終戦後国民の多数が浅ましい争いと救われぬ虚脱状態とに陥つてゐる際に、なるべく多くの人に知ってもらふことも、また別の意味で意義があるような気がする。日本の力は軍閥や官僚が培つたものではない。だから私は今のよな国の姿を眼の前に見

せられても、望みは棄^すてない。

(昭和二十一年二月一日)

硝子を破る者

汽車はあいかわらず満員である。

吹雪で遅れ遅れするので、駅には前からの乗客が溜つて益々混雑をひどくするらしい。

やっと窓際の席がとれて、珍しいことと喜んだのも束の間、硝子が破れているので、雪を雑えた零下十度の風が遠慮なく吹き込んで来る。とてもたまつたものではない。前に坐っている五十余りの闇商人らしい男が、風呂敷を窓にあてがっているが、どうも巧くとまらない。

何度もやって見てとうとう諦めたらしく、外套の襟を立て襟巻をぐるぐる首に巻いて、身体を丸くして縮まり込んでしまった。風呂敷がばたばたと風にあおられて、五月蠅いばかりでなく、余計に寒いような気がする。

私の方も同様にちぢこまっている。ふと眼が会つたら、その男が半分は一人言のように、半分は私に話しかけるような調子で「戦争に敗けりやあこんなもんだ。仕方がないや」とつぶやいた。私はちよつと可笑しくなつて「だつて君、これは何もアメリカの兵隊が割つたんじやないんだよ。硝子を割つたのは皆日本人なんだろう」と言うと、その男も「そう言えばそうだね」と苦笑した。

日本人が汽車の窓硝子を破るようになったのは、窮乏のために平常心を失つたからであり、窮乏は敗戦に原因する。そういう意味では、戦争に敗けたから雪の吹き

込む汽車で寒い思いをしなければならぬと言うのは本当である。しかし「戦争に敗けたんだから」という言葉を、今日のように皆が無考えに使っていると、とんでもない錯覚に陥る虞おそれがある。もう既に陥おつてしまっている連中も沢山あるらしい。終戦直後、技術院があつさり解散してしまつたので、私たちのニセコ山頂の観測所は、親なしになつてしまつた。施設は適当に処分するようにとの通報を受けたが、そう簡単に解体してしまふわけにも行かない。私たちにしてみれば、過去五力年にわたつて、随分苦しい目にも會つて、やつと築き上げたものである。

取る物もとりあえず、樺太からからの引揚民の中に雑まつて、地獄絵のような場面を見続けながら、三日がかりで東京へ出た。そして十日ばかりかかつて、雪中飛行の研究所を農業物理の研究所として更生させるというちよつと聞くと妙な話をとりきめて、安心して歸つて来た。雪中飛行と農業物理というと、まるで縁がないようであるが、もともと雪中飛行の研究と言つても、科学的には雪の本質の研究であつて、寒地農業の物理的研究に雪の本質の研究が役に立たぬはずはないのである。その点自然を直接対象とする科学の研究はありがたいものである。ところが、この上京の留守中に大変なことが起つてしまつた。それは山頂の観測所がすっかり泥棒に荒されてしまつたのである。

孤立した山頂の天辺てんぺんにある観測所で、人家からは、どの道を探つても二里り近くは

ある。そういう隔絶した地点にある建物のこととて、泥棒にはいる気になれば、極めて容易である。終戦と同時に、入口の戸は五寸釘ごすんくぎで打付けうちつけ、窓も全部板を当てて釘付けにして来たのであるが、二階の明り取りの硝子をこわして、中からあけたので、簡単に破られてしまった。

研究室の中は、目も当てられない始末であった。持ち運びの出来る器械類を盗んで行くのは仕方ないとして、全く不必要に窓硝子を大半壊している。大型の器械は、中の真空管だの測器だのという部分品だけを盗とって行ったようである。一番不可解なことは、それだけ持つて行けばよさそうなものを、盗った後の器械を床にぶちつけて、滅茶苦茶めっちゃに壊してあることである。

この山は北海道でも有名な吹雪の難所である。山頂の天地晦暝かひめいの雪嵐ゆきあらしの中で二冬を過すし、やっと研究装置を完成した助教教授のI君は、手塩にかけた器械の無惨な姿を見て、ぼろぼろと涙をこぼしたそうである。

この無意味な破壊という不可解な心理が、戦争中にもしばしば現れて、米英の將兵をひどく恐れさせ、また刺戟しげきしたのであった。シンガポールでも、マニラでも、そういうことが始終あつたらしい。何かの意味で戦争に必要なこと、少くも間接にでも策戦に関係があることなら意味は分るが、全く不必要に文化施設だの博物館の標本だのを破壊する心理は、私たちにも分らない。英米軍の人たちには、この「底知

れぬ野蛮性」は恐怖の謎であつたにちがいない。

東京で総司令部の報道関係の一将校に会つた時に、この点について質問されて、大いに困つたことがある。マニラの暴状を見て来たばかりのその将校は、余りにも苛い無意味なる破壊の姿によほど心を痛められたようであつた。私は返答に困つて、下手な弁解をした。制空権を完全に奪われ、補給の路も救援の望みも全く失われた場合に、将兵が絶望の極、その種の精神的異常状態に陥ることもあり得ようというのである。話しながら拙い答弁をしたものだと内心思つていたら、果して「バターンにおけるマックアーサー軍は、全く救援の望みはなかつたが、ああいう目的のない破壊はしなかつた」と言われて、その通りだと苦笑せざるを得なかつた。

ニセコの山頂でこの厄に遭つていたのと殆んど同じ頃、苦小牧の飛行場でも、悲しむべき事件が起つていた。戦争中私たちは冬のニセコ山頂の研究と並行に、夏は海霧の研究に没頭していたのである。夏の数カ月毎日のように、千島及び東部北海道を襲う魔の海霧を、何とかして克服しようというのが目的であつた。大規模なことはとても望めないが、せめて飛行場の滑走路の上だけでも、あの霧をはらそうというのである。

同じ目的の研究は、今度の戦争途中に英国でも始められた。英国のこの研究は立派に実用化されて、独逸のルントシュテット攻勢を喰ひ止めるのに、大いに役立つ

たのである。英国側では、もしこの霧をはらす研究に成功しなかったら、独逸は今年生きのびたであろうと言っているくらいである。英国の新聞は、この霧の人工消散に関する記事を、伯林ベルリン陥落後二カ月、即ち昨年の夏の初めに発表した。原理は石油を完全燃焼させて、その熱気を送り出して霧粒を蒸発させるのである。

私たちの方法も偶然それと原理は一致したので、トラックの上に重油の完全燃焼装置をとりつけ、それから出る熱気に大量の空気を混ぜて送風器で送り出すものである。知人をたよって鉄工所に頼み込み、やっと装置は出来たが、エンジンから送風器へのベルトがどうしても手に入らない。官庁と統制会社と軍との間を駆け廻って、何度も書類を出して結局間に合わなかった。とうとう低温科学研究所の低温装置用のベルトをはずしてもらって、一月ひときという約束で借りることにした。実地試験中は、研究の方は暫くしば休んでもらうより仕方がない。英国の霧消散実験では、チャーチルが燃料相しょうにメッセージを発し、主な実験には、夜中でも大臣が立会った。日本の総理大臣から命令される戦時研究では、ベルト五本手に入れるにもこの騒ぎであった。苦小牧飛行場で、この「消霧車」の試験がほぼ完了して、一同ホツとした時に終戦になった。消霧車は普通では貨車輸送の出来ないぼうだい膨大なもので、そのまま飛行場に残して来た。ベルトは心配なので、とりはずして装置の中に入れて、外から開けられないように、針金でしっかり縛りつけておいた。

一月ばかりたって、どうにか輸送がきくようになったので、特殊扱いで、やつと送ってもらった。着いたところを見ると、すっかり壊されている。測器類も細々した付属品も全部盗まれ、ベルトは影も形もない。慌てて、人を苦小牧に派遣して調べてもらったが、終戦時のあの騒ぎでは調べようにも手掛りがないという心細い話である。これが沖縄でのことなら話も分るが、同じ敗けたと言っても、進駐軍が来るまでにはまだ二カ月もある頃の話である。

ベルトがなくては、低温研究所の機能が止つてしまう。小樽札幌とあらゆる手を廻して品物を手に入れようとしたが、駄目である。正規の手続きも勿論採つたが、現物が配給になるのは何時のことか分らない。結局配給店の某氏の特別の厚意で、一時ある方面の品を融通してもらつて、やつと片が附いたが、それまでに行くには、散々骨を折つて四カ月近くもかかつてしまった。再建日本の重要な任務の一半は、科学者に負わされているそうである。そしてその任務というのが、盗まれたベルトの代品を探すことであるというのは、如何にも悲しい現実である。

この頃会う人ごとに、よくニセコの研究はもう出来なくなつたのでしよう、惜しいことですねと同情される。「何分電気のコードから、蒲団の皮まで盗られたので、どうにもなりません。畳は表の蔭だけ切り取つて行きましたよ」と言うと、皆が怪訝な顔をする。先方では、あの研究は航空気象に関係があるので、航空に関する研究

の中止命令にひっかかっていると思っているらしい。しかし米国側からは、研究の激励の言葉は再三受けたが、禁止的の言葉は一度も聞いたことがない。

終戦以来、あの研究所の施設は取り壊した方がいだろうという勧告を、日本人たちからしばしば受けた。しかし飛行機の研究さえしなければ低温の世界の気象学的研究を禁止されるはずはないと思つて、そのままにしておいた。そして実際にその通りであつた。日本の国に飛行機がなくなつた今日、誰も酔狂に飛行機の研究などするわけもなく、それくらいのは、アメリカ側にも分つてゐるはずである。ニセコの研究の出来なくなつた理由は、泥棒にはいられたからである。「硝子を割つた者」は日本人なのである。

戦争が済んで莫大な消耗がもうなくなつたのだから、半年もしたら、庶民の生活も今少し楽になるだろうとの希望的観測が、終戦後間もない頃、一般に期待されていた。しかし今日になつて見ると、その希望的観測は裏切られている。敗戦の痛手というものは、そう簡単に糊塗ことし終おひせるものではないらしい。

社会科学を勉強した人たちの意見によると、敗戦の重圧が本当に表面に現れて来るのは、戦後一年とか二年とか相当の時日が経たつてからのことだそうである。前大戦後の独逸の状況が一番明らかな例であつて、その他にも沢山同様な例があるらし

い。一旦いったん法則として見出された以上、それは無慈悲なほど強力な動かし得ないものである。従つてそういう意味では、我が国のこれから先一年とか二年とかの期間は、前途極めて暗澹あんたんたるものがあることを覚悟しておく必要がある。

唯此ただこ処に、一つこういう考え方もあるように私には思われる。

社会科学の法則は、なるほどその通りであろう。自然科学の法則で、すべての物は慣性をもつていて、一旦動き出したものは、それを止めるに力が要いることが立証されている。それと同じようなことが社会問題にもあると言へば、それは十分理解し得ることである。

敗戦の痛手が、戦後相当の期間を経て効いて来るということは、私もその通りであろうと思う。しかしその影響が効いて、来ることと、それが現れて、来ることとは、必ずしも全部が一致しなくてもよいのではないかという気がする。敗戦国では輸送の混乱が起こるのは避くべからざることであろう。従つて汽車が混むのは当然である。しかしそのことと、窓硝子を割ることとは、必ずしも一致するとは限らない。影響が効いて来るのは、一つの法則であつて、これは動かし得ないものとしても、それが現れて来るまでの過程の中には、制御可能な要素が沢山はいつているのではないかと思われる。

それに類似の現象は、農業と天候との間の関係にも見られる。農業を支配する最

大の要素は天候であつて、品種とか肥料とかいうものも勿論大切であるが、天候の影響の方が圧倒的に重要な役割を占めている。ところが従来の農業では、その一番大切な要素である天候に対しては、無条件に屈伏していた傾きがある。

天候は勿論人間の力では左右し得ないものである。しかしそれが農業に及ぼす影響を分析してみると、その中には制御可能な地上条件を通じて影響している要素がかなりあるように思われる。例えば春さき雪がなかなか融けないために作付が遅れるとか、寒国地方で水田の水温が低いために冷害の厄を蒙るとかいうような問題は、もちろん天候に起因しているのであるが、機巧を見れば、それは或る程度まで科学の力で制御し得る要素を通じて作用しているのである。従つてそういう意味では、科学の力によつて或る程度まで天候を克服し得ると言つても差支えないであらう。

それと全く同じようなことが、今度の場合にもありそうである。もつともこういう類推は、厳密に言えば譬喩であつて、何も傍証的な意味があるわけではない。しかし今日われわれが「戦争に敗けたんだから仕方がないや」と言っている事件の中に、本当に仕方がないものが果してどれだけあるか、それは甚だ疑問である。

今一番恐しいものは、インフレーションと食糧問題とである。この両者は結局は同じもので、生産低下の問題に帰する。生産の低下というのは、要するに能率の減退である。この頃電話をかけるごとに、私はつくづく日本国中がこの調子であつて

は、生産の低下するのをもっともだと感ずる。受話器をとつてから、交換手が出るまでに、ひどい時には五分もかかる。やつと出て来たので番号を告げると、言下に「御話中」と断られる。同じようなことを二、三回繰り返して、漸くようやくのことに通ずる。相手は官庁などのが多いので、向うの交換から当の相手までの間にまた「御話中」がある。それが運よく通ずると、農政課のところに農産課が出て来る。それで切ってもらうと、全部切れてしまう。改めてやり直しである。局がまたなかなか出て来ない。漸く出て来ると、今度はまた「御話中」である。

交換が間違えるのは、非常に繁忙だからやむをえないのだと一般には考えられている。しかしこの場合、繁忙だから間違えるという外ほかに、間違えるから余計に繁忙になるということも、一応考えてみる必要がある。電話をむやみとかけるのは、結局用が足りないからである。番号を間違えれば、改めて掛け直すから、それだけ忙しくなる。もっともそのために通話回数が増えることぐらいは、多寡たかが知れているが、それよりも恐しいことは、人心をいらだたすことである。その点は番号の間違いいばかりが問題ではなく、受話器を取つてから、三分も五分も待たされれば、大抵の人はいらだつて来る。人心がいらだつて来れば、手紙や葉書で済む用事にまで長距離電話をかけるような風潮になる。一度で済む電話を二度かけるのも、その症状の一つの現れである。そのために「お話中」が増え、それがまた人心をいらだたせ、

益々電話を繁忙にする。こうなつては正に病的の現象である。

電報も同じことである。文字が滅茶苦茶に間違つていて、どうしても意味が分らない。そのために問合せの電報を打つて返事をとるので、一度で済むことが三倍の手間を要することになる。間違つていなくても、ひどく遅延したために、もう用件が間に合わなくて、断りの電報を打つ。それに対してまた電報が来る。これでは電信係の人もたまらないことであろうが、われわれも非常に迷惑する。そして益々電報事務を繁雑にするのである。

話の勢いで、通信関係だけに苦情を言った形になつたが、これは何も通信関係だけの話ではなく、現在の日本のすべての方面に見られる現象である。七千八百万の同胞が力を合せて、御互いに能率を低下すべく、へとへとになつて努力しているよ
うな形である。これでは物の不足は当然であり、インフレーションの根本解決策も
立たないわけである。

入学試験の際に、一つ難問にぶつかつて、時間がどんどん経つて行く場合、慌て
たらおしまいである。そういう場合には、まず深呼吸でもして、ぐつと気持を落付
けさすに限る。

そういうつもりで、自分の場合について、終戦後六カ月間の仕事をふり返つてみ
ると、殆んど九割までの努力は負を零にする努力であつたように思われる。そして

その負の全部が、少くも直接には日本人の手によつたものである。そういう意味で、われわれが今日直面している危機は、戦争に敗れたから起つたというよりも、自身に敗れたためであるという方が適切であろう。

もしこういふ見方が、現在の国情の一側面を幾分でも表しているものであつたならば、危機突破策の一要素は極めて明かである。それは国民が今日において平常心を失わないことである。物質と物質との戦いの最中に精神論を強調し、今最も精神を必要とする秋に、精神を忘れていゝのではなからうか。到る処で「硝子を割る者」が皆日本人であることを思えば、われわれが今日直面している多くの困難は、その大半がわれわれ自身で齎したものである。「戦争に敗れたのだから」といふ言葉はなるべく使わない方がよいであろう。

(昭和二十一年八月一日)

流言蜚語

八月二十四日の真夜中、当分杜絶になるという最後の連絡船に乗って本州へ渡つた。

船は樺太かひろかこからの引揚民ひきあひみんで一杯であつた。人々は折り重かさなつて冷つめたい甲板上こうばんじょうにねていた。それからそれにも増して混まんでいる東北線とうほくせんで一昼夜揉もみ潰つぶされて、やっと東京へ着いた。

東京は全く平穩であつたが、帰りの汽車は復員輸送で行きよりもつとひどく混んでいた。前後二週間近くのこの苦しい旅行で得たものは、日本全国流言蜚語の洪水だという感じである。自分で直接見たもの以外は、人の噂うわさなどは全部流言と思つて差支えないという確信を得ただけでも、今度の東京行は大いに有意義だつたという気がした。

出発前にちよつと仕事の関係で北海道の田舎あの或る村へ寄つたら、東京は大混乱だという噂うわさが拡ひろがっていて、まるで死地へでも乗り込むように言われた。実際に行つてみると、東京は一番平靜な街であつた。帰りは技術院関係の友人と一緒に北海道へ来る用事があつて、技術院の証明を持って上野うえのへ切符を買いに行つた。その人が駅から帰つて来ての話では、青森で七千人溜たまっているからと言つて、切符を売つてくれなかつたということであつた。私は往復切符をもつていたので、一人で先きに立つて来てみたら、青森では一人の積み残しもなく、全部船に乗れた。

流言蜚語の培養層を、無智な百姓女や労働者のような人々の間だけに求めるのは、大変な間違いである。関東大震災の時にも、今度と同じような経験をしたことがある。あの時にも不逞鮮人事件という不幸な流言があった。上野で焼け出された私たちの一家は、本郷の友人の家へ逃げた。大火が漸くおさまっても流言は絶えない。三日目かの朝、駒込の肴町の坂上へ出て見ると、道路は不安気な顔付をした人で一杯である。その間を警視庁の騎馬巡査が一人、人々を左右に散らしながら、遠くの坂下から馳け上って来た。そして坂上でちよつと馬を止めて「唯今六郷川を挟んで彼我交戦中であるが、何時あの線が破れるかもしれないから、皆さんその準備を願います」と大声で怒鳴ってまた馳けて行った。もう二十年以上も前のことであるが、あの時の情景は今でもありありと思ひ浮かぶことが出来る。勿論全く根も葉もない流言であつた。

そんな馬鹿なはずはないと思われることは、どんな確からしい筋からの話でも、流言蜚語と思つて先ず間違いはない。そういう場合に「そんな馬鹿なことがあるものか」と言い切る人がないことが、一番情ないことなのである。

八月十六日の夜中に、けたたましい電話の音で起された。「一刻を争う重大問題だそうですから、直ぐ電話にかかつて下さい」と家の者が蒼い顔をしている。聞いてみると、なるほど重大問題である。小樽へソ聯兵が二万上陸したから、戦時研究

関係の重要書類を直ぐ焼却しろという話なのである。もうみんな非常呼集で集っているという。前日からの疲れでぐっすり寝込んだ寐入端ねいりばなを起されたので、大分不機嫌である。大体あの小樽の埠頭設備ふとうで、二万の武装兵力が上陸するのに何日かかるか、とても一日や二日で出来る話ではない。夕方まで何事もなかったのに、三時間や四時間後にもう二万の兵隊が出現しているとしたら、それはアラビヤナイトの兵隊である。御免ごめんを蒙こうむつてまた床に潜り込んでいたら、一時間ばかりしてまた電話が来て「今のはデマだったそうだから」という話で覺けりがついた。

東京でも同じような話が沢山あったそうである。終戦から二、三日目に、某区で「今夜アメリカの兵隊が来るから、米国の国旗を用意し、御馳走ごちそうを作つて待つているように」という布告を回覧板で廻した所があった。某研究所長の話であるが、その研究所員の若い夫人が、回覧板を見て慌あわてて、研究所の夫君のところへ馳けつけたそうである。所長がそれは嘘うそだ、そんな馬鹿な話があるはずがない、一体憲兵隊へ聞き合せたかときくと、まだ聞いていませんと言う。電話をかけてきいてみると、勿論嘘である。その所長は研究員の人に「君たちは百僚有司のその有司の一人じゃないか、こういう場合には、そんな馬鹿な話があるはずがないと言下に言い切れるようにならなくてはいけない」と訓むちえられたそうである。

「そんなことがあるはずがない」と言い切る人があれば、流言蜚語は決して蔓延まんえんし

ない。しかしこの「はずがない」と立派に言い切るには、自分の考えというものを持つ必要がある。そしてそのことは実はかなり困難なことなのである。特にこの数年来のように、もはや議論の時期ではない唯実行あるのみというような風潮の中では、その精神は培われない。

新日本の科学の建設には、まず流言蜚語の洪水を防ぎ止める必要がある。もつともそれが出来た時は、新日本の科学は半ば以上出来上った時であるかもしれない。

(昭和二十年十月八日)

イグアノドンの唄

——大人のための童話——

カインの末裔の土地

終戦の年の北海道は、十何年ぶりの冷害に見舞われ、米は五分作か六分作という惨めさであった。豊作でさえ米の足りない北海道のことであるから、この年の冬は、誰も彼も皆深刻な食糧危機におびやかされた。

それにこの冬は、例年にならない珍しい大雪であった。毎日のように、暗い空からはとめどもなく粉雪が降りつづき、それが人々の生活の上に重苦しくおおいかさつていた。この雪に埋れた不安な生活の上に、陰鬱な日々がただ明け暮れて行くのを、じつと我慢して春を待つより仕方がなかった。

私たち一家は、この冬を、羊蹄山麓の疎開先で送った。此処は有島さんの『カインの末裔』の土地であつて、北海道の中でも、とくに吹雪の恐ろしいところである。「吹きつける雪のためにへし折られる枯枝がややともすると投槍のように襲つて来た。吹きまく風にもまれて木という木は魔女の髪のように乱れ狂つた」というのは、有島さんの有名な描写である。この荒涼たる吹雪の景色は、今日も少しも変らない。そしてこの無慈悲な自然の力に虐げられている人間の姿もまた、往年の名残りを止めている。

終戦の年の冬は、この自然の猛威の外に、今一つ食糧危機という恐ろしい脅威が加わっていた。見渡す限りの土地は雪に埋れている。吹雪の日には、雪までも白くはなく、死んだような灰色である。葉の落ちた闊葉樹はもちろんのこと、雪に蔽われた針葉樹にも、緑の色は全然見られない。この一点の緑もない世界、満目唯灰色一色の世界では、食糧の不安感が、ひしひしと人の心に迫る。「雪が解けて、たらの芽でも何でも、青いものが出て来るようになれば」と、人々は遠い春をはるかに望んで、力弱い溜息をもらす。

北海道の長い冬休みを、子供たちとこの疎開先で過した。遊び道具も本もない疎開先の生活で、とくに連日の吹雪の夜など、子供たちはよく私に話をせがんだ。幸い薪だけは豊富にあつたので、どんどんストーヴにくべて、その周囲に皆が寄りそっていた。勢よく燃える薪の音が、戸外の激しい風の叫びをわずかに押えて、生命の営みを辛うじて表象しているというような夜が、每晚つづいた。電燈はもちろんです暗かった。凄じい風の音につつまれながら、それは妙に気の滅入る沈黙の世界であつた。

『失われた世界』

子供たちは、もう浦島太郎うらしまたろうの時代をとくに過ぎていたので、話といつても、その種はなかった。それに本も手近かにはないので、すぐ話の種につまんで、大いに弱らせられていた。ところがどうしたはずみか、荷物を片づけているうちに、妙な本が一冊ころがり出て来た。コナン・ドイルの『失われた世界』ロスト・ワールドの廉価本れんかほんである。

これはもう二十年前に、ロンドン倫敦でモラ貫った本である。オランダの理論物理学者であるが、リケン理研でシボラ暫く一緒にいたことがあるので、その後も親しくしていた。そのデーケが倫敦の学会へやって来た時、ホテルのロビーでこれを読んでいた。そして別れしなに、丁度読み終ったこの本を、私に残して行ってくれたのである。その時はすぐ読んでみて、たいへん面白かったのであるが、それなりに忘れてしまっていた。それが二十年の後に、敗戦後の北海道の僻地へきちで、わずかな疎開荷物の中から、ひよっくり現れたのである。

これはまことに大助りであった。南米アマゾンの秘境、人界から遠く隔絶された「失われた世界」に、ジュラ紀時代から生き残っている巨大爬虫類はちゆうるいが棲すんでいる世界がある。その秘密を求めて、英国の科学者たちが、敢然魔境に踏み入って行く。こ

の「探検記」こそは、カインの末裔の土地で、連夜の吹雪にとじこめられている敗戦国の子供たちにとつては、何よりの贈り物であった。

「この本は、英国のチャレンジャー教授という先生が、南米のアマゾン河のずっと上流のところ、もちろん人間など一度も行つたことのない秘密の世界なんだが、そこへ探検に行った時の報告なんだ。古代の恐ろしい竜だの、怪獣だのが其処そこに本当にいたんだよ。何時いつか雑誌で見たでしょう。デイノザウルス（恐竜）なんていう竜の中には、このおうちの三倍くらいもある大怪物もいたんだが、それがのそつそつのそつと歩いていてね。イグアノドンなんていうのもいたんだよ。ああいう竜は、ジュラ紀とって、一億年以上も昔の時代には、たくさんいたことがよく分つているんだ。化石になつて残つているからね。それが今でも生きていて、そういう古代の生物ばかり住んでいる世界が、アマゾン河の上流にはあるんだ。どうだ、今夜からこの本を一節ずつ読んでやろうか」というと、もちろん子供たちは、歓声をあげた。

まだ小学校へ行つている下の男の子などは、もうそれだけで、すっかり上気してしまつた。頬ほほを赤くしながら、眼を輝かせて、「本当？ 本当？」と、覗のぞき込む。もちろん小説であるから、写真や図などはない。幸い秘境ひきょうに到いたる道順を描いたスケッチ地図が、一枚だけついていたので、それを説明してやると、この方は簡単に承服してしまつた。

「これが断崖だんがいだよ。低いところで千尺じやく、高いところは三千尺もある。真直まっすぐにつき立った岩壁ですつと囲まれているんで、この崖がけの上は、外の世界からすつかり切り離されているんだ。だからこういうところに、古代の生物が生き残つていても、誰も知らなかったわけだよ。もつともこの断崖へ行くまでが、たいへんなんだ。これがアマゾン河の上流で、ここだつて普通の船は行かないところなんだ。これからこの支流を小さい丸木舟でのぼつて行くんだが、もちろん普通の人間は誰だれも行つたことのないところさ。それでもこの辺までは、まだ人食人種ひとくいがところどころにいてね、道など一本もない恐ろしい密林の奥から、首切りの祭の太鼓の音が、かすかに聞えて来ることもあつたのさ。しかしこの細くなつているところね、これから先は、カヌーも行けなくなるんで、みんなで荷物をせおつて歩いて行つたんだよ。もうここまで来ると、人食人種だつていなくなつて、人間なんて、全然ないところになつちやうのさ。ほら此処ここに印をつけてあるだろう。此処で初めてプテロダクテイルを見たんだよ。プテロダクテイルつて、翼のある竜なんだ。戦闘機くらいもあるかな」

ここらあたりで、下の子供はもうすつかり興奮してしまつて、すうすうと寝息のよくな息をしている。そして眼を光らせながら、身動きもしない。二番目の娘も「本当らしいわ。よくそんな本があつたね」という。唯一人、もう女学校にはいつていた長女だけが、なかなか承知しない。「小説でしょう。小説みたいな本じゃないの」

と、英語が分りもしなくせに、生意気なことをいう。

科学の素晴らしい進歩によつて、人間はもう地球上のことは、何もかも知り尽くしたように思っている。しかしまだ何が隠されているか知れたものではない。『ロス・ワールド』の恐竜や翼肢竜よせしりゆうこそは、さすがにその現存の可能性は考えられないが、それに類する事件は、近代になつても、時々実際に起つている。少し昔の話でよければ、南米の海岸に、牛くらの大きさの動物で、脚が六本ある怪物の屍体しかたいが、漂着したことがある。大部分腐つていたので、その詳細な記録は残つていないが、そういう怪物が、まだ神秘の大洋の何処かで、ひそかに棲息せいそくしているのかもしれないと考へた方が、かえつて科学の心に通ずるであろう。

一億年前の怪魚

『コンテイキ号漂流記』の著者は、まことに巧うまいことをいつている。古代インカ帝国の住民が使つていたのと、全く同じ筏いかだを造つて、この若い探検家は、南米からタヒチ島の近くまで、自分で漂流を試みたのである。そして南太平洋の大洋の真中まんなかで、いろいろ不思議な生物に遭遇している。

近代の文明人は、大きいそして強力な汽船を造つて、即ち科学の巨大な力を利用して、七洋を隈なく調べつくしているが、唯一つ大切なことを忘れてゐる。それはそういう立派な汽船は、船体も大きくまたスクリュウの音も大きいということである。近代の探検船では遭遇しなかつた怪物を、筏の漂流者が目撃することがあつても、別に不思議ではない。海面すれすれのところに、じつと坐り込んで、二カ月以上も潮流と風だけに送られて、あの広大な太平洋の真中を漂つてみた人は外にはいない。そういう人間だけにその姿を見せる怪異な生物がいたとしても、別に不思議ではない。この漂流者は若い考古学者であつて、小説家ではない。しかもこの冒険は、今度の大戦後に行われた、ごく最近の話である。

海はあまりにも広く、船が通るところは、その極めて僅かな部分にすぎない。しかもわれわれの知識は、海面からごく近いところの水中だけに限られている。深海探測といつても、調べ得るところは、海の面積から見たら問題にならない。大洋の唯中、その深所には、何が棲んでいるか、人間の想像の及ぶところではない。その一番良い例としては、先年南アフリカの海底から、少くも五千万年以上、多分一億年くらい前の太古の怪魚が、本当に生きた姿で出現した異常な事件を挙げるべきであろう。

それは昭和十三年十二月二十二日のことであつた。即ち日華事変が最高潮に達し

ていた頃の話である。英領南アフリカ喜望峰の近くに、東倫敦という小さい漁港がある。その西方数哩の海底から、トロール網にかかつて、不思議な魚が揚つて来た。全体長一米半、目方七十五匁の大きい魚で、全身は青色に輝いた金属光沢を帯び、魚体は脂ぎつてびかびか光つていた。頭は西洋兜のような形をし、胸及び腹の鰭は、赤児の腕の先に羽がついたような怪異な恰好になっている。更に著しい特徴は、脊柱がずっと尾鰭の真中を突き抜けて伸び出ていることである。如何にも古色蒼然として、一見古代生物の異風をそなえた曲者であった。この怪魚こそは、中生代の白堊紀、即ち少くも五千万年以上の太古において、既に地球上からその姿を消していた、総鰭魚類の空棘魚科に属する化石魚であったのである。

この種類の化石魚は、古代生物としても、非常に古いもので、巨大爬虫類のディノザウルスなどが、その怪異な姿を見せていた時代、即ちジュラ紀よりも、更に一億年近い太古において、既に地球上に出現していたものである。最初にこの魚類の化石の現れるのは、古生代のデヴォン紀であつて、それは現在の知識では、現代から、二、三億年も昔のことと推定されている。それからずっとこの異魚は、たいした体形の変化もなく、中生代末の白堊紀即ち、ジュラ紀の次の時代まで、太古の海中に種属の繁栄をつづけて来た。そして巨大爬虫類の怪物たちが、地球上からその姿を消した次の時代には、この魚たちも完全に絶滅してしまつたのである。少くも

昭和十三年の十二月二十二日までは、そう信ぜられて来ていた。

ところがその五千万年乃至一億年以前の魚が、突如として南阿の一角に出現し、暫時ではあったが、現にこの太陽の光の下で、その生命を見せてくれたのであるから、この方面の専門学者たちはもちろんのこと、世界中の人々をあつと驚かせたのも、当然のことである。当時この話は日本の新聞にも載り、また翌年の『科学』には、詳しい紹介がなされた。それは匿名の紹介であったが、原著よりも分りよい立派なものであった。しかし丁度その時期は、漢口陥落の提燈行列を過ぎて間もない頃であった。日本人の大多数は、南アフリカで獲れた奇魚などに、かかわりあつてはいられなかった。

この話は、コナン・ドイルとはちがつて、本当の話である。その標本は、漁獲後間もなく、東倫敦博物館の主事ラチマー女史の手許に送られた。同女史はこの方面の専門家ではなかったが、その怪魚の異風に驚き、標本のスケッチに簡単な説明をつけて、グラハムスタウンの大学のスミス博士に手紙で報告した。ところが時々々クリスマスシーズの季節にあたったために、手紙の配達がおくれ、僅か四百哩を隔てたスミス博士の手に入るまでに、十日以上の日子を要した。そしてことの重大さに驚愕したスミス博士が、折返し電話で連絡した時には、残念ながら、魚体は既に腐敗し、外形だけが剥製となつて残つていたのである。それでも確かに五千万年以上の昔に

絶滅したはずの空棘魚であることは、確認されたのであるが、学問的に最も重要な部分、即ち内臓その他の軟体部分は、遂に神秘のヴェールかなたの彼方に隠されたまま、闇やみから闇へ葬り去られたのである。

世界中のこの方面の学者たちは、スミス博士の第一報を、英国の科学専門雑誌『ネーチュア』誌上で知って、驚愕と歓喜との念に打たれ、この発見を「今世紀における動物学界随一の大収穫」とした。まさに文字どおりの奇蹟きせきであったのである。この発見の意義が、あまりにも大きかっただけに、その重要部分の喪失は、甚しい失望感をもって迎えられた。その詳細を記述したスミス博士の第二報が、同じく『ネーチュア』誌上に出た時は、世界各国の学者から、激越な批判の手紙がたくさん来たそうである。これは突如冥界ゆいかいからの通信に接して驚愕した人間が、いざ話しかけようとした時に、その通信が切れたような感じである。惜しいといえ惜しいが、またそれでよいのだという気もする。それほどの異常事件なのである。

『ロスト・ワールド』の話の前置きとしては、この「化石魚の蘇生」の話くらい巧い話は、ちよつと他に類がないであろう。それで第一夜は、子供たちにこの現世化石魚の話をすることにした。ストーヴに薪を追加しながら、南アフリカの海底から突如として出現した、五千万年乃至一億年前の太古の怪魚の話を聞いている子供たちは、戸外の吹雪も、乏しい食糧のことも、すっかり忘れたようであった。

幸いこの詳しい紹介の載っている『科学』が手許にあったので、一通り話をしたところで、写真を見せてやった。剥製にされた怪魚の写真と、ジュラ紀の空棘魚の復原図とを並べたところを見ると、両者は全く一致している。これにはさすがの長女もいささか驚いたようであった。

復原図の方が、もちろんこの現世空棘魚の出現以前に描かれていたものである。化石として残るのは、たいてい硬骨部分の一部と、その他の部分のかすかな痕跡こんせきとである。そういう断片的な材料をもとにして、化石学者たちは、原体制の復原という困難な仕事をなすとげる。それはいわば「小説」をつくるのである。しかしこの場合は、その「小説」にぴったりとあつた生きた証拠が出て来たのであるから、その点だけでもまさに驚くべきことである。「ほんとにねえ」と、最後に長女が陥落する。これで『ロスト・ワールド』の話に、安心してはいつて行けるわけである。

アマゾンの秘境

この「探検記」は、チャレンジャー教授の探検隊に参加した『デイリー・ガゼット』の記者マローン君の手記から成っている。チャレンジャー教授は、かんしゃく癩癪持ちで、

人間嫌いで、時々狂暴性を発揮する人物である。学界からも倫敦人ロンドンからもひどく嫌われているが、動物学者としては、独創的な考えを持ち、かつ甚だ実行力に富んだ人である。そのチャレンジャー教授は、かつて単身南米アマゾン上流の秘境を探検したことがある。アマゾンの上流は、たくさんの支流に分れていて、その中には、まだ白人の足を踏み入れたことのない支流がいくつも残されている。

チャレンジャー教授は、カヌーに乗って、その支流の一つを遡航そこうした。そしてインディアンインディアンの部落で、丁度今息を引きとったばかりの白人の遺骸いがいにあう。その僅かわずな遺品を整理して、この白人は、アメリカのデトロイトの市民ホワイトという人であることを知る。画家でありかつ詩人であるこのホワイト君は、アメリカの物質文化に飽き果てた挙句あげく、新しい靈感を求めて、アマゾンの秘境を放浪していた男であるらしい。「疲れ切った姿で、クルプリの棲む密林すみの方から、さまよい出て来て、部落にたどりついた途端に倒れた」という以外には、この男のことは何も分らない。クルプリというのは、南米インディアンインディアンの間に広く行き渡っている伝説で、山の精を意味する。この山の精に遭あった人は、再び生きて人間の社会には戻れないと、昔から確く信ぜられていたのである。

ホワイト君は、死ぬまで肌身はなさず、一冊の写生帳を持っていた。ぼろぼろになったジャケツトの下から出て来たこの写生帳が、話の発端である。その中には、

いろいろな写生があるが、終りの方に、平原の彼方に、切り立った断崖に縁どられた高台の絵がある。そしてその次に、巨大な怪物の写生があつて、それでおしまいになっている。そしてそれはジュラ紀の恐竜の一種ステゴザウルスそのままの姿なのである。

初めてチャレンジャー教授を訪れた時、マローン君は、この写生帳を見せられる。そしてランケスター氏の著書に出ているステゴザウルスの復原図とくらべて見て、両者が完全に一致していることにひどく驚いたのである。これが始まりで、いろいろな経緯の末、けつきよくチャレンジャー教授を首班とする探検隊が、この失われた世界に出かけ、ステゴザウルスやイグアノドンの生きた姿を見ることになるわけである。南アフリカにおける現世空棘魚（くわんせくせきぎよ）の発見の話は、このコナン・ドイルの小説を、まさに地で行ったものといえよう。

昨年暮、英国のエヴェレスト遠征隊が、ヒマラヤで奇怪な人獣の足跡を発見したという記事が、一時新聞紙上を賑（にぎ）わしたことがあつた。その時、食卓の話題に上つたのは、この五年前の『ロスト・ワールド』の話である。もう大きくなった子供たちには、「おやじさんの嘘（うそ）」もすっかりばれてしまっていたが、人界を遠く離れた、アマゾンの秘境がもつ特異の妖（あや）しい美しさは、依然として頭の底に残っていたらしい。「ほら、あの失われた世界への入口のところ、カヌーがもう行けなくなるあたり

ね。あの細い川のところ、あそことても綺麗だったわ」といい出したのは、そんなことなどとても憶えていそうもない二女であった。

探検隊を乗せた二隻のカヌーは、隠された細流の入口に達する。浅黄色の葦が一面に生い茂った葦叢の中を、数百碼ばかり無理にカヌーを押しで行くと、突如として、静かな浅い流れに出る。水は驚くほど透明で底は美しい砂になっている。川幅は二十碼くらいの狭い流れであつて、兩岸の植物は、自然の豪華の限りを見せている。それはまさに仙境であり、これこそ失われた世界への入口なのである。繁り誇つた熱帯の草木は、水面の上に生いかぶさつて、自然の天蓋を作り、緑の葉をとおして来る黄金色の日光は、黄昏を思わせる美しさである。その青緑のトンネルの下を、緑の静かな流れが行く。流れの美しさは、樹間を洩れる光によつて異常な色調を帯び、不思議な美しさを呈している。その輝く水面の上を、カヌーの一擧ごとに、数千の漣が伝わつてゆく。それは神秘の国への通路として、まことに適わしいものであつた。

コナン・ドイルもこのあたりの描写には大分馬力をかけているようである。どうも御本人自身が、ロスト・ワールドにあこがれているらしいところが大いにある。彼は、何時までも童心を失わなかつた人なのであろう。子供というものは、魚粉と稲茎の粉とのまじつた団子を食べたことは忘れるが、そのとき聞いたアマゾンの秘

境の情景は、なかなか忘れないものである。

ヒマラヤの人獣の足跡

もつともすべての大人にも、多かれ少かれ、この童心は残っている。ヒマラヤの怪巨人にしても、何も今度突然出現した話ではない。昭和十一年に、立教大学のナンド・コツト登攀隊が、印度に遠征した時にも、たいへんな騒ぎが起きていたそうである。ヒマラヤ山麓の村に、身の丈四十呎の怪物が現れ、土地の住民はもとより、全印度人の間に大評判になっていた。この怪物は、汽車をまたいだり、大きい樹木を踏み倒したり、婦女子を気絶させたり、散々あばれ廻った挙句、再び山中深くその姿を消してしまった。その時足跡が残されたのであるが、それは長さ二十二吋、幅十一吋もある巨大なもので、人間の足跡に似た形であったという。

ヒマラヤの山中に巨人かゴリラか分らない怪物が棲んでいるという伝説は、土地の人たちばかりでなく、印度人の中でも信じている人がかなりある。昨年のエヴェレスト登山隊長シプトン氏の手記によると、ヒマラヤの住人たちは、この怪人をヤテイ（縁起の悪い雪男）と呼んでいるそうである。シプトン氏の案内人の一人は、

二年前にこのヤテイに遭ったといっているが、それは半人半獣の怪物で、背丈は五呎六寸くらい、全身赤味がかつた栗色の毛で蔽われていたが、顔だけは毛がなかったという話である。

シプトン氏が写真に撮った奇怪な足跡を、動物学者たちは、ラングール猿だと鑑定したが、シプトン氏は大分不服のようである。『朝日新聞』に連載された氏の手記の中から、これに関係した部分を抜萃してみるのも、興味あることであろう。この足跡を発見したのは、昨年十一月八日のことで、エヴェレストに近いメンルンツエの氷河の上である。「われわれは午後三時半、峠の向う側の氷河に達し、南西の方向に下って行つた。丁度午後四時、行く手の雪の上に奇妙な足跡を発見した」「奇怪な生物は少くとも二頭以上が打ち連れて通つたことが、入り乱れた足跡によつて確認された。その大きさはわれわれの山靴の跡よりは幾分長く、幅は非常に広がつた。詳しく調べると、三本の幅広い足指と、別に横に張り出した大きな親指とが認められた。われわれはその足跡を追つて一哩マイルあまり氷河を降つたが、氷がモレインに蔽われた場所で、はつきりと切れていた」

この足跡は、写真撮影もされ、また観察者がちゃんとした人だけに、汽車をまたいだ怪巨人の話とは少しちがった意味がある。従つて動物学者たちも、放つておくわけには行かない。鑑定の結果、ラングール猿ということになつたのであるが、こ

れに対するシプトン氏の反対意見には、もつともなところがある。

第一に、ラングール猿は肉食動物であるが、高度一万九千呎の氷河の上で、植物は何があるのだろうか。肉食動物ならば、氷河の下部にはモルモットもチベット鼠も棲んでいるので、それらを常食として生きて行けるが、肉食動物は、こういうところでは、生存し得ないはずである。

第二に、ラングール猿の足形は、どんなに大きいものでも、長さ八吋を越えるものは、今まで知られていない。ところが問題の足跡は、十二吋以上と実測されている。もつとも多くの足跡は形が崩れているので、雪解けのために、幾分大きくなつたと考えられる。しかし氷河の氷の上に積っていた雪は、きわめて薄く、かつ足形がはつきり残っていたところから見ても、雪が解けて大きくなつたとしても、大したちがいはないはずである。それでこの怪物は、既知のラングール猿よりは、遥かに大きい生物にちがいない。

この議論の当否は、ここで論議すべき問題でない。唯一つ確かなことは、シプトン氏が「私はこの問題については門外漢で、くちほし 嘴を入れる筋合のものではないが」動物学者の鑑定には異論があると言った、そのこと自身の中に、彼の童心が認められる点である。

ヒマラヤでは、この前年、即ち一昨年にも、アッサム州の密林の中に、体長九十

呟、身丈みのたけ二十呎の怪物が出現して、住民を震ふるえ上あらせたという話がある。体長九十呎のこの怪物は、ジュラ紀デインザウルスの恐竜に似た形をしていたといわれている。ロスト・ワールドの夢は、原子力の世界にも、なおその生命を保っているのである。

イグアノドンの唄うた

『ロスト・ワールド』の話の中で、一番子供たちに人気のあったのは、大きいくせにおとなしいイグアノドンであった。このジュラ紀の肉食性巨大爬虫類はちゆうるいを、コナン・ドイルは原始人類の家畜となし、象の皮膚のようなその皮の上に、粘土のマークをつけさせた。それを地質年代の錯誤と早まってはいけないので、同じ時代の空棘魚くうきよくぎよが、喜望峰州の住民と、先年ちやんと対面たいめんをしているのである。

イグアノドンが、子供たちの間で如何いかに人気があったかは、次の唄でも十分うかがうことが出来る。

イグアノドンの背中に

ゴリラが乗ってった 乗ってった

ゴリラの背中に

お猿が乗ってった 乗ってった

お猿の背中に

鼠ねずみが乗ってった 乗ってった

鼠の背中に

蚊かとんぼが乗ってった 乗ってった

蚊とんぼの頭の上を

艦載機がが飛んでった 飛んでった

このイグアノドンの唄を作ったのは、下の男の子である。自分の身体の栄養低下も、実感としては何も知らなかった子供たちは、カインの末裔まつえいの土地で、「イグアノドンの唄」をうたって、至極御機嫌ごきげんであった。しかしその男子は、その後間もなく、栄養低下が禍わざわいして、仮りそめの病気がもとで、急に亡くなってしまった。しかし生き残った娘たちは、今はきわめて元気である。

この暮から正月にかけて、私は扁桃腺へんとうせんの除去と、蓄膿症ちやくのうしやうの手術とのために、K病院へ入院した。二十年来の懸案を片づけるためである。この道では、日本一の名国手なこくしゆと称たえられているK博士の手術を受けるのであるから、何の不安もなく、経過もきわめて順調であった。

時々妻と交替に付き添いにやって来た長女は、何も用事がないので、初めは少し

手持無沙汰てもちぶさたのようであった。それで或る日、『ロスト・ワールド』を持ってやって来た。昼寝をするために、夜早く寝つかれなかった私は、十二時頃まで寝つこうとしないことにして、ベッドの上でぼんやりしていた。時々ちよつと目をやると、長女は夢中になって、読みふけっている。「どうだい、面白いのかい」ときくと、「うん、とっても」と、返事をするのも億劫おっくうのように、頬ほおをほてらせている。

「分るのかい。大分むつかしい名前があるだろう」といつても、「そうよ。でも辞書なんか引いていられないのよ。今失ミッシングわれた連鎖リンクがやって来るところよ」と、受け附けもしない。もう夜中近いらしい。それでよいのだ、生きる者はどんだん育つ方がよいのだと、私は目をつぶって寝入ることにした。

(昭和二十七年四月一日)

淡窓先生の教育

先日、日田^{ひた}へ行く機会があったので、広瀬^{ひろせ}淡窓先生の旧屋、秋風庵^{しゅうふうあん}を訪ねた。

広瀬淡窓の名前は、前から聞いていたが、機会がなくて、今までその人となりや教育方針のことなどは何も知らなかった。それで庵主古川老のお話は、非常に興味深く、また大いに啓発される場所があった。

門弟四千名、その中からは、高野長英^{たかのちやうえい}、大村益次郎^{おほむらますじろう}、清浦奎吾^{きよらけいご}というような人々が出てくることも、もちろん特筆すべきであるが、それよりも驚くべきは、四千名というその数である。これらの門弟たちは、全国六十余州から笈^{きゅう}を負って集ったもので、全然門弟の来なかつた藩^{はん}は、たしかに二つくらいしかない。青森地方、即ち南部^{なんぶ}や津軽^{つがる}からも、はるかに九州のこの僻地^{へきち}まで、数名の門弟が来ている。

幕末時代の交通機関のことを思えば、これはまことに驚くべき事実である。淡窓塾で、所定の学業を終えれば、学位がもらえて、それであと一生就職には困らない、というようなことももちろんなかつたであろう。藩^{おだな}か大店かの「公費」で遊学したという学生も、絶無に近かつたものと思われる。

門下生たちは、純粹に学問を身につけるために、千里を遠しとせず、九州日田の山地にまで集つて来たのである。今日もし肩書や就職を全然度外視して、四千人はおろか、四十人の門下生でも集め得る教育者があつたら、それは一つの奇蹟^{きせき}であろう。ところで淡窓先生が、これら四千人の門下生に、どういふ教育を施したかという

に、今日のような技能的な教課を教えることは、もちろん出来なかつた。遺された教育課程の中には、やや専門的な課目の名前もまじっているが、淡窓先生の真面目は漢詩人であつて、その教育の大本は、敬天を主眼とした人間教育であつた。

近年復古調になつた日本では、アメリカの六三制を輸入したため、日本の教育は崩れた、淡窓流の人間教育も必要だ、という風なことをいう人もある。しかしそれはアメリカの六三制の実態を知らない人の言である。アメリカでは、六三制の最初の二つ、即ち義務教育であるところの小学校及び中学校では、教育の主眼は、人間教育におかれている。学問は大切なものではあるが、国家が義務として国民に負わすべきものではないという理念のもとに、義務教育では、主として道德教育が施されている。そして初めの六三で、人間教育を一応すませたところで、高等および大衆教育で、学問を教えようという考えである。巧く行つていないところもあるが、それを理念としていることは確かである。淡窓先生の教育方針が、一番よく守られているところ、あるいは望まれているところは、今日のアメリカかもしれない。

(昭和三十年七月二十一日)

語呂の論理

先年北海道で雪の研究に手を付けた時、日本の昔の雪の研究として有名な、土井利位どいとしつらの『雪華図説』と鈴木牧之すずきぼくしの『北越雪譜』とを何とかして手に入れたものと思つて、古書の専門店の方へも聞き合せてことがあつたが、折悪あしくどうも手に入らないので困つていた。ところが、何思わずさういふ意味のことを雑文の中に書いておいたら、早速それでは私のところにあるものを御頒おけしませうと言つて下さつた人があつた。

一人は秋田の人で、文久二年大槻磐溪おつぎばんけい先生の重刻になる『雪華図説』が送られて来た。もう一人は九州の人で『北越雪譜』の七冊揃ぞろいの大変保存のよい本が幸運にも手に入ったわけである。もつともその後間ごもなくこの『北越雪譜』の方は岩波文庫に出て、手軽だれに誰にも手に入ることになつたのであるが、こういう本もなかなか面白いものである。『雪華図説』の方は案外立派な研究で、天保時代てんぽうの日本の自然研究者の仕事も、よく見ると、色々学ぶべき点があるという意味で特に私には興味があつた。『北越雪譜』の方は、昔の雪国の生活の記録が沢山集つていてという点で科学的に見ても大切なものであるが、その一番大切な所以ゆえんは、当時の人々の雪害防止策と、現代の東北や越後地方えちごの人々の採つてゐる対策とが、殆んど同じものであつて、現代日本の文化的あるいは科学的の施設が、これらの地方には殆んど及んでないということが分る点にあるのである。

もつともそういう話は、雪国出の政治家などがいわれた方が適切なのであって、私にとつてもつと面白く思われたのは、『北越雪譜』の中の理論的説明に用いられている一種の論理学であった。徳川時代といつても、天保の頃にもなれば、もう西洋の学問も入っているのです、特にその頃の先進者たちの頭の中には、西洋学的な物の考え方即ち現代のわれわれの物の考え方が充分はいつて来ていたようである。例えば『天地或問珍』のような本の中の自然現象の説明に用いられている広い意味での論理学は、現在の自然科学に用いられているものと、その骨組においては先ず同じものと見て差支えないようである。ところが、この『北越雪譜』の著者鈴木牧之翁は、越後の塩沢しほざわの商人で、時々商用で上京した時に当時のいわゆる文人ぶんじん雅客がかくと交りまじわを結んではいたものの、その全生涯は殆んど越後の雪の中で送られたものと見て差支えない。

こういう北陸の片田舎で育ち、西欧の自然科学的な物の考え方からすっかりかけ離れて生長した人の持つている「自然科学」の一面を見るためには、あるいは『北越雪譜』のようなものが案外良い資料になるのかも知れない。そして私にはこの『北越雪譜』の中に出て来る論理が、何となく純粹に日本的あるいは東洋的なものという気がして大変面白かった。

第一節は「地気雪ちきと成る弁き」であつて、天地の間に、三つの際へだてがあつて、地に近

い温おん際さいから地ち氣きが昇あつて行いつて冷れい際さいに到いたつて、温ぬかなる氣きが消くえて雨あめや雪ゆきになると
 いう話わが書かいてある。この話わは、その中ちゆうに用もちいられている術じゆつ語ごと温ぬ度どと熱ねつの概念がい念ねん
 を訂てい正せいさえすれば、すつかり現代げんたいの科か学がくの説せつになるのであつて、従したがつてその骨こ組ぐだ
 けを見みれば、ここういいう考こうえ方はうは現げん代だい科か学がくと同どうじ仲ちゆう間かんのもものであろう。ももつとも牧ぼく之し
 翁う自身しんも、「是これ余よが発はつ明めいにあらあらず諸しよ書しよに散さん見けんしたる古こ人にんの説せつなり」といいつていいるので
 あるから、此こ處こでは問もん題だいにすするここともななかろう。

とこころで、牧ぼく之し翁うの論ろん理り学がくが躍えつ如じゆとして出いて来きるものものは、ももつと地ち方はう的てきの現げん象さうの
 説せつ明めいである。例れいえば、「初しよ雪せつ」ののとこころには次つぎのよような一いつ節せつがある。

……ももつとも越えつ後ご国こくは北きた方はうの陰いん地ちなれれども、一いつ国こくの内うち陰いん陽やうを前ぜん後ごす。いいかんと
 なれば天てんは西せい北きたにたたらず、ゆゆゑに西せい北きたを陰いんとし、地ちは東とう南なんに足たらず、ゆゆゑに東とう
 南なんを陽やうとす。越えつ後ごの地ち勢せいは、西せい北きたは大海たいかいに對たいして陽やう氣きなり。東とう南なんは高山こうざん連つらりて
 陰いん氣きなり。ゆゆゑに西せい北きたの郡ぐん村むらは雪ゆき浅あく、東とう南なんの諸しよ邑いふは雪ゆき深ふかし。……

この文ぶん章ちやうの中ちゆうに用もちいられていいる陰いん陽やうの考こうえ方はうは勿な論ろん支し那なのももののであろうが、それ
 よりもももつと興きやう味みのあるあるのは、この片へん鱗りんの中ちゆうに現げんわれれていいる論ろん理りでああらう。先まず初しよ
 めめにこの中ちゆうに用もちいられていいる「ゆゆゑに」を色いろ々々に考こうえて見みたのでああるが、私わたしにはど
 うも分わらななかつた。ももつとも「ゆゆゑに」ばばかりではななく、肝かん心しんな定てい理りか仮か説せつになる
 ものといいうのがこの場ばう合がは、「天てんは西せい北きたにたたらず」「地ちは東とう南なんに足たらず」といいうのら

しいのであるが、それが後の越後の地勢とどう連絡しているのか、またこういう仮説がどうして必要なかがなかなか了解出来なかった。勿論論理自身を今問題にしているのではなくて、こういう風に説きすすめて行く方が物事が分りやすかつたらしい牧之翁の頭の作用が、現代の私たちには呑み込めないのである。結局、これは「語呂の論理」とでもいうべきものであろうという結論に達して、さっさと次へ読み進むことにした。

ところが、仙台で小宮さんの御宅を訪ねた時に、丁度水曜の面会日に当たったことがある。その席上で何気なくこの語呂の論理の話をしたら、同席の長谷川君が大変面白がつて、「そういえば、『北越雪譜』の中の雪中の虫のところに「金中猶虫あり、雪中虫無んや」というのがありますね」という話をしてくれた。私はうっかり読み通っていたので、帰ってから早速探して見ると、なるほどちゃんとあった。そして、語呂の論理の例としては、この方が簡潔で良いので、その後はしばしばこの方を借用することにした。

「雪中の虫」の説はなかなかの傑作である。凡そ銅鉄の腐るはじめは虫が生ずるため、錆は腐の始、錆の中かならず虫あり、肉眼に及ばざるゆゑ「人が知らないのであるが、これは蘭人の説である」という説明があつて、その次に「金中猶虫あり、雪中虫無んや」というのが出て来るのである。

「雪中虫無んや」の話は、その時は大笑いになって済んでしまった。そして西洋の自然科学風な考え方の洗礼をまだ受けていない頃のわれわれの祖先の頭の中をちらと覗いたのぞような気がして大変愉快であった。ところがその後よく注意していると、この語呂の論理は案外現代にも色々の所ですました顔をして通用しているということに気がついた。特に驚いたことには、ちゃんとした現代科学の学会の討論などにも、時々「金中猶虫あり、雪中虫無んや」と全く同じ論理が出て来ることがあるのである。もつともそういう論をする人を、徳川時代の頭の人と言おうというのではない。恥はずかしい話であるが、現在の我国わがくにの科学界は世界の水準を抜いているように新聞や雑誌などに時々書かれていることもあるが、それはどうも余所眼よそめの話で、本当に内部に入つて、その学問的地位を冷静に考えて見ると、まだまだ日本の学問は世界的水準に達していないと私には思われる。少し極端に言えば、外国に柿かきに種が六つあるという論文が出ると、梨なしには八つあるという論文が日本で一、二年後に出るような程度のことがかまかなり多いのである。それから見たら、語呂の論理でも何でも、とにかく一つの見識を持つとういうのはまだ良い方であるのかも知れない。

この三、四年来、日本の気候医学の方面で、空気イオンの衛生学的研究が一部で盛さかんに始められた。或る大学あの研究室では、陰イオンが、喘息ぜんそくや結核性微熱に対して沈静的に作用するという結果を得て、臨床的にも応用するまでになっていた。そし

て陽イオンはそれと反対に興奮性の影響を与えるということにされていた。ところが他の大学の研究では、イオンの生理作用は、陰陽共に同一方向の影響があつて、ただその作用の程度が、イオンの種類によつて異なることなという実験的結果が沢山出て来た。それで学会で、これらの二系統の論文が並んで発表された時には、勿論盛な討論が行われた。或る理由でその席上に連つていた私は、その方面とはまるで専門ちがいなので極めて暢氣のんきに構えて、その討論を聞いて面白がつていた。その中にはこういうのもあつた。「陰イオンが沈靜的に働くということは、既に臨床的にも沢山の例について確証されている。これは実験的事実である。それが事実とすれば、陽イオンがその反対に、興奮的に作用するということもまた疑う余地がない」という議論が出て来たのである。これなどは、正しく語呂の論理の適例であろう。もつともこういう立派な学会での討論を「雪中虫無んや」と内容的に同じものといふのは決してないが、論理の形式が同型のものであることは認められるであろう。勿論、実際は陰イオンが沈靜的に働き、陽イオンが興奮的に作用するという研究結果を得られて、その事実を発表しようとしたのであろうが、それを聴衆に納得させようとした時に、不用意のうちに、われわれの祖先の持つていた表現形式が出て来たのである。こういう風に見ると、語呂の論理は日本人の頭の奥底にかなり強い一つの思想形式として今もなお残っているものと見るべきであろう。

こういう例は、勿論外にも沢山あるのであつて、特に或る種の政治家たちの議論には、随分激しい語呂の論理が平気で幅をきかせているようである。先年いつか汽車の中で、こういう種類の政治家らしい人が、肥ふとつて頑丈がんじょうな肩をいからせながら、地方の代表者らしい人を二、三人前に置いて、盛に高説をきかせていたのを見たことがある。丁度或る大学事件がやかましかった頃で、その政治家は、大学の「研究の自由」について盛に論じているらしかった。

「いくら研究の自由だからと言つても、ちゃんと大学令に、国家に枢要すうようなる研究の蘊奥うんのおを極めとある以上、(本当はそんなことは書いてないが) 国家に害あるような研究を自由にやるという法はないじゃないかね」

「いや勿論で御座ございますよ。どうもこの頃大学の先生も少し図に乗り過ぎましたからね」

「そうだよ、そうだよ。少し図に乗り過ぎてているんだよ、常識で考えたつて、国家から金を貰もらつて、国家の機関として研究をしているのに、国家に枢要なる研究をするのは、君、当り前だよ」

という風な話がちよいちよい聞きえて来る。こういう議論は勿論本当過ぎるくらい本当のことで、何も議論になるような問題ではないのである。もしそれが議論になるとすれば、それは語呂の論理の一つの例となるかどうかという点が問題になるだけ

であろう。

この場合、問題になるのは、或る大学の或る教授が、一つの研究をしているとして、その研究が国家に枢要な研究であるか否かの判断を誰だれがするかという点なのである。従来はそれを大学の教授の判断に任せておいたが、とかく専門学者にはそういう判断力が少いから、例えば監督官庁の適当な地位の人がその判断をすることに改めようというような議論だったら、それは議論になり得る性質の話である。「大学は国家の機関だから、国家に枢要な研究をすべきだ」というのでは、秋晴れの日に今日は良いお天気だというようなものである。

田舎廻りの政治家などが、いくら語呂の論理をふり廻しても、その害は多寡たかがしれている。しかし責任の地位にある人が、こういう語呂の論理に耳を傾けたら、その影響は恐ろしい。正統に順を追って、その間思考の勝手な飛躍がないかどうかを確めながら考えを纏まとめて行く癖は、日本人には昔から少かったのではないかという気がする。それが我国で科学が発達しなかつた一つの理由であり、また「金中猶虫あり、雪中虫無んや」という風な議論が、一種の諧調かいちょう的な響をもつてわれわれの耳に入る理由にもなるのであろう。現代ではもう西洋風の科学的な考え方が一部の国民の頭の中には根強く行きわたったので、そういう議論を聞く機会も少なくなった。しかしもとも二千年の間培われて来た国民性の癖は、なかなか急には頭の底から

抜けないのではないかという気もする。

もつとも何でも理詰めにも物を考えるということ自身が良いことであるかどうかはまた別問題である。世の中のことには非常に複雑で、そう一部の科学者たちがいうように、科学的精神ばかりで貫けるものかどうかは私には分らない。案外語呂の論理の方が役に立つことが多いのかも知れないが、少くとも大砲や飛行機を作る方面の基礎になる学問の方では、当分の間は好きでも嫌いでも西洋科学を神妙に勉強した方が良さそうである。

独逸^{ドイツ}では、この頃ユダヤ人を排撃するために、アインシュタインとか、原子物理学の方面の俊秀な学者たちとかを追放して、『独逸物理学』という専門雑誌まで出して、大いに独逸国民的な物理学の隆興を期している。そして純粹のナチス黨員の学者たちが結束して盛に研究をしている。しかしその結果は公平に見て独逸の物理学の発展には余り良くない影響を与えているように見える。少くともこの数年来の独逸の物理専門雑誌に出る論文は、一時にぐつと質が低下したというのは、専門家中では一般の評である。しかし独逸では盛に軍備を拡充して、素晴らしい性能の機械力を得ているという人があるかも知れないが、この種の学問の質の低下がそういう応用の方面に影響をあらわして来るのは、十年とか二十年とか先のことである。もつとも私はこの例をわれわれの「盟邦」独逸の政策を悪く言うために挙げてい

るのではない。物理学のような近代工業の基礎になる大切な学問の質の低下を犠牲にしても、国内の民族の血を純化し、その結束を固めなければならぬ立場にある。独逸の要路の人々の苦衷を思い、かつそれを断行している勇氣を讃えることは忘れない。とにかく大戦後のあの窮状を打破して来た独逸国民に敬意を表することは当然である。ただ、物理の専門家以外の人には、「独逸物理学の勃興」などという新聞記事が、何かその学問の大発展を意味するような誤った印象を与えているかも知れないので、その点を注意しておくに過ぎない。

その点になると、われわれは誠に幸いである。民族の血の純化などということには何の心配もないのであるから、「日本物理学」などというものを慌てて作る必要もないし、また幸いなことには、そんな噂もきかないで済んでいる。ところが他の学問の方では、例えば医学などの方では、この頃「日本医学の確立」などということがいわれているそうである。専門ちがいのことであるから、その内容は知る由もないが、多分それは、日本人の体質に応じた治療学とでもいうのであろう。まさか日本意識に眼覚めたる医学などというのではないと思う。独逸では魚は余り喰わないが、それは魚が漁れないからで、何も日本でもその真似をして魚を喰わないようにしようなどと説く人もなからう。

「天は西北にたらず、地は東南に足らず」という風な科学がもし出来たら、よほど面

白いものが出来上るにちがいない。尤もこれ^もは少し冗談であるが、それほどなくとも、現代の自然科学はいわばギリシア人の思考形式から発達した学問であるとはよく言われていることである。東洋の特に我国のように長い間比較的孤立して特殊の文化をもつて来た国に、特殊の科学が誕生する可能性はないことはない。しかしそういう別の科学が出来たら、その応用方面も別に開かれると見るのが至当であるから、それは直ぐに現代の機械工業や軍需工業の方面に、急には役に立たないところの或る別のものになると考える方が本当に近いであろう。とにかく、今は我国は未^み曾^{ぞう}有^うの非常時局に直面しているのであるから、取り敢^あえずは、日本意識に眼覚めた科学などに注意を向ける暇はないはずである。それも独逸のように、もつと重大な問題、即ち民族の結束というような緊急問題に直面している国ならば、「独逸物理学」もまたやむをえないのであろうが、われわれにとつては、今のところは、西洋科学をもつと取り入れて、なお一層強い機械力を産み出すのが当面のつとめであろう。ところが極^{ごく}一部の人はあるが、日本意識に目覚めた科学などを起^{おこ}そうと企てている人の中には、こういう非常時に遭遇している際だから、特にそういう問題が必要だと思っている人もある。そうすると今の話とはまるで反対の結論になつてしまふ。誠に不思議なことである。

今の場合と限らず、この頃の世論の中には、同じ環境にいて、同じ目的を持って

話をしているのに、結論が両者まるで反対になっている場合が、外ほかにも沢山あるように思われる。あるいはどっちか一方が、語呂の論理に陥っているのかも知れない。それだとこれはよほど戒心すべきことである。

(昭和十三年十二月一日)

日本のこころ

もう二十年くらいも昔の話であるが、大学を出てすぐの頃、私は理化学研究所（現在の科学研究所）へはいった。そして寺田先生の助手として、三年間先生の実験室で働いた。

その頃の理化学研究所、というよりも理研といった方が通りがよいのであるが、その理研には、大学を出たての若い仲間がたくさんいた。同期の藤岡（由夫）君や、一年あとの菊池（正士）君、それに相対性理論でアインシュタインに大いに盾をついた土井（不曇）さんなど、元気のよい連中が十人近くも集って、毎週木曜日の晩に雑誌会をやって、皆が大いに気焔をあげていたものである。

丁度現在の量子物理学が生まれつつあった時代で、電子の波動性というところでもないことを提唱したドウ・ブロイの最初の論文を、たしか芝（亀吉）さんだったか（初めて読んだのも、この雑誌会であった。さすがに錚々たる御連中も、この論文にはいささか度胆を抜かれたようであった。何が何だか分らなくて、まるで夢のようなことをいっているということにして、片づけてしまった）。

しかし引きつづいて、独逸でボルンやシュレーディンガーの論文が出て、波動方程式という名前も皆知るようになった。英国では、ディラックの論文がいくつも引きつづいて、王立学会記事に出た。これはたしか藤岡君が主になって紹介したような気がする。どの論文もよく分らなかつたが、何となく物理学の新しい黎明が近

づきつつあるという気がして、皆が夢中になって、夜おそくまで討議をしたものであった。電子に波動性があるというまるで夢のような話が、その後二十年ばかりの間に、原子爆弾にまで発展したのである。正まさに今昔こんじやくの感にたえないものがある。

この時代は、日本の国力が、正に最盛期に達しようとしていた時代であった。学問の方も、急速に世界の水準に迫りつつあった。そして欧羅巴ヨーロッパからも、若い研究者がぼつぼつ理研へやって来ていた。そのうちでオランダから来たディーケ博士が、私たちの仲間にはいつて、木曜日の晩の雑誌会にも顔を出すようになった。

ディーケは分光学専攻なので、高嶺研究室たかみねで仕事をしていた。それで同じ研究室の藤岡君とは、特に親しくしていた。理研生活は二年くらいであったかと思うが、一旦いったんオランダへ帰り、間もなくアメリカへ渡った。そして現在はジョンズ・ホプキンス大学で、物理の主任教授かその次ぎかの位置にいる。

ディーケは非常に日本が好きであった。来るとすぐ日本語の勉強を始め、私たちの雑誌会に出て、もちろん日本語でやっていたわけであるが、とにかく熱心に聞いていた。もつとも理論物理学の話は、数式がたくさんはいるので、日本語が分からなくても、大体のところはつかめる。それにしても、来朝早々こんな会のメンバーになって、夜おそくまで皆が勝手きえんな気焰きえんをあげる仲間になつていたのであるから、かなり変っている。

半年くらいのうちに、日常の用事は、だいたい日本語で片づくようになった。初めから日本人の普通の家庭に、いわゆる素人下宿しろうとをしていた。神楽坂かぐらざかの近所であったが、いい親切な家があつて、ディーケは大いに満足して、純日本風の生活を初めからしていたようであつた。

喋るばかりでなく、日本字の読み書きも習いはじめて、一年くらいしたら、手紙が書けるようになった。平仮名の手紙で、ほんの少しばかり漢字の混まじっているものであるが、とにかく日本文の手紙が書けるのだから、たいしたもののである。表書きおもては全部漢字で書くのが得意で、金釘流かななくぎりゅうの大小いろいろまじった字であるが、とにかく配達にはことかかないような漢字を書いていた。これはアメリカへ渡つてからも、ずっとつづいていて、かなりの間よく表書は漢字で書いて来た。

日本の着物が気に入って、大島おおしまの揃そろいの着物と羽織うしを作つて時々着ていた。特に浴衣ゆかたが好きで、夏になると、よく浴衣がけで素足すあしに下駄すだをひっかけて、神楽坂の夜店ひやかを素見ひやかしていたものである。後になつて、オランダで述べ懐なつしていたことであるが、夏の夜の浴衣がけの散歩くらい、日本の良さを示すものはないといつていた。或る夕方、例によつて、浴衣がけで神楽坂をぶらぶら散歩していたら、後うしろから汚い仕事着の労働者がやつて来た。そして「もしもし、西洋の旦那だんな」といつて、ディーケに呼びかけたことがあつたそうである。これがディーケには、よほど気に入つた

ものとみえて、よくこの話をした。「日本という国はいい国だ。街の一番下層の労働者が、外国人を見た時、もしも西洋の旦那とよぶような国は、世界中何処にもない」というのである。

これは正にそのとおりで、第一「西洋の旦那」というような巧い言葉は、外国語にはない。少くも英語や独逸語にはないように思われる、特に独逸などにはないようである。ベルリンでの経験であるが、落葉の美しいツオーの公園を散歩していた時、五、六歳くらいの子供を連れた男に行きあつたことがある。ちゃんとした服装をした紳士であつたが、私の方を指さして、子供に「あれは日本人だ。支那人とはちがう」と説明していた。こういう教育のできる国民と「もしも、西洋の旦那」と呼びかける国民とが、もし喧嘩をしたら、勝敗の数は自ら明らかである。しかし私はそんなにまでして強くなるのは考えものだと思つてゐる。私は独逸をあまり好きになれなかつたが、その理由の一つは、こういうところにある。

「もしも、西洋の旦那」と呼んでも、何も得るところはない。せいぜいデーケのような変り者を喜ばすくらいのことである。それよりも、ちよつとした機会でもすぐとらえて、ヤパーナーとヒニーゼとの区別について、実物教育をする方が、大いに教育効果を上げるにはちがいない。第一次大戦後の独逸の急速な復興は、こういう独逸精神に負うところが多いのであろうと、自分では思つてゐる。

敗戦後、外地におけるかつての軍人たちの非行をあばき立てて、日本人の劣等性をいい気持そうに振れ廻まわつていた人たちが、終戦後はかなりあつたようである。しかし日本人も、決してそういう悪い点だけをもっている人種ではない。唯ただこの二、三十年来、日本人は付け焼刃やきばの西洋文明を、自分らの特質と思いちがえていたようである。我が国の科学は、もう世界の水準に達したとか、潜水艦は世界第一だとか威張はつていたのもその一つのあらわれであろう。そういう西洋の物質文明をすぐ真似まね得たことを、民族の優秀性を示すものと思いきんでいた。しかしそういうことは、子供が父親の煙草たばこを失敬して、得意そうにふかしているのと、あまりちがわないことである。ということが、この頃になって、やっと分つて来た。

こういうことを書くと、たかが街の労働者の一言ひとことを種にして、ずいぶん大袈裟おおげさなことをいうと思われるかもしれない。それで今一つ似たような例を挙げておこう。それは現在ハーバート大学で、極東美術の主任教授をしている、エリセーフ氏の話である。

エリセーフ氏は、生まれはロシア人であるが、若い時に日本へ来て、主な教育は東京で受けた人である。それも東大の文学部に入り、国文学を専攻、卒業論文には「芭蕉ばしやうの研究」というのを書いたのだから、少し念が入っている。漱石そうせきの御弟子おの一

人であつて、とくに小宮（こみや豊隆）さんや、森田（もりたたま）さんなどと、親しくしていたそうである。私も二十年前に、巴里（パリ）でエリセーフ氏に大分厄介になったことがある。二、三回目に会った時に、友人の数学者の岡潔君（おかきよし）を紹介したら、「オカさんは、コウですか、キュウですか」ときかれて、大いに面喰つた（めんくち）ことをおぼえている。

昨年（こぞ）の夏、ボストンで、二十年ぶりに、このエリセーフ氏に会った。二晩ばかり、おそくまでいろいろ話をきいて、非常に愉快だったが、そのうちでも、特に面白い話があつた。それはエリセーフ氏が、東大の学生時代に、北海道へ旅行した時の話である。

夏休みに、一人でぶらりと北海道へ遊びに行ったのだそうである。紺緋（こんがすり）の筒つぽに下駄（げだ）をひっかけた一人旅で、汽車はもちろん三等であつた。丁度漱石先生（しんせき）の『三四郎』（さんしろう）が出たばかりの時だったので、その新しい『三四郎』（さんしろう）を一冊懐（ふところ）に入れて出かけて行つた。

北海道の景色は広々としていて、シベリアを知っているエリセーフ氏には、そう珍しいことでもなかつたであろう。それよりも『三四郎』の方が、面白かつた。ごとごととのろい北海道の三等車の中で、紺緋のエリセーフ君は、夢中になつて、『三四郎』に読みふけていた。すると、さつきから隣に腰をかけていた中年の男が、しきりにその本をのぞき込んでいる。そのうちに、「もしもし」とエリ

セーフ君に話しかけた。

見ると、盲縞めくらしまに角帯かくおびをしめた男で、田舎廻りの米の買出人かいだしにんという恰好かっこうの男である。当時の日本の中流階級の下というところの代表者であろう。その男が『三四郎』をのぞき込みながらきいた最初の言葉が、「この頃はお国でもそういう字あざが流行はやりますか」というのであったそうである。

エリセーフ氏には、この言葉がよほど気に入ったものとみえて、三十年後の今日、この話をするエリセーフ氏の語調の中には、当時の日本をしのび、自分の青春をなつかしむ情が、脈々として流れていた。そして「日本はいい国でした」と、独り言ひとりごとのようにつけ加えていた。

「お国でもそういう字あざが流行はやりますか」というのは、如何いかにも面白い言葉である。こういう質問に腹を立てる人は恐らくないであろう。馬鹿ばかげているようで、しかし何か温かいものが、その底に感ぜられるからである。しかしその意味は、考えてみると、かえって分らなくなる。エリセーフ氏が外国人であることは、一ひとめ眼めに分るこ
とである。現代の日本人ならば、「あなたは日本字にほんじが読めるのですか」ときくだろう。しかしそれは愚問ぐもんであって、さつきから外の景色にも、車内くるまうちの様子にも、まるで無頓着むとんちやくで、夢中むちゆうになって読み耽ふけっているのだから、日本字にほんじの読めることは、きくまでもないことである。それかといって、「日本字にほんじが読めるのは感心かんしんですね」という

のも、氣の利かない話である。

前の「西洋の旦那」にしても、今度の言葉にしても、近代風に解釈すれば、その味がすっかり抜けてしまう。少し意地悪い人に遭つたら、「西洋の旦那」という言葉の蔭には、封建性が骨まで染み込んだ一種の卑屈さがあるといわれるであらう。「お国にもそういう字が流行りますか」というのは、無智の代表といつても差支えないかもしれない。しかしこういう言葉の裏に流れている心の温かみは、いわゆる現代風のもの考え方では、その解釈が非常に困難になるような種類の感情である。「蝟壺やはかなき夢を夏の月」の句を英訳することが、ほとんど不可能であるのと同じくらいに、困難な仕事である。

建国以来二千年、日本の国は、世界からすっかり隔絶されていた。もつとも中国や韓国とは、いろいろな交渉があつたが、それはいわば身内の中での交渉である。広い地球の上では、いろいろな変化があり、興亡も栄枯も非常に目まぐるしかった。特に近世のいわゆる植民地獲得時代では、世界中がその荒浪の影響を受けた。その時代における徳川三百年の鎖国は、世界の中で、一つの特異な文化をこの国に作り上げた。

この特異な文化は、甚だしい封建性、我の自覚の徹底的な欠陥など、いろいろ未開

民族に特有な属性をもっていた。しかしそれと同時に、近代文明の持ち得ない一つの人間性を育て上げた点も、見逃してはならない。「もしもし、西洋の旦那」が持っているユーモアと俳味はいみとが、即ちそれなのである。巧い方ではないが、日本のところがこういう言葉の中に、その片鱗へんりんを見せているような気がする。

現代の物質文明、というよりもこの物質文明を作り上げた西洋の意識が、まだ十分に輸入されなかつた時代、即ち明治の初期をふり返つてみる。その時代にはあらゆる欠陥を持ちながらも、その蔭に一種の美しさをたたえた感情が、日本国民の中に、広く浸しみわたつていた。モースは『日本その日その日』の中で、この時代の日本人の美点を美事に描えがき出している。

この本には、西南戦争頃の日本の姿が生き生きと描き出されている。交通整理などというものは、まだその概念もなかつた頃の東京である。その東京の街路の雑沓ざつとく、「大吉だいきち」だの、両替りようがえだの、薬玉くすりたまだのの看板が、軒ぐことに並んでいた下町の姿は、単に懐古的な意味でなつかしいというだけではない。三井みついの絹店の店頭では、女たちが反物をひろげ、店員は「極度ののろさと真面目まじめさと鄭重ていちょうさ」とで、それに接している。こういう町の姿、人の物腰ものこしの中に、モースは、一種の美しさを認め、人間としての温かい感情を汲くみとつたようである。そして日本の国と国民とに深い愛情を抱いたのである。

敗戦後の日本人の大多数、少くも現代教育を受け、都市生活の片鱗を味わったことのある日本人の大多数は、アメリカの生活を理想の生活と思い込んでいる。アメリカ人の能率と勤労精神との所産であるアメリカの生産は、物質文明の点で、有史以来の繁栄を齎^{もたら}している。精神界においても、清教徒^{せいきょうしつ}とクエーカーとの生んだアメリカの精神的骨格には、まことに驚嘆すべきものがある。

しかし世の中では、如何^{いか}なる場合にも、万全ということは望まれない。アメリカの心ある人々の中には、この繁栄の下に、押し潰^{つぶ}されつつある人間性のために、憂慮の心を抱いている人もかなりあるようである。

現在の日本人が一番学^{まな}ぶべきことは、アメリカの能率である。そしてあの能率は、主としてアメリカの物質文明の所産であるところの、交通及び通信施設の完備から来ているものである。しかしそれよりも、もっと重視すべきものは、アメリカ人の勤労精神である。八時間労働といつても、拘束九時間、実働八時間、午前と午後に分ずつの休憩があるだけで、正味七時間四十分の労働時間中は、一分も休みなく働いている。流れ作業に従事している筋肉労働者の勤労ぶりは、組織の中にはめ込まれているので、これはむしろ当然のこと、あるいは働かざるを得ないようになっていると見ることもできる。それよりも感心なのは、デスクの仕事をしているホワイト・カラーの人たちの仕事ぶりである。

こういう事務をとっている人たちは、次ぎから次ぎと書類が来るといっても、ベルトにものが載って流れて来るのとはちがう。ちよつと息を抜くことは、もちろん可能である。しかし執務時間中は、ほとんど煙草たばこも喫のまず、お茶など決してのまない。アメリカの夏は非常に暑いので、のどがひどく乾く。それで廊下には到いたるところに、冷やした水道水が出るようになってゐる。仕事中に時々ちよつと廊下へ出て、この水をのむことが黙許もくじょされている程度の働きぶりである。日本の官庁などでは、客がのべつ幕なしにあり、給仕がまたのべつ幕なしにお茶を運んで来る。隣りの席では、二、三人かたまつて、煙草の煙をもうもうとさせながら、雑談をしていることがよくある。ああいう景色を見馴みなれているものの眼には、アメリカの官庁や会社の執務室に漲みなぎっている勤務意慾いよくは、まことに異様な趣きを感じさせる。そしてアメリカ人に幸福もたらを齎もたらしている、あの彫大ぼうだいな生産の基礎は、この能率生活にあることを痛感させられる。

物質を離れて生活は成り立たない。このアメリカの能率は、近代文明の所産であると同時に、その基礎でもある。それで世界中どこの国でも、近代の文明生活にはいろいろとするには、何よりもまずこの能率生活を取り入れる必要がある。

しかしこういう能率生活は、人間を非常に疲労させる。筋肉的というよりも、毎日七時間四十分、一分の遅刻もなく、機械のように働くことは、精神的に非常な緊

張を必要とし、それは人間の芯をつかれさせる仕事である。それでアメリカでは、近年は一週五日制をとっているところが大部分を占めている。官庁や大会社は既にこの五日制をとり、小さい会社なども漸次五日制になりつつある。

事実、月曜の朝の八時零分から、金曜の午後の五時零分まで、こういう仕事をしつづけたら、どんな人でもへとへとになってしまふのである。それで、土曜と日曜とは完全な休養をとる。またとらざるを得ないのである。もつとも一日は家庭内の細々した仕事もしなければならぬ。人を雇うとたいへんな金をとられるので、中流階級の人たちは、たいていの家の仕事は自分でやる。そして一日は自動車で朝早くから百哩もさきの自然林の中に出かけ、終日人工の全然加わっていない野性のまの自然の中でねころび、また汗を流して歩き廻り、ビールをのんで歌をうたう。夜は馬鹿騒ぎをして、ダンスをする。こういう休養、主として精神的の休養をして、そしてまた次ぎの日の朝の八時零分から仕事にとりかかるのである。

しかし一年間こういう生活をつづけると、だんだん眼に見えない精神的疲労が、身体からだの奥深いところにたまって来る。それを救うものは、夏休みである。どんな人でも、三週間くらい、少くも二週間は夏休みをとることができる。この時期が、気持の更生に大切な時期なのである。

夏休みになると、誰も彼もカーを駆かけて国立公園に走る。国立公園といつても、

大きいものは、四国くらいのものである。その地域は、なるべく人工を加えないで、原始の姿のままに保存されている。道路だけは立派に作つてあるが、一步舗装道路をはずれると、暗黒の密林、あるいは熱砂の沙漠、または奇巖の岩原である。道なき荒野や密林を、何哩と歩き廻り、草の上に寝たり、キャンプをしたりして、原始生活を楽しむ。そして煙にむせびながら炊事の火をあおぐ。それが最大の慰安なのである。

一週間か二週間、こういう原始生活をして、心身を新しくして、また職場に戻る。これで次ぎの一年間は、また朝の八時零分から始る仕事場で、機械のように働くエネルギーが湧き出して来るのである。

週末ごとに一週間の疲労を医やし、一年ごとに芯の疲れを救つて、六十歳頃まで働く。その間に老後の生活費を貯蓄し、それを規則正しく使い果して死ぬ。見ようによつては、これが大多数のアメリカ人の一生である。

よく働き、よく遊び、大いに生産を上げて、国の富を増し、大衆の生活水準を向上させる。その御蔭で、何人に一台という自動車が行き渡り、食物も栄養価の高いものを、全国民が十分に摂ることができる。衣食住全般にわたつて日本人の眼から見れば、何不自由ない恵まれた生活をしている。しかしこの極度に発達した近代文明は、次第に人間性を押し潰しつつかあるという見方もできる。草の上に寝たり、煙

にむせながら、炊事をするのが、何よりの慰安であるというのが、この間の消息を物語っているといえないこともない。どんな階級の人にも、一年に二週間か三週間かの休暇がとれるというと、日本では無条件に羨しがる人が多い。しかしそういう休暇を貰わねば生命がつづかぬという生活をしているともいえるのである。

考えようによつては、敗戦後の日本人は、アメリカ人が一年に一回最上の慰安とする生活を、毎日やっているともいえよう。もつともこれは冗談であつて、文明に逆行することが、人間の幸福であるのかと、正面切つて問いつめられると、ちよつと困る。しかし、物にはすべて両面がある。それを忘れると、話がとかく極端に走るおそれがあるということは知つておく必要がある。

日本人には、どうも近代の西洋文明は、肌が合わないのではないかという気がする。そうかといつて、世界文明に逆行することはできない話である。能率の向上、生産の拡充には、もちろんでできるだけ努力する必要がある。しかしあまりその方だけに気をとられて、「もしもし、西洋の旦那」や「お国でもそういう字が流行りますか」という日本のこころを、むやみと振り棄てることも、ちよつと勿体ないような気がする。

天災は忘れた頃来る

今日は二百二十日だが、九月一日の関東大震災記念日や、二百十日から、この日にかけては、寅彦先生の名言「天災は忘れた頃来る」という言葉が、いくつかの新聞に必ず引用されることになっている。

ところで、よく聞かれるのであるが、この言葉は、先生のどの随筆にあるのが、問題になっている。寅彦のファンは日本中にたくさんあって、先生の全集は隅から隅まで、何回となく繰り返し読んでという熱心な人がよくある。そういう人から、どうもおかしいが、この言葉は、どこにも見当たらない。一体どこにあるのか、という質問をよく受ける。

実はこの言葉は、先生の書かれたものの中には、ないのである。しかし話の間には、しばしば出た言葉で、かつ先生の代表的な随筆の一つとされている「天災と国防」の中には、これと全く同じことが、少しちがった表現で出ている。

それで私も、この言葉が先生の書かれたものの中にあるものと思い込んでいた。もう十五年ばかりも昔の話になるが、たしか東京日日新聞だったかに頼まれて「天災」という短文を書いたことがある。その文章の中で、私はこの言葉を引用(?)して「天災は忘れた頃来る」という寅彦先生の言葉は、まさに千古の名言であると書いておいた。

ところが、この言葉が、その後方々で引用されるようになり、とうとう朝日新聞

が、戦争中に、一日一訓というようなものを編集した時、九月一日の分に、この言葉が採用されることになった。

正月元旦の「日本国は神国なり」から始まって、三百六十五日分、毎日その日に何かいわれのある言葉を、集めたものである。そしてそれには、いろいろな人が、出所と解説とを書くことになっていた。私は九月一日「天災は忘れた頃来る」の解説を頼まれ、まず出所を明らかにと思って「天災と国防」を読み返してみたが、ない。慌あわてて天災に関係のありそうな随筆を、片っ端から探して見たが、どうしても見当たらない。

大いに困ったが、この言葉の方は、すでに慎重な会議をなんべんも開いて、採用に決定していたので、止やめるわけには行かない。それで「天災と国防」の中にこれと全く同じことが書いてあるという理由で、解説を適当に書いて、勘弁してもらった。もともとこの言葉は、書かれたものには残っていないが、寅彦の言葉にはちがいないのであるから、別に嘘うそをいったわけではない。面白いことには、坪井忠二博士つばいちゆうじなども、初めはこの言葉が、寅彦の随筆の中にあるものと思ひ込んでいたそうである。それでこれは、先生がペンを使わないで書かれた文字であるともいえる。

ツーン湖のほとり

もう十年も前のことであるが、倫敦ロンドンに留学中私はユニバシティカレッジのポーター老先生の所へ繁げく出入りしてゐるうちに、一緒に瑞西スイスへ行かうときそはれたことがあつた。そして二週間許りほか、ポーター先生や引退した英国の老法律家夫妻と、ツーン湖畔のオーベルホッフエンといふ小村で暮したことがあつた。

ツーン湖のほとり、瑞西の夏は美しかった。ホテルは小高い丘陵の上にあつて、ツーン湖面を真下に見下し、その正面にニーセンの嶺が聳えてゐた。上から見下した瑞西の湖は青碧の水をたたへ、晴れた日には、雲の形が濃紫色に輝いて、湖面にうつるのであつた。湖畔のゆるやかな起伏の原は、鮮かな緑で蔽はれ、古城の白い塔が一つその中に立つてゐた。すべての色が鮮明で、周囲の風物はフクロ尽く私達が昔から持つてゐた「美しき欧羅巴ヨーロッパ」の姿であつた。

倫敦の生活に疲れてゐた私は、此処へ来て急に元気になつた。ホテルもよかつた。なだらかな斜面に建つてゐた三層楼といふ感じの此のホテルは、一階のバルコンから爪先下りの庭に続いてゐて、大きい噴水をめぐつて、色とりどりの花が植ゑこんであつた。

天気は毎日のやうによかつた。朝食を済ませ、美味しい瑞西の牛乳をのんで、蔓薔薇の軒下に出て腰を下してゐると、強い日光が葉越しに射して来て、敷き詰められた細かい砂利の上にも、白い夏服の上にも、点々と輝いた光斑を作つてゐた。高い土

地に特有な清々しい空気が始終肌をなでて、強い日光が少しも苦にはならなかつた。さういふ時にはよくポーター先生と、アメリカの何処とかの大学の Professor of Constitution of History といふ私には何のことかも分らない専門の学問をしてゐる先生と、それにリーツの僧正レシヨツフとかいふ老人とが集つて、心霊学の話などをしてゐた。ポーター先生はオリバーロッチの心霊学の話をして、年をとるとああいふ風になるものだと言つてゐた。さういふポーター先生ももうとづくに六十を越してゐて、真白な髪と髯との間に赤い童顔を覗かせてゐた。歴史の先生は、心霊学には必ず女が入つて来る、その点が面白いと云つてゐた。さういへば日本でも、千里眼にしても霊媒にしても、必ず女が入つて来てゐるやうだと、この人達の話を傍でおとなしく聞きながら考へて見た。外国人といへば、何処へ行くにも必ず夫人がついてゐて、所謂いわゆる社交的な話許りしてゐるものかと思つてゐたが、かういふ先生方は皆一人で来てゐて、社交とか政治とかといふ問題とはひどくかけ離れた話をしてゐるのが珍しかった。

此処のホテルは御馳走も随分よかつた。食堂では、老法律家モード氏夫妻がホテル第一の賓客で、真中から少し離れたテーブルに二人でついてゐた。そしてその横にポーター先生の小さいテーブルがあつた。ポーター先生は倫敦の学界では長老格で、永い間ユニバシテイカレッヂの教授の地位を占めてゐて、丁度その年は英国学

術振興会長をもつとめてゐた人なので、ホテルでも大変待遇が良かった。私は英国人の眼には随分若く見えたらしく、子供が一人で外国へ勉強に来てゐるといふので、ポーター先生が大変親切にしてくれた。それでポーター先生のお客といふ格で、先生のテーブルに坐らせられた。アメリカのお金持達を尻目にかけたのは、恐らくこの時が初めてで、そして勿論もう最後のことであらう。

毎晩ちやんとドレスをして食卓につくのも馴れて了ふと、却つてきまりがついて良かった。モード夫人は真黒な服に飾りの何もついてゐないのを着てゐた。ほそおもて細面の綺麗な老夫人で、御殿の大奥様という感じであつた。只一つの装身具として、細い指に大豆位の大きいダイヤが光つてゐた。

長期滞在の客が多い此のホテルでは、客人はそれごとく自分の好む葡萄酒を注文して、晚餐の時にのむのであるが、その葡萄酒の罍には夫々客の名前を書きつけて納つて置いて、毎晩夕食の時には出すのであつた。初めての日の食卓で、葡萄酒の表をもつて来て、どれにしませうと云つて来た時はちよつとどぎまぎした。左側に縦に色々な葡萄酒の名を書いて、上に横に年代が書いてあつた。そして各々の葡萄酒について各年代のものに色々なマークがつけてあつた。葡萄酒は旧いもの程良いと思つてゐた位の知識しかなかつた私は、「プロフェッサーと同じもの」と云つて胡魔化すより仕方がなかつた。

晩餐がすむと、よくモード氏夫妻に招待された。此の夫妻は引退後世界中を廻つて歩いたが、結局此処の景色が一番気に入つたと云つて、四年この方、此のホテルに落付いて居るのだといふ話であつた。それも二階の正面のバルコンに続いた四室を借り切つて、室内の調度品を全部自分で取り換へて住んでゐた。居間のドアをあけると、直ぐ眼の前に厚い緑色のカーテンが下りてゐ、それを押しあけて部屋へ入るやうになつてゐた。そしてそのカーテンには丁度目の高さの所に、赤い小さい布片がつけてあつた。時々慌て者が部屋を間違へてドアを開けて覗き込むので、此のカーテンをつけたのであるが、それでも中には、此のカーテンを押し開けて中を覗いてから「失礼しました」と云つて出て行く客があつたとモード夫人が説明してゐた。それでも此の赤い目印をつけてからは、誰もカーテン迄押しつける人は無くなつたといふ話であつた。

居間は案外簡素にしてあつた。そして所々に電気スタンドが沢山灯つてゐた。大抵はバルコンへ通されて、コーヒとリキュールが出た。そしてモード夫人は一人々々の客に煙草を喫むかときいて、灰皿のついたスタンドを別々に持つて来てくれた。モード夫人の物腰には日本の茶の作法のやうなものが見られたのも面白かつた。何かを取りに立つやうな時などは、その通路の側にある小さい卓やスタンドのやうなもの、一々一寸わきに動かしては通つた。充分広い隙間のあるやうな時でも、ス

タンドの脇をすり抜けて行くやうなことは決してなかつた。

ニーセンが真黒に正面に聳えてゐて、その頂には灯が一つ見えてゐた。此の二階のバルコンからは、遠く左の方にインタラーケンの街の灯も遙か下に見えた。そして月明りに、アイガーとメンシユの山嶺が遠く浮いてゐた。星は毎晩のやうに綺麗に輝いてゐた。モード氏は此のバルコンに小形の天体望遠鏡を設へつけて、時々星を覗くのを楽しみにしてゐると云つてゐた。丁度土星が大きくニーセンの上にかかつてゐたので、その環がよく見えると云つて覗かせてくれた。モード氏は、土星とその環との間が本当の隙間かどうかを見る為に、外の星が土星の真後を過ぎるのを見ようと思つてゐるが、なか／＼さういふ機会には出会はないと云つてゐた。もつとも恒星と遊星とが丁度重ることは滅多にないので、遊星に大気があるか否かといふやうな問題を解くのに絶好の機会として天文学者も待つてゐるのであるが、そんなに沢山星がある癖に滅多にさういふ場合は起きないのである。モード氏がそんなことを少しも知らずに、時々望遠鏡を覗いて待つてゐるのは一寸滑稽と云へるかも知れないが、その考へ方自身は立派に科学的であるのが面白かつた。

ポーター先生が居た為か、よく物理の話が出た。丁度、G・P・トムソンが電子の波動性を示す実験をやつて有名だつた頃なので、モード氏はあれは本当かといふやうな質問をしてゐた。ポーター先生は童顔で笑ひながら、「電子は不思議なもので

すよ、親爺（J・J・トムソンのこと）が球だといふのに、息子はそれに羽をつけて飛ばせて了つたのです」と答へてゐた。モード氏夫妻は不思議さうな顔をして聞いてゐた。私にも何のことか分らなかつた。そしてポーター先生が一人でこゝしてゐた。

下の部屋で、蓄音機が何か大物のシンホニーをやり始めた。一寸意外に思つたのは、此の人達はレコードといふと無闇と眉をひそめることであつた。「この次が、タンホイザーで、その次が……で、それからまだくあるのですよ。毎晩のことですから」とモード夫人迄が珍らしく吐き出すやうに云ふ。まづレコード音楽などをきくのは、田舎の美術青年が文展の絵葉書を蒐集するやうなものとも思つてゐるのかも知れない。これも英国風な貴族趣味の一面なのであらう。此の癖のよく現はれる例は、この人達は所謂英国人の沢山行く場所をひどく軽蔑してゐるのである。そして勿論アメリカ人といへば、最下等の人間といふことにしてゐるのが可笑しかつた。「此の頃は何処へ行つても、ENGLISH SPOKEN でせう。あの下は AMERICAN UNDERSTOOD と書き添へて置けば良いのでせう」とモード夫人も案外辛辣なことを云ふ。

四年越しに借り切つてゐる部屋の一つは、すっかり改造して、図書室になつてゐた。そしてアルプスに關した本だけを集めた立派な蒐集が出来てゐた。モード氏は

其の中から、ウイムパーのアルプス登攀記と、著者は忘れたが、岩^{ロッククライミング}攀の研究といふ部厚な本とを採り出して貸してくれた。岩攀の研究の方は案外しつかりした研究なので驚いた。モード氏は若い時でも余り山登りなどはしなかつただらうと思はれる身体付きの癖に、岩攀の技術にはなか／＼造詣が深いらしく、色々その方面の話をしてくれた。

四五日は見る間に過ぎて了つた。そしたら牛乳の飲み過ぎで、型の如く腹をこはして了つた。余り上等でない室を借りてゐたので、眺望のない後の山に面した寢室の中で、朝からベッドに就いてゐる日が二三日も続いた。ポーター先生が心配して時々見舞に来てくれたが、腹はなか／＼治りさうもない。それに珍らしく雨が降つて鬱陶しい気持の上に、少し心細くさへなつて来た。ポーター先生は読む物があるかと云つて、ヘンリー・ゼームスの『ねぢの廻転』といふ本を貸してくれた。何気なく読みかけて見ると、妙に頭の冴えるやうな本で、思はず引き入れられて了つた。女主人公が幻想を見る姿が如何にも切実に迫つて来て、それに何となく不安を与へる周囲の雰囲気の描写が恐ろしかった。外は真暗な雨の夜であつた。下の広間では舞踏会が催されてゐるらしく、賑かな音楽が聞えて来る。時々枕を裏返しにしては、熱した頭を冷い枕の面に埋めながら、女主人公の幻想に引きずられるやうな気持になつて行つた。そして所々にぶつきら棒に挿入されてゐる The turn of the screw.

といふ一句が、妙に夢幻的な不安を与へてゐた。読んで行くうちに段々恐ろしい切迫した気持が嵩まつて来た所で、突然この一句に遭ふと、何だか人生とか運命とかいふものが此の句の裏に秘められてゐて、それがちよいと顔を出すやうな気がした。ねぢ、は廻つて旧の場所もとに返る、然しそれは最早や旧の場所では無いといふやうな聯想がこの説明しがたい不安の基調をしてゐるやうな気がした。もつともこんな気持は、異国のしかも旅の空で一人病床に就いてゐるといふ特殊の環境と、それに英語の力の不足による意味の曖昧さとから来た所が多いのであらうが、とにかくひどく印象に残る恐ろしい本であつた。

ゼームスでおどしつけられたせゐでもあるまいが、それから二三日して腹も治り、毎日ポーター先生の御伴をして、附近の谷タルを歩き廻つて、瑞西の山家の生活に親しんで愉快な日を暮した。モード氏の所へも毎晩のやうに招待された。此の二週間が私の在外中一番の豪華な日であり、且つ楽しい日でもあつた。

愈々いよいよ明日倫敦へ帰るといふ日の夕方、ポーター先生は、私を村の小さい喫茶店へ連れて行つてくれた。ポーター先生は毎夏此のホテルの常客で、まだ後一月位は居るといふのであるが、私は実験を急いでゐたので、到頭残り惜しいながらに、此の生活を切り上げることにしたのである。

倫敦へ歸つて暫くしたら、知らぬ本屋から本が一冊届けられた。フェアウラーの

King's English である。同時にモード氏から手紙が来て、「貴君の英語は、英国へ来て半年位とするとなかく巧い。然し時々教養のある英国人だと決して使はぬ言葉を使ふやうだ。例へば I will といふやうなことは滅多に云はぬものだ。本屋から良い本を一冊届けさせたから、それで勉強しなさい」と云つて来た。半年英語を勉強した割には巧いと褒められたのは少々恐縮した。

King's English は成る程良い本であつた。外国人が英語を書く時は、とかく、形容詞でも動詞でも皆名詞にして、o でつないで、堂々たる文章にしたがるなどといふ皮肉も書いてあつた。それから、むつかしい字をちよい／＼辞書をくつて挿入するのもしけない。「職工が、サンアイトレス ウイクデイス 日曜服を平日に着てゐるやうで惨めだから」とも書いてあつた。

日本へ帰つて寺田先生に此の話をしたら、早速手帳に本の名を書き留めて居られた。そして、それから半年許りして又理研の部屋へ伺つた時には、机の上にちやんと此の本が置いてあつた。「なかく／＼良い本だね、少し耳の痛いことも書いてあるが」と云つて笑つて居られた。先生は晩年に到る迄、始終英語の文法の本を机の上に置いて、時々一寸のひまには覗いて居られた。「どうも河の名は閉口だね、とんでもない奴に the がついたり、つかかなかつたりするものだから」といふやうなことを勉強して居られた。

アルプス登攀記も、ねぢの廻転も今では岩波文庫に出たので、手軽に再読の機会が得られた。ちやんと分るやうに翻譯されたねぢの廻転を読み返して見て、ツーン湖のほとりで熱い頭で霧のこめた断崖を覗いたやうな不安を感じた時の気持を思い出した。今度はそれ程恐しいとも思はなかつた。多分頭が少し健全になつたのだからと安心した。

一人の無名作家

昭和十年発行の岩波版『芥川竜之介全集』第八巻に「一人の無名作家」という短文がある。

七、八年前、北国の方の同人雑誌を送って来たことがあるが、その中の『平家物語』に主題をとった小説が、印象に残っている。「今はその青年の名も覚えておりませんが、その作品が非常によかったので、今でもそのテエマは覚えているのですが、その青年の事は、折々今でも思い出します。才を抱いて、埋もれてゆく人は、外にも沢山ある事と思います」と最後に書いてある。

田舎の同人雑誌に出た無名の青年の作品を、十年近くも覚えていて、こういう文章を書くというのは、芥川にしては、珍しいことだろうと思う。この文章の中で、芥川はその小説の内容を詳しく紹介しているので分つたのであるが、この青年というのは、私の弟治宇二郎のことであつた。

治宇二郎というのは、まことに妙な字面であるが、宇という字を入れるきまりになつていたので、こういう名前になつたのである。治宇二郎は、中学の三年頃から、当時の文学青年になつて、同窓の中学生たちと、同人雑誌を出していた。『蹻音』という名前の雑誌であつた。芥川に褒められた短編はたしか、中学五年の頃に書いたものである。

中学は、石川県の小松^{こまつ}中学で、その頃この北陸の片田舎には、文学熱が大いに興つ

ていた。弟の二年先輩、即ち私のクラスには、北村喜八がいて、中学五年の時に『このころの歌』という歌集を出版した。その最初の歌が「二人して緋の帳深くたれこめて十六億の人に背かむ」というのであるから、恐るべきティーン・エージャーであった。

弟たちは、実はその雑誌を菊池寛のところへ送っていたのであるが、菊池がそれを見せたものらしい。菊池から弟のところへ手紙が来て、芥川も非常に褒めているから、よかったら東京へ出て来ないか、といって来た。それで弟は中学を出るとすぐ上京して、暫く菊池寛のところにごろごろしていたことがある。横光利一なども、一緒だったように覚えている。その後私が東大の物理科へはいることになって、一家は東京へ引き揚げて来た。そして弟も文学青年を卒業して、鳥居竜蔵博士の助手になって、考古学の勉強を始めた。文学修業と、一年ばかり東洋大学で印度哲学をやったのが、役に立ったものと見えて、考古学の方法論の方で、大分いい仕事をした。

それから五年くらいして、私が巴里にいた頃、弟がひよつくり巴里へやって来た。昭和四年の夏のことである。本を書いて、その印税で、シベリア鉄道の切符だけ買って、無分別に出かけて来たのである。在仏三年、大分たくさん論文を書いたが、病を得て、日本へ帰って死んだ。芥川もその間に自殺していたので、二人はどうとう

会う機会がなかった。

(昭和三十年七月十八日)

九
谷
焼

震災で失つたものの中で、この頃になって、惜しいと思ひ出したものは九谷焼である。父が心懸けて集めたもので、古い時代のいわゆる古九谷と呼ばれている高価な品ではないのだが、現今大量生産でほとんど造り出している今の九谷焼と、古い時代の「真正の九谷焼」との連絡を見るために、丁度都合のよい標本であったことと、自分には父を偲ぶよすがとなる品であったので、時がたつにつれてしみじみ惜しくなつて来る。

加賀の人でも、この頃では余り知つている人が少い位だから、東京の人などには、「真正の九谷焼」は余り知られていないようだ。一皿数千円もするというような骨董としての九谷と、夜店で売つてゐる九谷とが、今の東京の人に知られてゐるので、丁度その連絡をなし、現今なお古い神聖な九谷焼を護つてゐる少数の人々のことは殆ど知られてゐない。

沿革などという如何にも骨董家めくので、極簡単に書くと、日本で芸術品としての陶器が出来出した頃、伊万里焼を倣つて後藤才次郎という人が、九谷村で適当な粘土を得て造り出したのが九谷焼の起りで、前田家治卿がパトロンとなつてあれだけに発達したものである。その頃は、今のようによい焦燥の生活をしなくてもよかつたので、数代も名工の後裔が、殿様の庇護の下で研究を続けて、一つのかまを完成したのである。

九州の話だが、柿右衛門かきえもんという人などは、熟柿じゆくじが枝に下っているのを見て、その色を出そうとして、生涯ついでを費して出来ず、その子がこれをついで半ば完成し、三代目に至って漸く出来上ったという話がある位である。今の骨董家が、初代の柿右衛門などといって愛蔵しているが、よく考えて見ると、三代目柿右衛門が認められるまで、貧しい陶器工の家だったはずだが、祖父の試験的出来上り品を、今残っているほど多く、三代の間蔵しまつてあったかどうか随分変な話である。売ってしまったとすると、貧しい無名の陶工のつまらぬ器物が、五十年間も破損せずに使用されていて、三代目柿右衛門の出て後のち、これは初代だといって急に珍重されることになる。

○

初めて事をなす人の苦心が、九谷焼の場合にもよくあらわれている。九谷という村は、加賀の山中やまなかという温泉から、六、七里ばかりも溪流に沿って上った所にある山間の僻地へきちで、今でもよほどの物好ものずきでないと行けぬ位の山奥である。今は一村五十戸位の小さい村で、炭焼を生活として、九谷焼とは何の関係もなく、訪れる人とても、毎夏数人の登山者が過ぎる位の程度であろう。徳川初期の時代に、こんな処へ来て初めて、求める粘土を見出した人の隠れた努力には、しみじみ感ぜさせられる。近年この村が殆ど全焼したことがある。その時東京の新聞などでは、九谷焼かまもとの窯元が全滅した、当分九谷焼を産出することは出来ぬだろうなどと書いていた。

この溪流の下流の所に、山代やましろという温泉と大聖寺だいしょうじという人口一万ばかりの町がある。この二つが古い九谷焼の面影の幾分残っている産地なのである。私の故郷はこのすぐ近くである。

明治維新の頃、奈良の五重塔が五十円で入札にゅうざつに附された頃、九谷焼も同じような悲運に会って、殆ど一時全滅していた。古い九谷焼は、この時において事実上跡絶とだえたわけである。それが、明治二十年頃からか、ぼつぼつ大聖寺山代及びその附近の村などに窯かまを築く人が出来て来て、こんな目立たぬ所に、九谷焼の復活の曙光しよっこうが見えて来たのである。その人々の中でも特にルネッサンス的気分の濃い人たちが集つて、九谷の村から粘土をとり寄せて熱心に旗上げをしたのであるが、余り辺僻へんぺきな所で、運搬の費用に耐えられなくて直ぐ失敗に終つた。しかしこの時、真面目まじめに造り出したもので、今は真正の古九谷として、東京や大阪の富豪の蔵におさまっているものが案外多いとのことである。このことは余り知られていないことである。

それから色々の所の土を用いて、絵だけは昔の様を継いで来ていたのであるが、この頃では、尾張おわりなどから生地きじを取りよせて、絵だけをつけることにしている人も多いらしい。

父が生きていたら、憤慨することだろう。

私が小学校へは入った頃から、四里よりばかり離れた隣郡ととなりぐんに寺井てらいという町があつて、

そこに陶器の会社が出来た。そこでは、九谷を日用品として造り始めた。大量生産で「機械を据え」つけて、製品としてどんどん売り出したのである。これが案外販路がひらけて、四、五年の後には、この方が九谷焼としてより多く認められるようになって来た。しかしこれを老人たちは寺井焼といつて、九谷焼とは称せなかつた。この特徴は、手にさわると、ぼつぼつするように絵の具を盛りあげて、こつてりと花などを一面に書き埋めてあるもので、よく湯呑の内部などに細かい字が一杯書いてある。私たちが見ても俗悪だと感ずる位だから、老人たちの気に入るはずはない。生地きじからいつても絵からいつても、今までのどの九谷の窯とも似もつかず縁故も見出せぬものであるから、無理もないのである。勿論この会社は益々発展して、今東京や金沢の陶器店でさえ、殆んど全部がこの種に属するもので、今では立派な九谷焼の代表者となっているようである。僅か十五年位の間である。分業とか機械作業とかいうものの、有効なる実証であるなどという人があるかも知れぬ。

何に感じたのか知らぬが、私が小学校へは入る頃から、父は急に、こんな事では真正の九谷焼が滅亡してしまうと言いついて、当時大聖寺町に残っていた年とつた画工たちと交際したり、型のように古い陶器を集めたりしていた。私の家は別に陶器屋ではないので、父は家業のひまに、何処どこから取つて来たか色々の白い粘土を、火鉢の火の中に入れて見て「この色が変らなくて、嵩かさの減らない粘土がよいのだ」な

どといっていたことがあった。随分プレリミナリーな実験である。とうとう六年の時の春休みに帰った時、窯をつくるんだといって、庭の物置の隅に高さ五尺位の窯が造ってあった。簡単に粘土に壁土位でつくったものらしかった。乾くと、すぐ罅が入った。父は夕方になると、その前に立って、丁寧はその罅を塗りつぶしていた。するとまたすぐ罅が入った。そして私が夏の休みに帰った時も、まだ根気よく毎日塗りつぶしていた。しかし、とうとうその秋には、窯の方で根気負けをして、太陽がかんかん照りつけても、ちっとも罅がいらぬようになった。しかしその冬から父は病気になって、四月に死んだ。父位着手の億劫を感じなくて、そして根気よよかったら、物理の実験などは、どんどん抄取ることだろうと考えることもある。

私は小学校へは入るために、八つの春、大聖寺町の浅井一毫という陶工の家に預けられた。その頃七十幾つかで、白い鬚を長く伸ばしたよいお爺さんであった。毎日、三方硝子戸の暖い室にきちんと坐って、朝から晩まで絵を付けていた。

その頃、「真正」の九谷焼を護る人々の間には、青絵と赤絵とが、先ず試みられていた。特に赤絵の方が盛だった。青絵というのは、染付のことで、呉須土で描いた南画めいた構図で、よく寒山拾得のような人物や山水などが、達筆に密画でなく描かれていた。呉須は非常にむつかしいのだそう、これで当時一家をなしてる人はなかつたようだ。赤絵という方は、朱で極々細く念入りに描いたもので、これには

必ず金きんが使つてあるのが普通だった。少し離してみると、薄赤色に見えるほど細く井桁いげたを組んだり、七宝しっぽうで埋めたりするのが特徴といえる。西洋人が家へ来て、手で描いたのではない、判で押したのだといつて、どうしても聴かなかつたことがある位である。それから赤絵に使う金きんは、どうしてやるのか忘れたが、とにかく焼き上つた時は鈍い黄色をしている。それを粗穀もみがらで力一杯こす擦るのである。すると、だんだん気持のよい光沢が出て来て、金らしくなるのである。この金は、それだから、梨地なしじのような光り方である。寺井焼の方の金のことを、「水金みずきん」だから温泉に入れるとすぐ変色するし、鍍金めっきのような「あだ光り」がするといつて、問題にしていなかつた。私も随分手伝わされて、手が痛くなつたこともあつた。しかし面白かつた。

一毫のお爺さんは、赤絵が専門だった。殊に竜が得意ちみらしかつた。「魑魅ちみを画かくは易やすし」ではなく、お爺さんの描いた竜を毎日見ていると、本当にいてもよいような気がするほどだった。しかし「竜は雲があるから描けるので、頭から尻尾しっぽまで描けといわれたらちよつと困る」と話してくれたことがあつた。妙に今まで忘れないでいる。

いつか、『中央美術』で紹介されたこともあるが、この一毫さんと、まだ一人、中村秋塘なかむらしゅうとうとの二人は、この仲間の人でも同じく、滅多に自分の描いた陶器の裏に九谷と銘めいを入れることはない。大抵自分の名だけしか入れない。つまりぬことだが、

床しいような気がする。

中村秋塘の方は変なことで知っている。小学校の三年の時から、父の厳命でこの中村秋塘さんの所へ英語を習いに通ったことがある。英語はちつとも進歩しなかったが、陶器のことは色々覚えた。真黒い鬚かんうひげのこわい顔にも似ず親切で好きだった。今から考えて見ると、随分変な先生を撰えらんでくれたものだとも思えるが、あるいは幼い頃から、名工と名付くべき人の特殊の感化を受けるようにと、父の深遠な理想があつたのかも知れない。それなのに、自分は今になつてもまだ、世間的の榮譽などに心を惹ひかれがちになつて苦しんでいる。

秋塘さんも赤絵の方が多かつた。一毫の爺さんよりも、年が若かつたせいとか、精力家で、精練の作をどんどん出してた。そして、その頃から随分苦心して、新しい焼を出そうと色々骨を折つていたが、私が五年位の時に、初めて半ば成功した花瓶を父が貰もらつて来て、説明してくれたのを覚えてる。名前は玉質焼といつて、全然気分のかわつた淡い水彩画のような感じのもので、地じを卵色の瑛瑯ぼうえうで焼き付けて、模様を白く残したようなものだった。この玉質焼は、一年位の間に随分進歩して、売出す位の程度になつていた。

一毫さんは、私の中学時代に死んだ。先年国へ帰つた時、三方硝子戸の室には、中学の先生とかいう、若夫婦が間借りをしていた。おばあさんが、久しぶりなので

喜んで、大きくなったと褒めてくれた。秋塘さんはまだ元気だった。関羽鬚がちつとも白くなっていなかった。そして、玉質焼は益々進歩して、渋味のある立派なものになっていった。まだ改良と工夫とを怠っていないのだと見える。

大聖寺では、他にM氏といって柿右衛門の赤をよく出している人がある。蒼い顔をしたおとなしい人で、さほどの年でもないのに、この頃は余り描かないらしい。何となく、諦めているというような感じがする。その息子は機業場の事務員となつて、新調の背広を着て毎日通っていた。それが得意だったらしく、家へ帰つても仲々洋服を脱がないでいた。

金沢の高等学校には入つてからは、夕方の散歩に陳列棚を覗きこむ位のものだつた。九谷窯元と書いた看板が、軒並に並んでいたが、皆寺井でつくつたものばかりだった。ただ一軒、犀川の橋の袂にあつた大きい店で、自分で窯をもつて研究しているらしい、親切的な製品を並べている所があつた。

それから、父が死ぬ前「もし窯が出来てうまくいったら、秋塘と竜山とを招聘したい」と口癖のように、褒めていた石野竜山のことを思い出して、裏通りの小さい店を探して行ったこともあつた。子供の時の記憶よりも、ずっと鮮やかな立派な赤（赤というのは朱のことであるが）を出してあつた。こんなことにでも、進歩の見えろつということは、非常に嬉しいことである。湯呑の獅子の尾にこの赤を使つてあつ

たが、余り立派なので、買いたくて耐らなかつたが、五円いくらというので、止して帰ったのを覚えてる。

私はまた、金沢時代にN氏という画家の家へよく遊びに行つた。不折の門人だが、金沢へ来てから、日本画特に南画に趣味をもつて、筆致の雄はなくも、軽快な色と頭とで、十分好きになれる絵を描いていた。油絵の方は月並だったが、こつちの方はよかつた。遊びに行くと、よく二時か三時頃まで腰を据えて、そして達磨の話やら鳥窠和尚の話やらをやたら沢山聞いて来た。

此処で結晶焼の菓子鉢を見た。今は帝室技芸員とかになつている金沢の人が、随分永々苦心して得た焼で、器物の上の方につけてあつた釉薬が、焼いている間に適当に流れ落ちて面白い縞をつくり、所々に薬が結晶して、同心円の繊細な花模が出来ているのである。N氏のいう所によるとちよつとの加減で釉薬の流れ方が拙かたり、結晶が発達し切らなかつたり、または発達し過ぎて罅が入つたりするので、数百の中から漸く一個位しか、揚りのよい品は出来ない。それで非常に貴重になるのであるということである。私はこんなことをいって、頑張つて来た。科学の重要なところはそこにあるのだ。薬を精密なバランスで秤つて、色々の組合をつくつて置いて、その各々を色々の温度と色々の時間で焼いて見て、高温計と時計とで、精確な記録をとつておけば、「アフリカの砂漠にその記録を落しておいて、仏蘭人が拾つ

て「焼いて見ても立派な結晶焼が出来るはずですよ」のだ。N氏も勿論同感してくれた。そして色々の学校の窯業科ようぎょうかなどを出た人が、何故もつと組織的に、科学的に研究をしないのだろうと行って訝いぶかっていた。実際、やれば出来るに極きまっていることを、誰もやらないのだから不思議だ。これと同じ不思議は至る処に一杯である。

もう半年で学校を出るという時になって、私は幾分、その理由が分るような気がする。要するに学校教育にそんなことを望むことが無理なのだ。特別な幸運で異常に偉い先生に付くことが出来て、科学の課程ではなく、研究するということの靈感かんろうを感じし体得することの出来たような異数に幸運な学生を除いては、通り一遍のままで卒業した多数の学生には、それは無理もないことである。形骸けいがいを教わって、觀念を教わらなかったのである。勿論、科学の課程即ち材料の中から精神を汲み取る者は、学生自身でなければならぬ。しかし、幾分教育の制度や方法にも欠陥はあると思われる。それは、中学校の物理の教科書を見れば最も明瞭めいりょうであると書いてあるのを見たことがある。

○

N氏の所では、色々のことを知った。十二月の末頃から、N氏は朝風呂あさぶろに行くことを覚えて、毎朝五時頃から出かけた。金沢では、雪の降る真暗まっくらの朝の五時から、一軒だけ湯をわかしている風呂屋があった。明日は画えをかくぞと行って寝ると、あく

る日はN氏が風呂から帰って来るまでに、八畳に毛氈もうせんを敷いて紙を伸べて水を汲くんで筆を洗つてある。N氏の言によると、今まで朝寝をした癖で、急に早く起きたのでは、自分の身体からだのような気がしなくてどうも気が乗らぬのだそうだ。一度は坐すわつても見るのだが、今日は止よすといつて机の方へ向つてしまふ。年賀にいつてその話を聞いて来たのであるが、二月過すきになつても、一枚も画が出来ていない。聞くとあいかわらず朝湯に行つてゐる、帰つて筆を握つては見るのだが、どうもねという。もう八十日余りになりますと、八十遍べんも空しい用意をしながら奥さんも平気なものだ。辞して帰る時、N氏は明日こそ本当に描くぞと奥さんに真面目まじめな顔をしていつていた。奥さんはにつこり笑つて頷うなずいてゐるだけだつた。

それから、N氏は金沢にゐる間に、色々の家に遺のこつてゐる古い時代からの九谷の精密な摸写もしやをつくつて見たいといつていた。色々の発展や分岐の跡が詳しく分つたら、面白いだろうと思うが、随分困難な仕事だろうと思われる。アルゲランダに比すべくもなくとも、それ自身の中に或る価値のある仕事だろうと思つてゐる。どうなつたか知りたいものだ。

大学へ来てからはすっかり縁を切つた。當時をしのぶよすがさえも全部失つた。或る意味からいへばさっぱりした。N氏の所から、震災では九谷焼も勿論駄目だつたらうねといつて、鳥窠ぶく禅の幅ふくをくれたが、床とこのない下宿の四畳半では、空しく行李こうり

の中でねている。今度行ったら額を貫もどつて来なければなるまいと、勝手なことを考
えている。

(大正十三年十一月二十一日)

面白味

昔、伊東で病気を養っていた頃、東京の一流料理店の主人が、遊びに来たことがある。料理店を通じての友人ではなく、同郷の男である。

私にはよく分からなかったが、何でも非常な食通で、料理の腕も一流だという噂の男であった。それで女房が、伊東の材料で、何か料理を教えてもらいたいと頼んだ。それで材料を買いに出たわけであるが、驚いたことには、この先生、道路の真ん中を悠然と歩きながら、「あの牛蒡は食える」とか「あのこんにやくはいい」とか言う。指差す方を見ると、なるほど小さい八百屋の店先に、そういうものがならんでいる。それらを買って来て、いろいろな料理をしてくれたのであるが、そのうちの牛蒡の煮附には、ちよつと驚いた。土のついた牛蒡を洗って、大きく斜めにさつさと切つて、鍋に抛り込む。そして酒と醤油だけで煮附ける。それだけのことである。醤油など、一升瓶からドクドクと注ぎ込むので、大分過剰にはいつたらしい。

食べてみると、果して塩辛い。「どうもこれは辛いようだが」と聞いても、先生すましたものである。「いい牛蒡ですよ。なかなか美味い。唯醤油が少しは入り過ぎたので、少し塩辛いだけだ」と平気な顔をしている。

その時は、ひどく強情な男だと思つたが、考えてみると、そういう理窟も成り立つ。というわけは、この逆の場合を考えてみれば、すぐわかる。

料理のうちには、甘過ぎもしない、塩ッ辛くもない、酸っぱさも丁度いい、何一

つ欠点はないが、唯美味くはない、という料理だつてあり得る。そしてそういう料理が、一番始末に負えない代物である。「美味しいが、唯少し塩ッ辛いだけだ」という方が、まだましである。

これは何も料理だけに限つた話ではない。人間にも、学業は優秀、品行は方正、身体は強健、人附合いは満点、何一つ欠点のない男で、唯面白くはない、という人もある。欠点がないだけに、非難のしようもないので大いに困るが、どうもそういう人とは、本当の友人にはなれそうもない。

もつとも、これは主として日本で通用する話かもしれない。というわけは、日本では、勤勉とか、正直とか、孝行とかいうものは、美德の中に数えられている。しかし「面白い」ということは、美德の中にはいつていない。

しかし外国、とくに英国などでは、ユーモアというものは、美德と考えられている。ユーモアは、諧謔かいぎやくなどと訳しては、どうも趣きが出ないもので、「面白味」と訳するのが、一番いいのではないかと思われる。

(昭和三十年八月十五日)

由布院行

去年の夏のことである。漸く学校は卒業したが、理研りけんの方の建物が出来上つていなかったので、暫く物理教室しぶらの狭い実験室の一隅いちぐうを借りて、仕事を続けていた時のことである。Y君やM君と一緒に、一室で三組も実験をしていて、窮屈な思いをしていたところへ、夏が来た。

夏休みで学生がいなくなると実験の方はだれて来る。誰か一番先に来た男が、紅茶をわかしてピーカーに入れて、手製の硝子細工ガラスの管に水道の水を通して冷して置く。そして顔が揃うと、それを飲みながらとりとめもない話をする。まるで一日何もしないような日もある。毎日能率のあがらないのを知りながら、家にいたって仕様がなかったので出て来る。

何だか頭が疲れて来たので、思い切つて遠くへ出たいような気がして来て、それ以前から卒業したら一度顔を見せて来なければならぬと思つていた矢先だったもので、九州の伯父おじのところへ行くことにした。伯父といつても、故郷にいた時には同じ家にいたり、それに父が早く亡くなったので、自分の子供のように可愛がつてくれていた伯父なので、思い出したら一日も早く会いたくなつてしまった。

伯父のいるのは由布院ゆふいんという所で、九州の別府温泉べつふと同じ系統に属する辺鄙へんびの温泉地である。温泉地といつても、別府から六里りの峠を越した盆地の中で、九州でも

「五箇荘か、由布院か」といつてからかわれる位の山の中なのである。

比較的空いた下ノ関行の急行の窓によりかかつて、独り旅の気軽さを楽みながら、今頃は伯父が手紙を見てどんなに喜んでゐるかなどと、ぼんやり考えて見た。高等学校の頃行つた時には汽車の中の氣づまりきに耐えかねて、瀬戸内海は汽船にしてみましたのであつたが、今度はどうしたことか、大変伸び伸びした氣持になつて、誰とも口もきかず、眠つたような覺めたような氣持でいたので、ちつとも疲れなかつた。

窓を明つ放して涼しい風を納れながら、先生から戴いて来た漱石研究を膝の上にひろげて、読むでもなく読まぬでもない氣持で、時々眼をあげると、瀬戸内海だったりしたことあつた。

夜遅く下関へ着いて、駅前の名もない宿へ泊る。すぐ前は、何とかホテルという大きい洋館だつた。暗い電燈の下で、教室の連中へ葉書を書く。

……汽車の中はすいていてよかつた。二十四時間仮眠して来たので、ちつとも草臥れなかつた。東京からずっと一緒に来た新婚の夫婦らしいのが、初めは大分行儀がよかつたが、だんだん草臥れて来て、口をあけて居眠りを始めたのが印象に残る位で、別に変つたこともなかつた。今夜の宿は路に向つて古い手すりのある旅籠だ。御茶菓子に EISEIGIYO という判を押しした最中が出た。明

日は朝早く海峡を渡る……

帰って見たら、実験室の黒板にこの葉書が貼りつけてあった。そして所々赤インキで○がつけてあった。

由布院へは中学の時に一度行ったことがある。その頃は伯父も別府にいて、夏休みに弟と一緒に遊びに行つた時、由布山へ登るといふので、伯父が二人をつれて行ったのである。その時は六里の峠に馬の通る道があつただけで、折角のいい温泉があらながら、宿屋などといつても、極めてお粗末なのが二軒ばかりあつただけだつた。勿論この附近は、五里四方位どこを掘つても温泉が出るのだから、別に大したことではないのであろう。それが、今度は大分沢山宿屋も出来て、別府から食料品を運ぶ都合で乗合自動車のりあいが通うようになっていた。

この道位、自動車で馳はしつて気持のよい所は少いだらう。何しろ三千尺しゃくの峠を越して、由布院の盆地が二千二百尺の高さなのである。六里の高原を、一時間半自動車が走りつづける。山が急なために、道は色々に折れて、溪たにに沿いながら登つて行く。アメリカの活動によく、広々した高原を見渡しながら、自動車が山腹を縫つて走るところがあるが、丁度あのような所なのである。大きい岩の蔭かげで急に道が折れる時など、自動車が丁度天へ馳かけ昇るような気がする。岩を越して、その裏に脈々として続く道を見るまでは、随分冷や冷やすることもある。時々ふり返ると、別府灣がだ

んだん低く小さくなって行く。登りつめた頃から、周囲は茅の草原になる。鶴見山、由布山のなだらかな麓に、針葉樹の黒い密林が望まれる。そして緑の高原が遠く続いて、ゆるやかな起伏に沿って、所々に黒土の道があらわれている。自動車は安心したように全速力を出す。ここまで来ると、急に空気の冷やかさに気が付く。

こんな景色が一時間近く続く。赤倉の野は三里というが、草原を走る自動車の道は一里に足らない。由布院の盆地の斜面にかかると、自動車はエンジンを止めて、緩やかに降り始める。由布院が見える頃になると、この斜面一帯に牛が放牧されている。自動車の行手にも平然としていて、怪訝そうにこちらを見ていることもある。そしてずっと近くになってやると愕いて逃げ出す。時には、道の反対側で草を喰っていた仔牛まで、親の逃げる方へ飛び出して轢かれそうになる。運転手は慌ててブレーキをかけながら、「馬鹿ー」と大声でどなりつける。その仔牛の周章て方には思わず吹き出させられる。

「こんなところにいる牛は随分仕合せですね」というと、相乗の爺さんが、「いいや、それでもごわんせん。彼奴らもやっぱり淋しくなると見えまして、時々家へ戻って行きますが、叱りつけられてまた山へ行きますわい」という。何でも、農繁期の時だけ連れ帰って仕事をさせて、後は邪魔になるのでまた山へやって置くのだそうである。牛共も毎日一回運転手に叱られて、時々はおかみさんにも叱られて、やはり

あのよういきよとんとした顔をしているのだらうと思うと、ちよつと可笑しくなる。伯父の家は、金鱗湖きんりんこという小池のふちの茅葺かやぶきの家である。別府で一流のKというホテルの主人の別荘地べつしやうぢを拓ひらいているのである。伯父も変り者であるが、Kの主人はまた一層変っている。こんな山の中に六千坪の地面を買いこんで、金鱗湖などという池まで取り入れて、それを全部伯父に預けて、その趣味のままの庭園を拓かせようというのであるから、その計企けいきからして世離れがしている。伯父が遠い国からやって来て、別府に移り住んで間まもない頃、雑草のようなものを鉢に植え込んで軒先に出して置いたのを、Kの主人が通りがかりに見て、感心してはいり込んで来たので知り合いになったのだそうである。

六千坪の草原は半ば以上拓かれて、趣おもむきのある日本式の庭園になっていた。そしてその中に小さく建っている茅葺の家まで、庭園の一つの景物けいぶつとなつているのにも、伯父らしい用意しよひが俛ひばれた。

自動車の音を聞いて、伯父は素肌すはだに帷子かたびらの袖無しそでなを一枚着たままでとび出して来た。三年ぶりなので、さすが白髪は目立っていたが、思ったよりも元氣であつた。

ひと一わたり東京の話をきいて、伯父は如何いかにも満足らしく喜んでくれた。実は卒業した年の四月ちよつと忙いそしかったもので、暫しばらく手紙を出さなかつたところが、落第

したために通知が出来なかつたものと合点して、「誰でも間違いはあるものだから、もし落第なんかしたのでも気を落さないで」などと、慰めの手紙を寄してくれたことがあつたのであるが、こんな所で、山と雲だけを眺めている伯父の身にとつては、もつともな心づかいであつたのである。

東京の忙しい生活に追われていた自分は、久しぶりで昔の生活に返つたような気がした。小川をとり入れた小さい池も、伯父が自分で彫つたらしい梅里庵という篆字の額も、すべての風物が珍しかった。帆足万里の軸の前に坐つて、伯父は今の生活の心安さを色々と話してくれた。茄子を作つたり、野菊やトマトを植えたり、鯉を飼つたり、鶏を養つたりして、まるで自給自足の生活であるが、別に不自由は感じないから安心してくれといつた。「人はみんな、わしのことを由布守といつてくれるので、もう人間はどうして暮すのも一生だからのう」と伯父は全く上機嫌であつた。色々の事業をやつて、何時でもその隠棲的な趣味のために結局は失敗して来た伯父は、六十になつて漸く満足出来る境界を得たようであつた。それにこの高原の空気と自給自足の労働とが、よほど健康にも好かつたらしく、たださえ頑丈な身体が益々丈夫そうになつていた。これから発達しようという由布院の温泉地の一廓からは全くかけ離れているので、少しも気づまりな点がなかつた。伯父は夏になると、どんな客が来ても、この浅黄の帷子の袖無しを一枚素肌ひっかけたままで応

対するのであった。その袖無しには、ちゃんと背に一つ大きい家の紋がついていた。「丁侯爵こうしやくが来られた時でも、わしはこれ一枚で御免ごめんを蒙こうむるんで」といって、伯父は由布守をもつて自ら任じていた。しかし八月でも、自分のような余り強くないものには、肌脱はだぬぎなど出来そうもない涼しさであった。

趣味の方では、伯父は一廉ひとかたの見識をもつていた。それで庭などを造るにも、金鱗湖とか、その向うの由布山の密林とか、裏の田とかいうものが注意して背景としてとり入れてあった。家の後うしろには流れの速い川があつて、日常の生活はこれで足りていた。飲用にもなつた。従弟いとこは自分のために、この川へ硝子罎ガラスびんを沈めて鮠はやを取つたり、笹ささを持ち出して蛭しじみを拾つたりしてくれた。そして秋だつたら、由布山の麓ふもとを一周りして来れば、初葺はつたけが籠かご一杯とれるのにと残念がつてくれた。

永く隔絶かくぜつされていた土地だけに、天産物は豊かだつた。六年前に来た時、例の汚い宿で、金鱗湖の鯉こいは名物であるから見て来いと勧められて、夜更よぞくなつて見に行つたことがあつた。その時には、その池に一杯になる位沢山大きい鯉こいがいて、月明りの下で盛さかんに跳わたつていた。勿論養魚場ようぎやうじやうだろうと思つていたのに、今度来て見ると一匹もない。聞けば、主ぬしのない池だつたので、鯉は自然に繁殖はんしよくしていたのださうで、この頃になつて乗合自動車りやく自動車が通うようになつたら、みんな捕とらられてしまつたのだぞ

うである。余り暢気な話なので可笑しくなつてしまった。

伯父は丹精して作った野菜やら、鯉やら、鶏やらを沢山御馳走してくれた。川端で鯉を料理して、その腸を雛子にやると、大騒ぎをして喰べた。鱗まで呑み込んでしまった。鶏が動物質のものをあんなに喜んで喰べるのは初めて見たので、ちよつと意外な気がした。それよりも驚いたのは鯉である。伯父が、スープにした鶏の骨に庖丁を二、三度入れて、それを池へもつて行くと、鯉がみんな浮いて来る。そしてその骨を喰うのである。二寸近くもある鶏の脚の骨を、二、三度不器用に大きい口で啣えたり吐き出したりしている中に、すつぽりと呑み込んでしまうのである。信州で蛹を喰う鯉を見た時には、何だか厭な気がしたのであるが、今度は余り意外なので全く驚いてしまった。ちつとも厭な感じが起らずに、かえつてその太い骨を呑み込んで、悠々としている顔が滑稽にすら見えた。

深山にはいった気持は、雨の降る日が一番強く感ぜられる。由布山の頂は、大抵の日は雲がかかっているのであるが、それが段々降りて来ると、薄墨色の雲がこの盆地一杯に垂れこめて来る。すぐ前の林も隠されてしまう。時には窓から部屋の中へはいつて来るのが、よく眼に見えることもある。氣象学上の定義からいえば雨と称すべきものかも知れないが、その大粒の雲粒は、殆んど水平に近い線をなしてか

なりの速力で飛んで行くのがよく見える。

こんな日に限って、夕方になるとよく霽れて来る。山の頂がくつきりと浮き出して来て、雲は細長い帯のようになってその麓に静かに横わっている。

雨上りの夕方、伯父は跣足で庭に降りて、トマトの蔓をしばってやっていた。野菜でも盆栽でも、伯父の作るものは皆よく育つ。浴衣一重で肌寒い思いをしながら、私は傍に立っている。伯父は手を動かしながら、こんな話をする。昔、盆栽の一番の薬は何かと聴いたら、主人の鼻息だと教えた人があったそうだ。盆栽でも、こんなものでも、他人に任せて置くようでは確なもの出来ないのだ。私は昔、蘭の鉢を沢山並べて、その葉を一枚一枚撫でて、埃をおとしていた伯父の姿をふと思い出した。

Kの主人は、時々珍しい客があると、連れてやって来る。あるいは客の方は口実で、本当は自分が来たいのかも知れない。つるりと禿げ上った大きい額と、鼻の先にのせた金縁の眼鏡とが、三年前に見た時とちつとも変っていない。

この主人は、掌の大きいのが一番の自慢なのだそうである。何か書いてくれといわれると、その掌に一杯墨を塗ってべったりと押して、その横に目下開山二十山を凌ぐこと五分と書くのが得意である。伯父の家の画帳も勿論その厄を蒙っていた。

この前も、九州大学の先生を連れて来たことがあったそうである。大学の先生と大きくと、いつでも伯父は、「悴せがれが——私のことを悴せがれというのである——東京で、T博士の助手をして研究をしておりますわい」と自慢をするのだそうである。後あとで先生の所へ来た葉書で、九大のK博士ということが知れたのであるが、随分びつくりされたことだろうと思つてちよつと可笑おかしかった。

私が行っている間にも、KKさんが来た。雨上りの田の畔あぜをいい気持になつて散歩をして歸つて来たら、「今歸らつしたところじゃがKKという人が来たが、東京の人だそうだがお前知つてるか」という。「それは大分有名な小説家ですよ。会つたことはないが、名前はよく聞いています」というと、伯父は道理で大分物の分つた人だと思つたと褒めながら、画帳を開いて見ている。見ると、何やら歌が書いてある。

何でも、伯父の作つた胡瓜きゅうりの漬けたのを、美味うまい美味いといつて随分沢山食つて行つたことと、それからこれも伯父の趣味であらうが、ここの浴室は、全然離れた庭の端の金鱗湖のすぐ畔ほとりの所に、亭ちんのように一棟立っているのであるが、その浴室のことを大変簡素でいいと褒めて行つたのだそうである。それで伯父が大分物の分つた人だと感心した次第なのである。実際のところ、この浴室は仲々いい。屋根は茅葺で天井も張つてないものであるし、浴槽というのはただの木張りに過ぎないのであるが、温泉に浸りながら山を見るように注意してあつたり、浴槽の底こまかに細い砂利

を敷いてそれを度々よく洗って、いつでもフレッシュな砂利の感じを足裏に与えるように気を配ったりしてあるところが、如何にも伯父らしい。それに温泉が非常に透明で、また豊富なために始終出流しになっているので、いつ行つて見ても、底の細い黒い砂利がゆらいで見えているのである。

ただ一人でこの温泉に浸りながら、伯父が昔、座敷の床の天井の見えない所に上等の板を使つて得意になつていたのを思い出した。伯父の趣味も、あの頃から見ると随分進んでいると思つて見ることも愉快であつた。

高い所なので、冬は殆ど雪に埋れて暮すのだそうである。冬の仕事に沢山白檀の木を買つてあつた。この附近に、平家の落武者の墓があつたといわれている一叢の林があつたので、伯父が見に行つて見たら、それが全部白檀の林だつたのだそうである。今ではこのような九州の山奥でも、白檀のそのような大きい樹は殆んどなくなつているので、伯父は大変喜んで、それをみんな買ったのだそうである。

移せるような木はこの庭へもつて来たが、大きいのは仕方がないので伐つてしまつて、それで冬の日は殆んど毎日、盆だの像だのを刻んでいるのであつた。初めはほんの手弄みだつたのが、だんだん色々なものを彫つている中に巧くなつて来て、自分でも面白味が出て来て、しまいには仏像なんかまで試るようになったのだそう

である。道具といつても極めて粗末なもので、切出しの小刀とか、鋼の帯金を研いで作った鑿位のものであるが、生れ付凝り性の上に、半年の間退屈まぎれに毎日から晩までこつこつ刻んでいたのも、一廉の彫刻家になつてしまつたのである。昨年祖母が亡くなつて、その供養のためといつて作つた観音像などは一尺八寸ばかりもあつて、余り面白い出来なのでちよつと驚いた位である。

盆なども色々の大きさのものが沢山作つてあつた。白檀の太い幹のところは木目が入り組んでいるために、鑿の方向を始終変えねばならぬのだそうで、そのためにかえつて、交錯した鑿の痕が自然で面白く出ていた。白檀の木というものが、大変いい香のするものであることも初めて知つた。帰る時には、一番上出来の茶盆を一枚くれた。

一週間ばかりいる中にすっかり気持が變つて来て、大変伸び伸びした。研究なんかどうでもいいと思うほどにはならなかつたが、余り忙しく働くのも考え物だと思つ位にはなつた。

いよいよ帰るといふ日になつて、伯母は大変名残りを惜んだが、伯父の方は案外平氣だつた。「何処にいるのも同じこつた。来年の休みにはまた来い」と、伯父は極めて淡泊であつた。

(大正十五年五月二十日)

サラダの謎

私はごく普通のフランス風のサラダが好きである。レタスとトマトを、酢とオリブ油でドレスしただけの簡単なサラダのことである。洋食は、一般にいつてあまり好かないが、このサラダだけは例外で、食卓に出ていると、つい先に手が出る。

ものの好き嫌いなどというものは、たいてい子供の頃か、せいぜい二十代までの生活環境できまるものらしい。私がこのサラダを好きになったのは、若い頃、もう三十年も昔のことであるが、ロンドンに留学していた頃に、下宿で毎晩非常にうまいサラダを食わされたのが、今日まで後をひいているようである。

大学を出て、三年間理研^{リケン}で、寺田寅彦先生の助手をつとめていたが、北海道大学に理学部が出来ることになって、急に文部省の留学生として、ロンドンへ留学することになった。

ロンドン人は、人づき合いが悪く、世界で一番英語の通じないところは、ロンドンだといわれている。そこへまだ三十前の、しかも日本でも田舎育ちの若い者が、突如として放り出されたのであるから、ずいぶん心細い思いをした。しかし幸いなことに、非常に運がよくて、思いがけなくよい下宿にめぐり合い、それですつかり落ちつくことができた。

家はロンドン郊外の住宅地にあつて、主人はオーチス・エレベーター会社の技師長であつた。そんな家は一般にいつて、東洋人などは家に入れてくれないのである

が、その夫人がフランス人であった。そして日本に好意をもっていたようで、親身になって世話をしてくれた。

その夫人が、料理自慢の人であって、毎晩たいへんな御馳走ごちそうをつくってくれた。英国のことであるから、先祖代々伝わったオークの立派な食卓で、毎晩家族一同が、きちんと着物を着かえて、晩餐ばんさんの卓につく。今から考えてみれば、英国人へ嫁したフランス婦人の気持が、その蔭かげにあったのかもしれないが、当時はそんなことがわかるはずもなく、毎晩たいへんな御馳走でびっくりしていた。

そのなかでも、とくに印象に残ったのが、サラダである。レタスとトマト、あるいはレタスとセロリのサラダであって、そのレタスが非常にうまかった。記憶が確かでないが、一年中新鮮なレタスがあったような気がする。現在ののように「輸送農業」が発達したアメリカならば、別に不思議な話でもないが、当時のロンドンで、年中新鮮なレタスがあったのは、ちよつと不思議な気もする。

それはあるいは記憶ちがいだったかもしれないが、とにかくこのサラダが非常にうまかったことは、事実である。キングス・カレッジの地下室で、一日中神しんにこたえる高真空の実験に気を張りつめ、くたくたになつて帰つて来る。そういうときには、肉類よりも、まずこのサラダに手が出るのであった。

それと今一つは、当時の日本の経済状態も、一つの要因をなしていた。清浄野菜

などは夢にも考えられなかった時代のことである。寄生虫の心配なしに、生の野菜がばりばり食べられるということ、何だか別の世界へ来たような気がしていた。

実験の都合で、まれには午後早く帰ることもあった。そういうときに、或る日のこと、台所へちよつと顔を出したことがある。そしたらその夫人が、晚餐のサラダをせっせとつくっていた。レタスは手でちぎらなければならぬような料理学の初歩を、そのとき初めて知った。

それよりも不思議だったのは、レタスを木鉢に一杯入れたあと、何か石鹼せっけんのかけらみたようなものを、パンの切れはしにこすりつけて、それをサラダの中に入れたことであつた。そういえば、毎晩の食卓で、サラダ鉢の中に、パンの切れはしがはいつていたが、これは皿にはつけないものであつた。何かあのおまじないが、サラダをおいしくするこつ、のようこに思われて仕方がなかつた。しかし男が料理のことなどきくものではないと思つていたので、別にたずねてもみななかつた。

その後、日本へ帰つて、北海道で家をもつてみたら、毎日の食事が問題になつてきた。北海道では料理の材料が、われわれ子供の頃から育つてきた環境のものとは、だいぶちがつていたからである。それで思い出したのが、ロンドンで毎日食べていた、フランス風のサラダである。

北海道の気候は、ああいう西洋風の野菜の栽培には適しているはずである。しか

し市場にあるものでは、下肥しもじえを使ったかもしれないという心配が大いにある。それで庭の一部に小さい畑をつくって、そこで妻がレタスをつくることになった。レタスなどつくってみれば、何でもないので、デパートから買ってきた種を蒔まき、油かすを入れておけば、結構立派なレタスが出来た。当時の札幌は案外ハイカラな街であつたらしく、ヴィネガーもオリーブ油も、簡単に手にはいった。

それで待望のサラダがつくられたわけであるが、食べてみると、どうも昔の味がしない。材料は全部同じもので、別に煮たきするわけでもないのに、味がまるで違っている。ヴィネガーと油と塩と辛子とを、いろいろ分量をかえてみても、やはり駄目である。結局これはあの石鹼のかけらをパン切れにこすりつけるおまじないに、何か特別の意味があるらしいということになった。

それで妻は、同僚の夫人たちのうちで、外国生活をした経験のある人たちに、折があるごとに、この「石鹼の謎」を聞いてみたらしいが、その謎はついに解かれなかった。その間三十年かかったわけである。

ところで今年になって、この三十年越しの「サラダの謎」が、いとも簡単に解けてしまった。それは二女が欧州から帰つて来て、「パパの石鹼の謎がわかったわ、あれはにんにくだったのよ」と、一遍に片付けてくれたからである。

この娘は、絵の勉強と称して、パリとマドリッドとに、二年間行っていたが、こ

の夏アメリカへ帰って来て、グリーンランド帰りの親爺おやじの世話を、目下しているわけである。パリで友だちの家の娘さんが、サラダをつくるときに、にんにくをパンの固い切れはしでこすって、それを入れているのを見て、昔のパパの話思い出したというのである。なるほどにんにくならば、安石鹼のかけらと同じような灰白色をしている。それから西洋には、わさびおろしのような便利な機械がないので、乾からびたパン切れを、わさびおろしの代りに使っているわけである。

これで三十年越しの謎が解けたので、ヨーロッパへ二年間やっておいただけの値打ちはあった、といったら、娘は大いに不服のようであった。しかし気はやさしいらしく、その後、思いなおして、毎日このサラダをつくってくれている。

レタスの水切りをして、手で適当にちぎって、それを冷蔵庫の中に入れておく。夕食直前にそれを冷蔵庫から出して、おまじないをして、食卓に出してくれる。冷蔵庫の中で冷やされたレタスは、パリパリと歯切れがよい。物質文明の進歩も、まんざらす棄てたものではないと、親爺は満足している。

(昭和三十五年一月五日)

南画を描く話

昨年こぞの春から、自分では南画と称しているとこの墨絵を描くことを始めた。

南画を描くなどというひやと、段々年をとると、油絵よりも墨絵の方が良くなるそうだねなどと冷かされることもある。しかし私の場合は、そういう趣味が枯れて来たなどという洒落しやれた話ではなく、もつと現実な理由があるのである。

それはこの頃のように段々忙しくなつて来ては、どうにも油絵など描いている閑ひまはなくなつてしまつたからである。

閑のあるなしは、時間の問題ではなくて、心持の問題だということは真理であるが、それにしても、油絵のように、正味十時間とか十五時間とかとられるのでは、どうにもやり切れない。

その点墨絵の方は大変便利であつて、描きかけたら、一時間か二時間あれば大抵の絵は出来上る。もつともいくら初年生の絵描きでも、少しは構図も考えたり、物を見たりする必要はあるので、全体としたら一時間で出来上るわけではない。しかし物を見たりする方は、いくらも時間のやり繰りが出来るので、正味の時間が潰つぶれることはないので、大変助かるのである。少し不心得な話であるが、興味も必要も余りない会議の席などに何時間も唯顔ただを並べているだけの時などは、卓の上にある羊歯しだの葉の形を見ているというような場合もあり得るわけである。

この正味の時間をとられるかとられないかということが、私の南画を始めた決定

的要素であったのであるが、少し描いて見ると、段々面白くなって来て、この頃は自分ながら少し可笑しいくらいの熱の揚げ方である。もつともそんなに時間が無いのなら、何も新しい道楽など始める必要もないはずである。それにはたから見たら随分無理なやり繰りをして、妙な墨絵を描いているところを見ると、よほど道楽者に生れついでいるらしい。

その弁解をするようであるが、実はこういうことも少し考えているのである。

それは、前に「墨色」という雑文を書いた時に詳しく言ったように、寺田先生の墨流しの研究や、墨と硯すずりに関する物理的研究を読んで、東洋の精神の一つのあらわれといわれている墨色という現象について、非常な興味をいだいたことがあった。そして今に停年にもなつたら、少し墨色の科学的な研究をして見たいという希望をもったことがある。

それで機会があるごとに、良い墨絵を見たり、墨の話の話を聞いたりしていたので、非常な名墨と駄墨との色の差くらいは分るようになった。そうになると、やはり自分でも少し描いて見たくなって、とうとう墨色の科学的研究に関する基礎技術の練習を始めることになったわけである。

前に油絵を始めたのは、寺田先生の油絵を見て羨うらやましくなったのが機縁であった。大学を卒業して、先生の助手になった時に、初めて油絵具というものを買った。そし

て油絵具にはいくら油をさしても色は淡くならない、そういう場合には白を混ぜるのであるという知識だけを基にして、十枚ばかり色々と工夫して油絵を描いて見た。十枚目くらいになって、やっと自信のある作品が出来たので、先生の御宅へ持つて行って御目にかけた。そしたら先生から「ふうん、およそ油絵というものを少しでも習った人ならば、こうは描くまいという風な工合に描いてあるね。なかなか面白い」と褒められた。それに勇氣を得て、その後益々精進することになったわけである。

ところで、今度の南画にも、もう亡くなられた先生との直接な機縁があるのには、自分でも少し驚いている。

もう一昨年のことであるが、その頃まだ伊東で病後の静養をしていた私のところへ、津田青楓つだせいふうさんから、或る日小さい小包が届いたことがあった。あけて見たら、一尺五寸角しやくすんかくくらいのくしゃくしゃになった紙片に淡彩の墨絵を描いたものはいっていた。書架と花の絵で、その下に、大正八年一月五日寺田寅彦てらだとらひこと、毛筆でローマ字の署名がしてあった。

同時に手紙が来て、戸棚の隅を整理したら、反古ほんこにまじってこの絵が出て来たから君にあげると書いてあった。大正八年といえば、丁度先生があの大意ですつと休まれる直前のことであつて、胃の工合がもう大分良くなかつた頃である。

その前年の秋には『中央公論』に「津田青楓君の画と南画の芸術的価値」が出ているが、この頃は、時々先生は津田さんのところへ遊びに行かれて、毛筆淡彩の素描などを試みておられたらしい。その時の絵が一枚反古にまぎれ込んだまま二十何年ぶりで見つけ出されたのである。

私は先生の絵は一枚も持つていなかったもので、本当に夢かとはばかり喜んだ。特にこの絵は非常な傑作で、簡単な素描ながら、その気韻と香りの高さには心のしずまるものがあつた。覗き込んだ細君まで「何だか音が聞えて来るような絵ですね」とわけの分らぬことを言う始末であつた。

早速表装をしてもらつたら、すっかり新生して、見ちがえるようになった。私は嬉しくてたまらないので、上京の時持つて行って、誰れ彼れに見せて廻つて、大得意であつた。

岩波さんの所へ行つた時に、丁度安倍能成さんが見えていたが、この絵を見せたら、「うん、これは寺田さんの生涯の傑作だ。大事にし給え」と言われた。岩波さんは残念がつて「君がそれを専有するのは少し怪しからん。僕にくれないか。そうすれば皆に見せられるから」と言われたので、慌ててしまいこんで伊東へ逃げ帰つた。こういう掛物は三日以上かけ放して置いてはいけないことなので、時々かけて見では独りで喜んでいるうちに、とうとう自分でも何か描いて見たくなつてし

まった。そして本当に始めてしまったのである。

初めに描いて見たのは、雪の結晶の絵である。この題材は後から考えて見ると、なかなか巧いものを選んだものと自分にも思われる。第一今までに余り知られていない型の結晶を描いておくと、少しくらい口の悪い連中に見せても「へえ、こういう結晶もあるかね」と、その方に気をとられるという利得がある。その上、雪に興味をもっている人たちに見せると、大抵は一枚欲しいものですねと言ってくれる。

もっともそれもこの頃のように、少し絵らしくなつてからの話であつて、初めに描いて見た頃は、どうにもならないものであつた。淡墨でしかも相当墨を淡くして描く方が有利であることは直ぐ分つたが、それでは沢山の結晶を並べると、余り単調になる。というよりも、どうにも絵にならない。

それに立体的に発達した結晶は、やはり濃淡をつける必要があるし、その上省略がなかなかむづかしい。おだやかな伊東の冬を火燵こたつにあたりながら、顕微鏡写真を眺めては、結晶の特徴を考えて見るのは、ちよつとよかつた。その方はすぐ考えがまとまつて、必要な線も案外簡単に発見出来た。少くともそういう風な気持にはなれたのであるが、表現しようとなると、話がまた別になる。散々苦心をして結局出来上つたものは、雪菓子の包紙つみみかみのようなものであつた。氣韻どころの騒ぎではない。

二、三枚描いて見たが、ちよつとも進歩の形跡が見えないので、そのままにして、時

機の熟するのを待つことになってしまった。

その後大分経^たつてからのことであるが、或る日新聞の写真を見て、一つの発見をした。それは知った人の顔が沢山並んで小さく写っている写真であったが、それが皆ちやんと誰れ彼れの顔に見える。一人の顔が小豆粒^{あずきつぶだい}大に写っている写真である。よく気をつけて見ると、顔の形をなすものは大部分が黒くて、その一部に白い斑点があるだけのものである。中間の墨色のような所は殆^{ほと}んどないし、白い斑点の形も殆^{ほと}んどどの顔でも同じような恰好^{かっこう}である。それでいて皆の顔にそれぞれの特徴が出ていて、表情までも分るのであるから、これは大したことだと感心した。後から考えて見れば、専門の絵描きの人には一笑に附されるにちがいない分り切った常識であろうが、その時はひどく感心した。

こういう場合、原因としては、人間の眼が恐ろしく敏感であるからだと言っておけば、先ず無難である。しかしそれは全くの逃げ口上で、敏感といっても、何にどう敏感なのか分らなくては余り意味がない。それで虫眼鏡^{めがね}を持ち出して、その写真の部分拡大して調べて見ることにした。巧く行ったら、黒く出ている顔の輪郭とか、光の当たっている所即ち顔立^{かおたち}を示す白い斑点とかの形に、微小ながらちゃんとした差があることが、分るかもしれないというつもりであった。

ところが新聞のあの粗^{あら}い網目では、拡大して見ると、点ばかり見えて、とても輪

郭の差などが測れるわけのものでないことが直ぐ分つた。もつともあくまで分析的に調べたら、勿論点の大小や濃淡、それに僅かなその配置の差などがあるにはちがいない。そしてそういう色々な要素の差の総合効果が、顔立や表情の差となつて見えるのである。

この議論は、結局顔が似るといふことの形態学まで行かなければ話が納らない。しかしそういう千古の謎にかかわっていることは止めて、先へ急ぐことにする。

今の場合と同じことを絵について言うと、極めて簡単なタツチで、小豆粒大の顔を見分けさせ、その上表情まで出していることになる。そしてそういうことが可能である所以は、描かれたものの形や色にあるというよりも、むしろ見る人の眼と頭とに具有されている各種の要素についての差の総合認識作用にあるのであろう。そう考えれば話は大変巧いので、絵の良し悪しの責任は、半分は見る人に負わせられることになる。特に墨絵のように簡単な線と一色の濃淡だけしか使わないものでは、この見る人の眼と頭との作用を極度に利用する必要がある。

こういう風に言つて見ると、結局東洋画の真髄は観者を共同製作者とするにあるという昔からの言い旧された言葉を、妙な理窟で解説しただけのことだといわれるかも知れない。しかしまあそれでも良いということにしよう。

ところでこういう理窟が分つたとして、それを実際に応用して名画を描くとなる

と、どうしてよいか、ちよつと困つてしまふ。以上はいわば精神論だけであつて、それを活かす技術を研究しないでは、この頃流行の或る種の議論見たようなものである。もつとも蘭の葉一枚描くことも習わないで、名南画を描こうというのであるから、困るのは当然である。

それから暫く経つてのことである。

或る日驪山荘の秦さんのところで、秋田のきりたんぼだの雪菜だのというものを、津田さんと二人で御馳走になつたことがあつた。その時津田さんが、画帖に印度林檎を素描で描かれるのを側で見ている、はたと思ひ当ることがあつた。津田さんは初めに皿を描いて、その上に林檎を描かれたのであるが、じつと林檎を眺めながら、輪郭の一部を描き、ついであの印度に特有な縦の凹みに当る部分に一本の線を入れられたのであるが、その線をひくのに、津田さんは余所眼にも見える位極めて慎重であつた。そうしたら急にただの林檎が印度になつた。あの石を真綿できゆつと締めつけたような感じの縦の凹みが、一本の線だけで出るといふのは、観者の頭の作用を巧く利用しているからにちがいない。

要するに人間というものは誰でも、すべての物について、単にいくつかの要素を抽象した像だけを頭の中にもっているものらしい。それでそういう像を頭の中に再現してやれば、それで満足するのではないかと思つてみた。そうすると、観者を共

同製作者とするための一つの技術は、観者の頭の中にある沢山の線の中の一本をぴんと鳴らしてやればそれで良いので、後は共鳴現象に似た作用で、観者が初めからもっている像が再現され、それが立派な絵に見えるものらしい。

随分独断的な話であるが、南画の秘訣ひけつはここにあるということに決めた。こういう妙なしかもぼんやりしたことでも、とにかく何かの手掛りが出来たので、大いに勇氣を得て、また勉強を始めることにした。

そういうつもりになつて、色々のをよく見ようとしたのではあるが、勿論肝腎かんじんな線がそう簡単に見えるはずはなかった。それでも頭の中の像と実物とを見較みくらべながら、そういう線を探して行くと、時にはそれらしいと氣のつくこともあった。しめたと思つて早速描いて見ると、勿論思ふような形の線にはならない。しかしその方は単に練習の問題であるから、話は簡単である。練習の方もそう時間はかけられないので、なるべく最小労力でとにかく見られる程度のことので我慢することにした。最小労力で胡魔化ごまかす術は実験の方で大分こつが分つているので、墨の濃度を色々かえたり、線の形だの太さだのを工夫したりして、順序立てて色々やって見て、偶然に巧いところにつかうという余り正當でない方法を採用することにした。

どうも不心得な南画家であるが、こういう調子で二、三カ月大分描いて見た。

大抵は描いた直後はなかなかの傑作に見えて、翌日の朝出して見るとひどく下手

な絵に見えた。そういうことを繰り返しているうちに、今度は段々墨色が気になり始めた。

腕の方を目立たなくするには、比較的淡い墨うすを使った方が無難らしいのであるが、淡くすると、今度は墨色がいかにも汚く見えて来て困った。どうせ三円か五円の油煙墨ゆえんすみのことであるから、淡くすると妙に汚い茶色になって、一度気になり始めると、どうにも我慢が出来なかった。なまじつか昔金沢かなざわで中村皓さんの『名墨墨色図鑑』などを見せてもらって、その印象が残っているだけに厄介である。

中村さんの『墨色図鑑』には、唐墨とうぼくの思わず眼をみはるような美しい墨色がいくつも載のっていた。中村さんは「この色でしょうね、幼児の瞳ひとみをのぞいたような感じというのはい」とそのうちの一つを指して教えてくれた。その青みを帯びた透明な黒さでもいべき墨色を思い出して、ああいう墨で描いたら、僕の絵だつてきつと巧く見えるだろうがと思っているうちに、段々それが確信に変わって来て、今までの墨では余り描く元気がなくなつてしまった。

ところが世の中は不思議なもので、思いがけぬ所から、思いがけぬ名墨が手に入るようなことになった。或る所で臆面おそめんもなくこの頃南画を練習していますなどと話をしたら、暫しばらくして、判はんを作つたらどうだといって、丁度その頃札幌へ来ていた篆刻家てんこくかを紹介してくれた人があった。それは平井榴所氏ひらいりゅうじといって、陶印とういんが得意な人であつ

た。

さすがに少し恥かしい気もしたが、度胸をきめて、一組頼むことにした。大分経つてから、平井さんがやっと出来ましたと言つて、その判を持つて来てくれた。早速拝見すると、大変よい出来で、特にそのうちの一つがひどく気に入つたので、御礼を言つた。そうしたら平井さんが大変喜んで「実は私もこの方は近来にない出来だと思つていたんです。この判の味が分るようなら、先生もなかなか眼があります」と褒めてくれた。そして「僕は滅多に人に頼まないのだが、一つ何か絵を描いて、この判を押してもらいたい」ということになつた。それではと、速座に雪の絵を描いた。

平井さんは、その後間もなく九州へ歸つて行つたが、暫くして手紙と小さい小包とが届いた。手紙には「先日の雪の絵はなかなか良いが、あの判を貴方あなたの所しよの朱肉しゆにくで押されてはちよつと困る。別便で朱泥しゆでいを少々送つたから、今後はそれを使つてもらいたい。それから墨もあの墨では困る。唐墨を一本送つたから、それで今一枚雪の絵を描いてもらいたい。それから紙もあの紙では困るので、玉版箋ぎやくはんせんを送つた」という意味のことが書いてあつた。

小包をあけて見たら、その通りにちゃんと揃そろつていた。どうも少し驚いたが、唐墨の試験に絶好の機会と、早速磨すつて色を見ることにした。ところが、その墨は正まさに

夢想していた通りのものらしく、秘蔵の童溪石りゆうけいせきでそつと磨つて見たところ、最初の手触りてざわからもうただの墨でないことがすぐ分つた。なるほどフライパンの上でラードを磨るような手触りとは、こういうのを言うのだと感心した。墨は軟くやわらかしかも硯すずりの面に吸いつくように動いた。

墨色も申し分なかった。僅かばかりの青みが深い所でその黒の基調をなしているような色であつた。この墨を思い切つて淡くして、玉版箋の上に、雪の結晶を一つ描いて見た。なかなか良い出来である。すっかり乾くのを待つて、つくづく眺めると、どうも墨とは思われぬような色である。雪の結晶はあの透明な水晶細工の姿を白い紙の上に現わし、初めて顕微鏡で結晶を覗いた時の感じが出て来た。あとになつて見ると、それほどでもないのであるが、その時はそういう気がした。

墨色は濃淡によつてまるでちがつた色になつた。それで今度は線の形と色の濃淡との組合せになるので、急に実験の範囲が広がつて来た。ところが困つたことには、平井さんの手紙にはまだあとがあつた。「朱泥は呈上可つかまつるべくせうじやう仕候つかまつるべくせうじやう唐墨の方は進呈いんせい致兼候いたしかねせうじやう間あひだ存分御試用の後御返送を願上候ねがいあげせうじやう」というのである。当然のことである。

それでは実験は急がねばならないので、手当り次第に色々なものを写生してみた。中には巧く出来たものもあるし、むずかしくて急にはどうにもならないものもあつ

た。それでも熱帯魚のグッピーだの、コスモスだの、雑草の図だのというものは、どうやら絵になつたらしい。

少し熱中して来たので、今度は鑑賞家が必要とすることになつた。その厄に遭つたのは、近所に住んでいる吉田洋一さんである。余り度々見せるので、少々うるさくなつたらしく、なかなか褒めてくれない。グッピーの図を見せると、「これは八大人の焼直しだね」とすぐ見破つてしまふし、コスモスの絵は矢車草かと思つたというので、いささか出鼻を折られた。もつとも説明をきくともつともなので、要するに墨色が余り良いので、花が紫色に見えたというのである。しかし全体としては、進歩の傾向にあると褒めてくれた。

もう一日もう一日と思つているうちに、一カ月近く経つてしまつた。どうしても墨を返さなくてはならない。とうとう決心して「今この墨と別れるのは女房と別れるよりも辛い」という手紙をつけて、送り返してしまつた。手紙の方は家庭争議の種になるし、今更もとの駄墨で描く気はなし、当分のうちは意氣銷沈していた。

これで南画とも縁切りになりそうなくらい銷沈していたので、色々な同情者があらわれた。そして様々な経緯の末、結局二本唐墨を貰つたので、急に家が賑かになつた。しかし同じく唐墨といつても、墨色はそれぞれが違って、やはり平井さんの墨のような色は出なかつた。結局散々頭をしぼつた末、一生一代の名文の手紙を書い

て、とうとう平井さんからその墨を譲り受けて、やっと落付いた。誠に芽出度い結末になったわけである。

何でもこの墨は、まだ北京ペキンに日本の大使館のあった時代に、その武官が或る人に頼まれて、三本北京で手に入れたのだそうである。そしてその一本は誰とか、今一本は誰とかの手許てもとにあるという由緒付きの墨だという話であった。

この墨色が如何いかに美しいかということ語る話がある。それは或る晩吉田さんが遊びに来ていて、また私が南画を描き、吉田さんがそれを見るということになった。そのうちに一つ合作を武見たけみ国手こくしゅに贈ろうじやないかという話が持ち上った。それで先まずあいかわらずの雪を描いた。そしてら吉田さんが、速座すいざに *Il neige doucement sur la ville* と仏蘭西語フランスで賛さんをした。私は聊か度胆どたんを抜かれて「巧いものだなあ」とひどく感心した。吉田さんはにやにやしながら「なに、ランボウの焼直しさ」と済ましていた。

それを送ってから一月ひしつくらいして、上京のついでに武見さんの家を訪ねた。そしてらその絵がちやんと表装されて、床とこの間まにかかっていた。大変よい表装なので、大いに感謝の意をこめて、一体何処どこでこういう表装をしたのかと聞いて見た。そしてら「博物館でいつも国宝の修理をしている表装屋に頼んだんだよ」という答であった。そして「なかなか良い墨だそうだね。その表装屋さんが、こういう墨は珍しい

と大変褒めていたよ」ということであつた。大いに力を得て、「それだけですか」と聞いたのであるが、「うんそれだけさ」という返事で、聊か物足らなかつた。

紙は満洲まんしゅうへ行った時に、奉天ほうてんの城内までわざわざ行つて沢山買つて来たし、墨も待望の品が手に入ったし、判も朱泥も揃つたので、もうあとは描きさえすればよいわけである。ところがそのうちにそろそろ北海道の早い木枯こがらしが吹き始める頃になつた。写生をするにも野趣のある草花はないし、花屋で売つている華はなかな花を描くには実力が要いるし、ちよつと困つた。

それでやはり摸写もしやをすることにした。もつとも今更蘭竹らんちやくから始めて、十年猛勉強をして、やつと田舎廻りいなかまわの安画家の高弟程度の絵が描けるようになったのでも余り面白くない。色々考えた末、今までの日本画家が余り描かなかつたような題材を選べば一番安全であるという明白な事実気がついた。それで『日本魚類図説』と『日本蟹類図説』とを買つて来た。

この本はどちらも原色版の写真の集成で、ちゃんとした学術的なものである。芸術的な意図は全然ない本であるが、精密な写真と忠実な色彩とでなつている魚や蟹の図は、よく見ていると益々美しく見えて来る。ちよつと時間の半端はんぱが出たりくたびれたりした時などに、当てもなく開いて、色々な魚や蟹の姿に見入りながら、どう描いたらこれが名画になるかなと、ぼんやり考えているのは、大変楽しみなもの

である。そういう目的には、どうも絵よりも写真の方が良いらしい。その良い例は内田清之助氏の『画と鳥』という本に沢山出ている。その中には、色々な鳥の生態写真と、丁度それに相応した姿の絵とが沢山あるが、開いて行くうちに、はっと「これは絵になる」という気がするのは、殆んど全部生態写真の方である。もつとも絵の方は抽象した像であり、写真の方は「全体」であるから、それが当然なのかもしれない。

二つの図説を根気よく見ているうちに、大分魚と蟹の顔をおぼえた。丁度脇本楽之軒氏から『新撰名品綜覧』の第一輯が届けられたが、そのうちの華山先生の異魚図なども、一目見てすぐつばめうおと分つて、独りで得意になった。異魚不知其名云々と贅をしてある絵であるが、あそここの所に Platax teira と学名の贅をしたら、ちよつとペダンティックで面白いかもしれないと、つまらぬことを考えて一人で悦に入っていた。こういう本はいわば文明の利器であつて、或る場合にはなかなか便利なのである。

魚はかきごといいし、だいを描いて見たが、この方は華山先生の絵があるので、どうも見劣りがしていけない。それよりもはなびしがにの方がよほど上出来である。この蟹は蟹脚がむやみと大きく、それが小さい甲羅から二本ぬつと出ている姿は、まるで団子に丸太をつきさしたような恰好である。四本の歩脚は、これがまた全く

釣合つりあひというものを無視した細いもので、妻楊子つまようじを両側に四本ずつさしたような始末である。一体こういう馬鹿げた形のもので、生きてることさえ不思議なのに、実際に南海の磯いそのほとりに地質年代の昔からずっと生存を続けて来ているということとは、全く論外の沙汰さたである。こういう形が一番生存に有利だとはどうしても考えが及ばない。しかし其処そこにはやはり何か本当のものがあるらしく、なるべく特徴を現あらわすようにと忠実に描きあげて見ると、やはり蟹の化物ばけものには見えなくて、奇妙な形の蟹に見えるところが面白かった。

この蟹の怪奇な面影は、勿論その巨大な螯脚はさみにある。そして螯はさみの恐ろしく力強い形がそれに或る美しさを附与している。その力を表現するためには、うんと墨を重ねて濃くする必要があるらしい。それで今度は墨の重ね方の研究を必要とすることになった。

前に寺田先生の墨流しの研究で、水面に墨膜すみまくを作っておいて、その真中まんなかに第二の墨滴ぼくてきを落してやると、その墨が前の墨膜上に一樣ひらがに拡ひろがって行くという実験がされてある。その時、後の墨が前の墨膜上に拡がる速度とか、その到達する距離とか、両者の境界がはつきりつくかぼけてしまうかということとは、前に墨膜を作ってから、次の墨汁を加えるまでの時間によってきまることが分っている。この実験では、墨膜は水面上に浮いているので、乾燥の問題ははいらない。それで両者の墨の融合の

度合は、時間と共に墨膜の墨の實質が変化する度できまるらしい。

紙に描いた場合は、この墨膜の性質の変化と、外ほかに前の墨が乾燥するための影響があるので、話をもっとむつかしくなる。それに濡ぬれている間と乾いてからの効果の著しい差が、初めのうちは見当がつかないので、大分失敗した。それでも色々やって見ているうちに、そのこつも少しはのみこめた。

蟹脚の力の表現はこれで出来たとして、爪つま楊子ようじのような弱々しい細い歩脚がこれと何らかの意味で釣合あつて、とにかく生存をつづけている蟹として完成している姿を作るには、ちよつと工夫いが要いりそうだった。それには一つ巧たくみいことを思いついた。それは秦はたさんの所で見た蟹の絵である。

秦あひがさんは、足利時代あしかがの墨絵を沢山集めていたが、或る時蟹を一匹描いた小品を手に入れて以来、もう外の絵はいらなくなったという執心しやくしんぶりをその絵に示していた。その蟹はなるほど名品であつて、少し身を起おこして石の上に立ち上ろうとした姿いが如何いかにも生きていた。よく見ると、どうもその秘訣ひけつの一つは、歩脚の先の指節ゆびぶにあるらしく、針のように細いしかし強い線いで描かれた指節の突端とつたんが、一石に喰くい入いつていた。それが効きいているらしい。

それで早速それを応用して見ることにした。結果はなかなかの好成績である。少し氣どがが咎とがめるが、絵が巧たくみく出来たのだから、まあ我慢することにしよう。こういう

時に、創意は摸倣もほうの集積なりという言葉は、ちよつと便利である。

こうして名画が出来上つて見ると、今度はその上に素晴らしい賛が欲しくなった。今までの賛は大抵女学生向きだと吉田さんの評が前にあったので、一つ相談をした。見た。「自然は人間よりも空想的であるというのはどうだろう」と聞いて見たら「今度の蟹はなかなか傑作だから、一つ僕が賛をしよう。その文句をラテン語に翻訳して書いてやろうか」と言う。吉田さんのラテン語には私は余り信用を置いていないので、それは断つた。そしたら「それでは英語で我慢しよう」と言つて、速座すざに「To create is divine; To imagine, human」と書いた。こういう文句がすらすらと出るようなら、あるいはラテン語でもよかつたかもしれないと思つた。

賛といえ、これはなかなか大切なものである。絵の方が巧く行かない時でも、適当な配置を考えて、ちよつとはぐらかすような文句を書いておくと、大抵の人はその方に氣をとられるらしい。もつともいつか東京から或る有名な先生と、聡明そうめいをもつて鳴るその奥さんとが来られて、私の家を訪ねられたことがあつた。話のついでに、新一楽帖しんいちらくていしよと自称している自分の画帖を見せた。そしたらその奥さんから「山谷さんの南画というのは、配置と文句で胡魔化しているのね」と言われた。しかしこういう御難ごなんに遭あうことは稀まれで、一般には賛を入れておいた方が通りがよい。

もつといい方法は、誰かに賛を入れてもらうことである。以前から、東京への往

き帰りに、時々仙台で下車しては、小宮さんのところで一泊して休ませてもらって来ることがあった。南画が始まってからは楽しみが一つ増えた。墨と判とをもって行って、私が絵を描いて、小宮さんに賛をしてもらおうという計略をたてたのである。

昨年の秋、まだ本気に南画を始めてから半年も経たぬというのに、大胆にもすっかり道具を持って仙台へ乗り込んだ。その時は家族のものも皆一緒だったので、子供たちを秋晴れの庭で遊ばせながら、私たちは、縁側をすっかりあげ放した広い座敷で、朝から絵を描いた。「人間一度度胸をきめれば平気さといつかおっしやいましてが、その通りですね」というような話をしながら、私はせつせと描いた。小宮さんは「うんなかなか巧いものだ」と言いながら、片っ端から賛を入れて行かれた。世の中で何が面白いといっても、こういう楽しみなこととはちよつと外にはないようである。後になってその話を悪友の一人にしたら「そうか、そんなに面白いものなら、強いて禁止するまでのこともないだろう」と言った。

その時の絵の中では、コスモスがちよつとよく出来た。小宮さんは「これには俳句でなくちやうつらないな」と言いながら、頭をひねっておられた。そして後廻しあとまわにしているうちに、どんどん時間が経って、気がついたらもう汽車の時間が迫っていた。時を惜しむというのは、こういうことを言うのであろう。「それではもう時間ですから。その絵は置いて行きますから、今度までに何か書いておいて下さい」と

言ったら、小宮さんは、「うん、出来た」と筆をとつて、

コスモスに句をいそがるる別れ哉

蓬

と賛をされた。

この幅が立派に表装されたところで、書齋の床の間にかけて、一人で眺め入った。そしたら仙台の秋が近々と蘇よみがえつて来た。鶉ひよどりの来る高い樗けやきの梢こずえはすっかり秋の色にそまり、芝生しばふの中に一叢咲ひとむらき乱れているコスモスの花は、強い日差しに照り映えていた。子供たちは、広い芝生を喜んで、いつまでも馳かけ廻まわっている。六尺の縁えんをへだてて広い座敷には、朱の毛氈もうせんがしかれ、真白ましろな紙がちらばっていた。澄んだ秋の空気は、座敷の隅まではいって来た。そして床の間には、漱石そうせき先生の詩の双幅そうふくがかかっていた。

一年南画を勉強して、誰の前でも平気で描くには、相当の修養いが要る。それよりもそれを随筆に書くのは一層むつかしい。しかし人間一度度胸をきめれば、それくらいのは出来るものである。

(昭和十六年七月一日)

『日本石器時代提要』のこと

弟治宇二郎じゅうじろうが書いた本というのは、表題の『日本石器時代提要』であって、菊判きくばん三百ページくらいの堂々たる体裁であった。評判も大分良かったらしく、『朝日新聞』の書評でも「年齢わずか三十歳の著者が」と、大いに褒めてあった。しかし本当は、当時二十七歳くらいだったので、ひどく早熟な方であった。

語学には、妙な才能をもっていて、来た時は仏蘭西語フランスはボン・ジュールくらいしか知らなかったのに、二カ月もしたら、もうコレジ・ド・フランスで、三十分の講演をして来たなどといって、澄ましていた。

日本を出る前に、注口土器ちゅうこうどきの形と紋様もんじょうの分類をして、その型式を地図の上に描き現わして、文化（カルチュア）の中心を求めるという研究をした。その結果を英文で書いて、方々に送っておいたそうである。来て間もない頃、コレジ・ド・フランスで社会学のモリス教授の講義を冷やかしていたら「文化中心を求めると中谷なかやの図式方法」というのが出て来て、びっくりしたそうである。講義がすんでから「それは私です」と申し出たら、モリス教授もたいへん喜んで、それから学会などにも始終顔が出せるようになった。

こういう具合に、弟の在仏生活は、大分楽しく、また仕事の方でも能率を大いにあげた。しかし勉強が過ぎて、胸を悪くした。スイスの療養所で大分静養しましたが、思わしくなく、帰って九州の由布院ゆふいんで闘病生活四年、遂に亡くなった。

それから五年ばかり経つて、日華事変の最中、京都の出版社が、京大の梅原末治うめはらすえじ教授のところへ、考古学の本を一冊書いてもらいたいと頼みに行つたことがある。そしたら梅原教授は「考古学の本では、以前に出た中谷君の『提要』が非常に良い本であつたが、今は絶版になつてゐる。あれを補足して出した方がよい。私が校訂してあげる」と言われたそうである。そして同教室の小林行雄こばやしゆきお、岡崎敬両君おかざきたかしの熱心な助力を得て、初版刊行後に得られた新資料及び斯学しきがくの進歩を採り入れて『校訂日本石器時代提要』は、菊判五百五十ページに及ぶ大著となつて、再び世に出た。

原著の姿をそのままに残して、それに新しい資料を加えて、増補校訂をするということは、非常に労が多くて、しかも世間的には、功の現われない仕事である。普通は門下生が恩師の遺著について行うことが、稀まれにあるという程度の話である。

梅原教授のような当代一流の学者が、その門下生でもない、他の大学の年若い一助手の遺著に対して、こういう厚意を示されたことは、空前のことであり、また絶後になるかもしれない。早くは死んだが、弟は仕合せな男であつた。

(昭和三十年七月十九日)

楡
の
花

私の今つとめている札幌の大学は、榆（エルム）の樹で有名である。

緑の芝生がつやつやと滑らかで、そのところどころに大きい榆の樹が立ち、鮮かな緑の葉が天蓋のように空を蔽っている。夏の陽光に映えたその木蔭から、もとは白壁の校舎が点々と見えた。

全体の様子は、ニューイングランドの或る学校の構内を、そのまま真似たという話である。そしてエルムの学園などという言葉が、戦前まではよく使われたものであった。

内地の若い人たち、特に女学生の人たちの間に、このエルムの樹はなかなか人気があったようである。戦争前までは、夏休みになると、毎日のように、修学旅行の連中が来た。緑の芝生の中に、白いパラソルの列がそろそろ見え始めると、もう夏休みになったという気がしたものである。

ところでこういう美しいエルムの樹の花はどんなだろうかという質問を時々うけることがある。なるほどエルムの花盛りというものは、一寸旅行者には見られない。旅行者でなくても、札幌に住んでいる人でも、殆んど注意を払う人は無いであろう。「エルムの樹に花なんか咲きやしませんよ」というのが、大多数の人の返事であろう。しかしエルムにも立派に花盛りがあるのである。四月、といっても、北国の春はおそく、やっと雪は消えたが、地面はまだどろどろで、冬中にたまった汚いものが、

その泥にまみれていっばいちらかっている。空は曇りがちで、鼠色の雲が低く垂れ、いつまでも冷たい風が吹く。そういう時に、冬の間はすっかり葉が落ちたエルムの梢が、まだ枯枝のまま暗い空に交錯してのび出ている。仰いで見ると、墨絵の線描きのような恰好である。

その時よく注意して見ると、どの小枝にもみな点々と心もちくらまったところがある。丁度葉の芽が出ようとしているところのように見える。それがエルムの花なのである。夕暮に冷たい風の吹く中を、オーバの襟を立てながら、鼠色の空に交錯する枯枝を仰いで「またエルムの花盛りになつたね」と冗談を言う友人もあつた。

木屑のような花ながら、エルムにとっては、それが青春なのである。一寸可笑しいような気もするが、それを仰ぐ大学の先生方だつて似たようなものである。そういう先生方は、エルムの花のような青春を送つていけば、それで世間は安心していい、というよりも、その方が評判がよいと言つた方がよいであろう。その上年中貧乏をして、研究費がなくて困つていけば、ますます感心な学者ということになる。

これは日本だけの話ではなく、外国でも偉い学者の伝記といえは、貧乏をして、いろいろな迫害を受けて、その中をどうにか切り抜けて、何かの発明をするとか発見をするとかいう話が多いようである。特に日本では、そういう話が受けるらしい。非常な大金持で、豪華な暮しをして、遊びながらやつた研究では、どんな偉い発見

をしても、世の中の受けはあまりよくない。何となくそぐわないからである。

「先生方はさぞお困りでしょうね」とか「それくらいの研究費じゃ仕方ありませんね、何とかしなくちゃ」とかいうようなことを言わせておけば、世の中は御機嫌がよい。理由は極めて簡単であつて、利害関係のない弱者に同情をするのが、一番いい気持なものであるからである。

ところが、その弱者にも案外強いところがあつて、こういう環境を巧く利用して、一生安穩に暮して行っているわけである。ソ連がカピツアを遇していたように、別荘を二つと自動車を三台と、それに研究費は無制限というようなことになったら、日本の大学の先生方は一たまりもないことであろう。少なくとも私なんか一日もつとまるまいという気がする。

そういう危いところへはなるたけ近寄らないことにして、楡の花と同病相楽しんでいる方が安全なようである。

(昭和二十一年十月)

おにぎりの味

お握りには、いろいろな思い出がある。

北陸の片田舎で育った私たちは、中学へ行くまで、洋服を着た小学生というものは、誰も見たことがなかった。紺緋こんがすりの筒つぼに、ちびた下駄。雨の降る日は、藷草いぐさでつくったみのぼう、しをかぶって、学校へ通う。外套がいとうやレインコートはもちろんのこと、傘をもつことすら、小学生には非常な贅沢ぜいたくと考えられていた。

そういう土地であるから、お握りは、日常生活に、かなり直結したものであった。遠足や運動会の時はもちろんのこと、お弁当にも、ときどきお握りをもたされた。梅干のはいった大きいお握りで、とろろ昆布でくるむか、紫蘇しその粉をふりかけるかしてあった。浅草海苔あさくさのりをまくというような贅沢なことは、滅多にしなかった。

しかしそういうお握りの思い出は、あまり残っていない。それよりも、今でも鮮あざやかに印象に残っているのは、ご飯を焚たいた時のおこげのお握りである。

十数人の大家族だったので、女中が朝暗いうちから起きて、煤すすけたかまどに大きい釜かまをかけて、粗朶そだを焚たきつける。薄暗い土間に、青味をおびた煙が立ちこめ、かまどの口から、赤い焰ほのおが蛇へびの舌のように、ちらちらと出る。

私と弟とは、時々早く起きて、このかまどの部屋へ行くことがあった。おこげのお握りがもらえるからである。ご飯がたき上がると、女中が釜をもち上げ、板敷の広い台所へもってくる。釜の外側には、煤が一面についているので、それに点ついた

火が、細長い光の点線になって、チカチカと光る。まだ覚め切らぬねぼけまなこの目には、それが夢のつづきのように見えた。

やがてその火も消え、女中が蓋をとると、真白い湯気がもうもうと立ち上がる。たき立てのご飯の匂いが、ほのぼのとおなかの底まで浸み込むような気がした。女中は大きいしゃもじで山盛りにご飯をすくい上げて、おひつに移す。最後のおこげのところだけは、上手に釜底にくつついたまま残されている。その薄狐色のおこげの皮に、塩をばらつとふつて、しゃもじでぐいとこそげると、いかにもおいしそうな、おこげがとれてくる。女中は、それを無雑作にちよつと握つて、小さいお握りにして、「さあ」といつて渡してくれた。

香ばしいおこげに、よく効いた塩味。このあついお握りを吹きながら食べると、たき立てのご飯の匂いが、むせるように鼻をつく。これが今でも頭の片隅に残っている、五十年前のお握りの思い出である。

その後大人になって、いろいろおいしいものも食べてみたが、幼い頃のこのおこげのお握りのような、温かく健やかな味のものには、二度と出会ったことがないよ
うな気がする。

都会で育ったうちの子供たちは、恐らくこういう味を知らずに過ごしてきたにち
がない。一ぺん教えてやりたいような気もするが、それはほとんど不可能に近い

ことであろう。おこげのお握りの味は、学校通いに雨傘をもつというような贅沢を、一度おぼえた子供には、リアライズされない種類の味と思われるからである。

(昭和三十一年九月五日)

かぶらずし

金沢の郷土の漬け物に、かぶらずしというものがある。大きいかぶらを、厚さ一センチくらいに切り、中に切れ目を入れて、その中に塩ブリをはさむ。それを重石を強くしてこうじでつけたもので、非常にうまい漬け物である。

北陸地方では、すしといえ、たいいてい押しすしであつて、江戸風の握りすしは、近年になつて、はいつてきたものである。普通は米の上にマスやサバあるいはイワシを乗せて押ししたものであるが、米のかわりに、かぶらを使ったものも、やはりすしといったらしい。

このかぶらずしは、このごろは、市販品になつてゐるが、昔はみな自分の家で漬けたものである。魚を発酵させるので、漬け方と時期との微妙な差で、味がひどくちがう。ひとつうまく行くと、まさに天下の美味となる。百万石の城下町に、いかにもふさわしい漬け物であつて、それぞれ自分の家のかぶらずしを、自慢にしたものである。

こういうすしが、いつごろからあつたものかわからないが、芭蕉ばしやうの『猿蓑ざるみの』に、どうもこれではないかと思われるものが顔を出している。

有名な「灰汁桶あくおけ」の連句の中に、去来きよらいの

又も大事だいじの鮓すしを取出す

という句がある。野水やみづの「うそつきに自慢こゝろいはせて遊あそぶらん」につけたもので、こ

の鮓は、かぶらずしまたはそれに類似のものではないかと思う。

露伴^{ろはん}先生の評釈では、鮓^{ふな}の鮓か鱈^{さわら}の鮓となっているが、「又も」と「大事の」が、相当長期間の保存を意味するようにみえる。そうするとかぶらずしの方が、ぴったりする。昔、寺田先生にこの話をしたら、「そうかもしれんな」といつておられた。先生もかぶらずしが好きであった。

貝鍋の歌

北海に愚魚あり

その名をほつ、け、け、という

肉は白きこと雪片あざむを欺あざむき

味はうすきこと太虚たいきょに似たり

一片みつしの三石みつしの昆布

一滴しゅうゆのうすくちの醤油

真白なる豆腐に

わずかなる緑を加う

くつくつと貝鍋は煮え

夜は更けて味いよいよ新たなり

まだ子供たちが幼かった頃、うまくだまして、早く寝つかせた夜は、奥の六畳の長火鉢で、よく貝鍋をつついた。

住みついてみると、北海道の冬は、夏よりもずっと風情がある。風がなくて雪の降る夜は、深閑として、物音もない。外は、どこもみな水鳥のうぶ毛のような新雪に、おおいつくされていいる。比重でいえば、百分の一くらい、空気ばかりといって、もいいくらいの軽い雪である。どんな物音も、こういう雪のしとねに一度ふれると、

すつぽりと吸われてしまう。耳をすませば、わずかに聞こえるものは、大空にさらさらとふれ合う雪の音くらいである。

こんな夜は、長火鉢に貝鍋をかけ、銅壺どうこに酒をあたたためて、静かで長い夕食をとる。貝鍋の魚には、いろいろためしてみたが、けつきよく一番安くて、一番味のよい、ほっけほっけに落ちついた。

これは磯魚いそおであつて、鱧たらの子供が、親にはぐれて、陋巷ろうこうにすみついたような魚である。北海道の日本海沿岸では、どこでも、いくらでもとれる愚魚である。太平洋岸でもとれるのかもしれないが、それはどうでもよい。

近海で多量にとれる魚であるから、少し気をつけていると、水から揚がったばかりのようなあたらしいのが、市場の魚屋などにもよく出ているらしい。細君は、みつきり次第買ってくるようであつた。どんな愚魚でも、あたらしい魚はうまい。貝鍋に昆布を一枚しき、このほっけの切身と豆腐を入れ、せりか三つ葉の青味を少し加えて、湯でくつくつと煮る。味つけは、うすくちの醤油を数滴たらすだけ。

初めのうちは、淡泊さかなというよりも、味もそつけないといつてもいいくらいの味である。この味のない肴さかなをはさみながら、ゆつくりと酒をのむ。汁はまもなく煮つまってくる。銅壺の湯をたびたびさし、ときどき醤油をたらし込みながら、煮ていると、次第に味が出てくる。

その頃になると、酒も適当にまわり、その味がよくわかるようになる。それはまことに不思議にも微妙な味で、相当味が濃くなつてきても、少しもしつこくはない。二時間くらいも食べつづけていて、いつまでも味の新鮮さを失わない鍋ものは、他にちよつと思ひ当らない。酔い心地も、まず申し分がない。

毎度のこと、われながら少し気もひけるが、細君に筆と紙の用意をさせ、貝鍋を中心に、雑然たる食卓の風景を、墨絵に描く。そして口から出まかせの賛をする。初めにあげた、詩とも、だじやれともつかぬ妙な文句は、こういうときに書きそえた賛の一例である。

家族が東京へ移つてからは、北海道の貝鍋とは、縁が切れた形である。東京でも、まれには、貝鍋をするが、どうも中身が上等すぎるうらみがある。しかしそれでも、貝鍋にはやはり特殊の風味があつて、私は好きである。

同じような鍋ものを、アルミの鍋でやったのでは、ぜんぜん問題にならない。土鍋どなべはアルミからみたら、ずつとよいが、それでも貝鍋には、はるかに及ばないような気がする。心理的なものかもしれないが、ひよつとしたら、貝鍋から、何かその組成の成分がとけ出て、あの特殊な味をそえるのかもしれない。

貝殻の主成分は、もちろん炭酸カルシウムであつて、加里カリや燐酸塩りんさんえんも、少しはいつているが、それはごく微量である。ナトリウムも少量あるが、これは加える食塩の

方が、ずっと多いから、問題にする必要はない。一番考えられるのは、カルシウムであるが、これは煮ているうちに、汁の中にとけ出る可能性は、じゅうぶん考えられる。人間の舌は、あんがい敏感であつて、化学分析でもわからないほどの微量の成分を、感じとるものである。

この貝鍋カルシウム論を、芸大の物理の教授をしているO博士にしたことがある。最近その博士に会つたら、あの実験はやってみましたという。結果は肯定的で、蛤の貝殻を、水で一時間くらい煮ると、簡単なテストでわかるていどに、カルシウムがとけ出るそうである。帆立ほたての貝鍋は手に入らぬので、まだやっていないが、充分出るでしょうといつていた。

少し暇になつたら、本式に貝鍋料理の物理的および化学的研究をしてみたいと思つている。

(昭和三十六年四月一日)

真夏の日本海

此の十年余り、海といへば太平洋岸の海しか見てゐないのであるが、時々子供の頃毎年親しんだ日本海の夏の海を思ひ返して見ると、非常に美しかったといふ思ひ出が浮んで来る。

日本海の沿岸には一般に砂丘がよく発達してゐる。浪打ち際から真白な砂が数丁も続いて小高い丘になり、その丘を越えたあたりから松林になつてゐるのが普通である。そしてその松林を抜けた所に初めて漁村が見えることが多い。それといふのは、冬の日を海が一つ荒れて来ると、数丁も続いた砂丘の上まで浪が押し寄せて来るので、とても海辺の近くに家などを構へてゐることは出来ないのである。

渚に沿つてたどつて見ると、そのやうな真白な砂丘が暫く続いて躰て小さい岬につくことが多い。その岬は大抵の場合は軟質の岩からなつてゐて、冬の荒浪に段々根本を洗ひ去られて、恐ろしい断崖になつてゐる。そしてさういふ岬が半里毎位に突き出てゐる所では、その間が小さい入江になつて、真白な砂浜が弓なりに静かな青い夏の海をふちどつてゐるのに屢々出会ふのである。岬の端には大抵きまつたやうに、盆栽風な枝振りの松が孤立して立つてゐて、あとは黒く続いた松林になつてゐる。

中学の頃夏休みになると、よくかういふ入江に近い漁村の一間を借りて、数人の友達と日本海の夏を送つたものである。此の頃のやうに入学試験の準備などに追は

れる心配もなく、毎日のやうに朝飯をすますと、もう真ぐに魚刺と水眼鏡とを持つて海へ出かけて行くことに決つてゐた。松林を過ぎると、真白な砂浜が朝の強い日光を受けて目ばゆい許りに映えてゐて、その向ふに、海が文字通りに紺碧に輝いて見えるのである。夏の日本海の朝の色位美しい海の色は其の後見たことがない。油絵具のウルトラマリンを生そのままで力強く塗つたやうな濃い色彩である。もつとも色の濃さからいへば、印度洋の航海の間には随分濃い海の色も見た筈であるが、真白な砂丘の向ふに見える真夏の日本海の色はやうな印象は残つてゐない。

もつとも午後になると、此の色はすつかりあせて了ふのであつて、今から考へて見るも、どうもあの夏の日本海の朝の色を支配する一番大切な要素は、太陽の位置ではないかといふ気がする。もつとも海の色をきめる要素は沢山あつて、海水の中に含まれてゐる微粒の塵やうのものに支配されることが多いのであるが、朝風のあとまだ海が比較的澄んでゐる時に、丁度太陽を背にして眺められるといふことが、朝の日本海の色を益々鮮かにするのであらう。

間借りをしてゐる漁師の家から三丁位行くと小さい岬がある。そのあたりは一面の岩海で、岬の突端からほんの少し離れて小さい岩の島がある。その島の周りが吾々の漁場であつて、章魚とかさごと栄螺とが主な穫物であつた。毎日のやうに漁師の子供たちが大勢で追つ馳け廻してゐるにも拘らず、魚たちもそのあたりが好きと見

えて、穫物はいつまでも尽きなかつた。海水浴に就いての衛生的注意などが学校でされてゐたのかも知れないが、そんなことはすつかり忘れて了つて、朝から夕方晩くまで水に浸つて居るやうなことが多かつた。吾々町の子供たちも一週間もすると、もうすつかり海に馴れて了つて、半日位夢中になつて章魚やかさごを追つてゐた。

そのあたりは浪打ち際から一丁位沖まで、平らな岩礁があつて、深さは大体二尋から三尋位であつた。所々には背の立つやうな浅い所もあつた。岩質は何であつたか忘れて了つたが、顔を水につけながら海面にばかりと浮いて下を覗くと、岩礁が紫がかつた薄黄色に光つて、所々に名も知れない雑多な藻がゆらいでゐた。岩には上から見ると一面に海綿のやうな穴が沢山あつた。二三度大い呼吸を呼吸して、最後の息を八分位静かに呼び出したところでぐつと潜る。一尋位沈むと急に海水が冷々と身体に感ぜられるので、少し気味が悪いが思ひ切つて潜つて行く。そして底に着くと、左の手で岩の手がかりを押へて身体を水平にする。初めのうちは身体が浮いて困るのであるが、馴れて来ると割合楽に全身が海の底にびたりと着くやうになる。さういふ姿勢で左の手で次から次と岩角をつかみながら、岩礁の上を這つて、小さい穴の一つ一つを覗いて行くのである。勿論右手には魚刺を持つてゐるので、それも漁師に教はつて金具に近い所をつかんでゐるのである。

底に潜つて見ると、最色がまたまるで違ふ。岩の色は緑がかつた土黄色つちぎに見え、海

藻は薄茶色になる。そして多分海の表面の小さい波で強い夏の日光が屈折される為だらうが、強い金色の光の縞がゆらく藻の上を滑かに動いてゐる。穴を覗いて行くと、よく海胆うしほが一つか二つ紺紫色の姿を見せてゐることがある。そして稀には栄螺えいろうが同居して居ることもある。あのあたりの海では大抵の場合、栄螺はきまつたやうに海胆と一緒に棲んで居るやうな気がしたが、偶然なのか、或は何かさういふ習性があるのか、いつか動物の先生にきいて見たいと思ひながらそれ切りになつてゐる。

二つ三つ穴を覗いて行くうちに息が苦しくなるので、足で岩を蹴るやうにして浮き上つて来る。何かの調子でぼんやり浮いて来ると、僅か二尋位の所でも、海面まで出るのにひどく長い時間がかかるやうな気がする事があつた。青みがかつた牛乳色の水面が上の方にあつて、息が苦しくなつて来ると、何だかその水面が自分の頭の上で渦を巻いてるやうな形に見えた。そんな時にあせつて手足をもがくと却つて遅くなるので、静かに身体を垂直にして居ると、すぼりと容易く頭が水面を突き抜けるやうな形に浮き上るといふことも、間もなく呑み込むことが出来た。

穴を覗いて行くうちにかきかき、ごごに出会ふことがよくあつた。少し薄暗く見える奥の方に、あの大きい頭ときよとんと前に向いた二つの大きい眼とを見ると、思はず緊張する。運よく息がまだ続く時で、最初の緊張のとたんに魚刺をふるつた場合は時々は巧く行つた。然し少し大きい魚の時など、慎重を期して一度浮び上つて息をとと

のへて又潜つたりすると大概は失敗した。魚を突くのは本当の気合もので、見つけてから一度落付いて静かに安全な所まで近寄つてなどといふ風に、一寸気を抜いたら大抵は逃して了ふやうだつた。こちらが余裕をつけてゐる間に、魚の方も一寸身体を動かして、待機の姿勢といふかたちになつて待つてゐる。さうなつたらとても吾々の手には負へぬのである。

章魚はなか／＼漁れなかつた。島の根本の深く削られた岩洞の奥には沢山居るらしかつたが、其処へはとも潜り込む勇氣はなかつた。深さからいつたら、大抵は奥行五尺位の簡単な洞穴だつたが、奥の方を覗いて見ると、真暗なやうな気がして、それに水の色が妙に濃く碧玉色に澄んでゐて、潜り込んだら最期身体が岩洞の天井に吸ひつけられさうな気がした。勿論さういふ岩洞は遠くから見ただけで失礼して、島の根本を半ば潜りながら周つて行く。すると稀には小さい穴の底から、藻と章魚の足とがもつれあつてゆら／＼となびき出てゐるのを見付けることがある。章魚は岩や藻と殆んど同じ色をしてゐるので、馴れる迄はなか／＼見付からない。小さい章魚でも生きてゐるうちにはとても強いもので、特にあの沢山の足が腕にまつはりついで吸ひ付かれては耐らないので、此処と思ふ所を魚刺で突いて見る。巧く当ると章魚は慌てて足で魚刺の柄にからみついて来る。其処でぐい／＼と魚刺をひねると、章魚は苦しまぎれに全部の足で柄に吸ひつく。さうなればわけなく漁れるのである。

が、なか／＼いつもさう巧くはいかない。途中で息が苦しくなつて浮き上つたりしてゐるうちに逃がして了ふことも勿論度々ある。

吾々が狙ふのは章魚とか、かき、ご、類の所謂底魚であるが、黒鯛の子だのべらだののやうに、途中を泳いでゐる連中も上手な人には突けるのださうである。黒鯛の子はいつも沢山で群をなしてゐる。底に潜つてちつとして居ると、すぐ眼の前を敏捷な姿で後から／＼と続いて通り過ぎて行く。少し丈けの高い海藻のゆれてゐる所が、連中には御氣に入りの場所と見えて、藻の間を縫つて廻り灯籠のやうに、いつ迄もひら／＼と廻つてゐることが多い。此の辺の土地では、釣りの餌に使ふご、かいをとるのは主として此の岩礁地帯である。岸に近い背の立つ程度の浅い所で、よく漁師が鉄の楔を底の岩に打ち込んで岩をはがしてゐるのを見ることがある。手頃な岩片がはがされて、岩の中に孔をつくつてひそんでゐたご、かいが顔を出すのを、漁師は大急ぎで潜つてとるのである。一寸でも愚図／＼して居たら黒鯛にとられて了ふので、岩を剥がしたら、まだ濁りの去らぬ水の中へ逆まに潜り込んで行くのである。楔を打ち込む音がすると、黒鯛は沢山集つて来てその周囲に待つてゐる。そして岩が剥がされると、すぐさつと飛び込んで来てご、かいを持つて逃げて行く。漁師はいま／＼しがつて追ふのであるが、黒鯛の方は平気である。かういふところを見ると、魚と漁師とは仲のいいものである。

魚を追つかけてゐるうちに段々と沖へ出て、岩礁地帯のはづれ近く迄行くことがある。そのあたりへ行くと、岩礁は脈になつて沖へ延び出ているので、脈と脈の間は狭い峡谷になつて深く切れ込んでゐる。谷の底は砂地で、急に十尋位の深さになつてゐる。水にはかに暗緑色になつて、その暗い底の砂地が妙に綺麗になだらかになつてゐるのが却つて気味が悪い。潜つてゐるうちに、少し深くなつて岩の色が變つて来たと思ふと、その隣りは恐ろしい深い谷になつてゐる。そしてその青く暗い谷底が、綺麗な砂地になつて藻さへ生えてゐないのが、何だか生物の世界でない世界の入口のやうに見える。潜りながら急にこの海の底の谷間を覗き込んだ時の神秘的な恐ろしさは、一寸外では経験出来ない感じである。そんな時に周囲を見廻して誰も居なかつたりしたら大変である。大急ぎで真剣になつて泳いで逃げ歸るのであるが、岸へ上つても心臓の鼓動はなか／＼止らない。

日本海の海岸は年々に沈んで行くと云はれてゐる。弁慶で有名な安宅の関といふのは、私たちの毎夏行つた所から数里と距つてゐない所であるが、当時の関趾は今では半里も海の沖になつてゐるといふ伝説がある。晴れた日に海がよく澄んでゐると、水底に鳥居のやうな形のものが見えるといふ話であるが、私は覗いて見たことはない。澄んだ深い海の底を覗くことは非常に恐ろしいものである。あの真蒼な暗

い碧玉色の海の底に、人間の遺跡を示すやうなものが見えたら、どんなにぎよつとすることかと思ふと、とてもそんな所へ行つて見る勇氣は出ない。

さういふ伝説は日本海の沿岸到る所にあるらしいが、その外にも時々漁師の網に石器時代の住民の使つた土器がかかつて来たといふ話もある。それも一つや二つの例ではないので、日本海の沿岸の大部分の土地が年々沈降して行くといふ話は、大抵の人は信用してゐることである。この問題は地球物理学的に見て、特に日本の島嶼の成因とか、日本の地震の問題とかに關聯して大切な事柄なのであるが、本当の証拠になるやうな資料は思ひの外乏しいやうである。例へば或る海岸の地点の五十年前の写真と、同じ場所の現在の写真といふやうなものとを比較することが出来たら、所によつては案外それ位の年月の中でも、はつきりした証拠が出て来ないとも限らないと思はれるが、さういふ例も余り見たことがない。

中学時代の海浜生活の古い記念写真を眺めながら、色々の思ひ出に耽つて見たが、魚刺を持つて魚を追ひ廻すやうなことはもう二度とは出来さうもない。然し魚刺を小脇に岩頭に立つてゐる勇しい写真の方は、或は日本列島の構造の研究に何等かの貢献をする日が来ないとも限らないだらうと、變つた夢を描いて見るのは一寸楽しみである。何時か暇が出来たら、あの同じ土地へもう一度行つて見たいと思ふこともあるが、漁村の姿には昔の面影も残つてゐないことだらうと思はれる。

『西遊記』の夢

子供の頃読んだ本の中で、一番印象に残っているのは、『西遊記』である。

もう三十年も前の話であり、特に私たちの育った北陸の片田舎には、その頃は子供のための本などというものはなかった。

子供たちは、大人の読み古した講談本などを、親に叱られながら、こっそり読んでいた。その頃盛に出ていた小波氏の「世界お伽噺」のようなものも滅多に手に入らなかった。

あの一冊十銭かの本は、たしか全部で百冊あったはずである。もう何回となく読みかえしたそのうちの一冊の末尾には、百冊の題目がずらりと並んでいた。その題目の一つ一つが少年の心には、あらゆる空想の種であった。これらの百冊の題目は、見開き二頁にぎっしり詰っていた。その二頁に、私たちは、いつまでもあかす見入っていた。気に入ったお馴染の題目のいくつかは、その紙面からずつと浮き出して見えた。そしてその活字の蔭に、古い城だの、碧い湖だのの姿が揺曳していた。

そういう頃に、私は帝国文庫の『西遊記』を見つけた。私は町の小学校へはいるために、小学一年の時から町へあずけられていた。その家は旧士族の古い家柄の家であった。そこには帝国文庫だの、それに類した本が十冊近くもあって、それがあこがれの的であった。

背中に金の文字がはいっているあの厚い本は、中が小さい字で一杯に埋っていて、

あれならばいくら読んでもおしまいにはならないように見えた。それに立派な絵も沢山はいっていた。

漸く振仮名を頼りに読めるようになった時に、最初にとつついたのが『西遊記』であった。この頃になって、久しぶりで手にしてみると、劈頭から、南瞻部洲とか、倣来国とかいうようなむつかしい字が一杯出て来る。こういう画の多い字が一杯並んで、字づらが薄黒く見えるような頁が、何か変化と神秘の国の扉のように、幼い心をそそった。

面白さは無類であった。学校から帰ると、鞆を放り出して、古雑誌だの反故だののうず高くつまれた小さい机の上で『西遊記』に魂をうばわれて、夕暮の時をすごした。昼でも少し薄暗い四畳半の片隅には、夕闇がすぐ訪れた。その訪れにつれて、本を片手にだんだん窓際に移って行つた。ふと顔をあげると、疲れた眼に、すぐ前の孟宗藪の緑が鮮かにうつつた。

仏教の寓意譚であるという『西遊記』が、これほど魅魔的に感ぜられたのは、霧囲気のせいもあつた。その頃の加賀の旧い家には、まだ一向一揆時代の仏教の匂いが幾分残っていた。

一番奥の六畳間が、仏壇の間になっていた。仏壇の間は昼でも薄暗かった。家に不相応な大きい仏壇は旧くすすけていて、燈明の灯がゆるくゆれると、いぶし金の

内陣が、ゆらゆらと光って見えた。

その家の老母は、仏壇の前にきちんと坐^{すわ}って、朝晩お経をあげていた。そして月に二、三回もお坊さんが来て、長いお経をあげた。小学生の私もその間は必ず老母の横にきちんと坐^{すわ}ってお経をきいていた。そういうことも日課のうちの一つとして、家の中の人も私もちつとも変ったこととは考えていなかった。

足の痛いのを我慢しながら、じつとお経をきいていると、だんだん睡^{ねむ}くなつて来る。時々燈明がぼうつと明るくなると、仏壇の中の仏像だの、色々な金色^{こんじき}の仏様の掛軸^{かけじく}だのが、浮いて見えた。そして孫悟空^{そんごくう}のいた時代がそう遠い昔とは感ぜられなかった。

太宗皇帝^{たいそう}の水陸大会^{だいせがき}に、玄奘法師^{げんじょうほうし}の錦欄^{きんらん}の袈裟^{けさ}が燦然^{さんぜん}と輝き、菩薩^{ぼさつ}が雲に乗^{のり}つて天に昇ると、その雲がいつの間にか舂斗雲^{きんとん}にかわつて、いつか自分は水色の綿蒲団^{わたぶとん}の下に蒸されるような息苦しさを感じた。そういう時には、金色の燭台^{しょくたい}の一点が燈明に鋭く輝いて、その光点から金色の箭^やが八方にさしているのを、唯一^{ゆいいつ}のすがりどころとじつとみつめていた。

家の中には科学はおろか、およそ近代風の物の考え方というものは少しもなかった。本当のことを信ずるといふ現代の人たちには、本当でないから信ずるといふことまでは理解出来るであろう。しかし本当とか嘘^{うそ}とかいふことと信ずることが完

全に乖離かいりした考え方はちよつとむつかしい。私が小学校時代を過すした家には、あらゆる意味で、現代風な物の考え方というものは全然なかつた。そういう所では孫悟空は、自由にその金箍棒きんこぼうをふるうことが出来たのである。

小学校では、変つた先生がいて、理科の時間にカントーラプラスの星雲説などを教えてくれた。今でいえば科学普及という類たぐいであろうが、その先生の話をきいてみると、何だか宇宙開闢かいびやく以前の夢の方が余計に聯想れんそうされやすかつた。何も無い虚空こくうに目に見えない力の渦巻うずまきだけがあつて、その渦の捲まき方がだんだん速くなる。するとその力が凝こつて物質が徐々に生れて来るような幻想が、いつの間にか頭の中に出てしまつた。それで折角のカントーラプラスもまた孫悟空の味方になつてしまつたのである。

今から考えてみれば、随分無茶な話であるが、それでも無事に中学へはいり、高等学校へ行つてピアノなどいうものの実物を見るようになっては、さすがに『西遊記』の世界からは次第に離れて行つた。そしてその反動かどうかは分らないが、物理学などを専攻することになつてしまつた。

その後は、当然のことながら、長い間『西遊記』とは縁のない生活をしていた。ところが二年ほど前に思わぬところで、ひよつくり本物の八戒はっかいに出会つたのにはちよつと驚いた。それは正ましく本物の八戒と言つてよいものである。

紀元二千六百年記念に出版された『西域画聚成』を見ているうちのことであった。燉煌出土の降魔図の中に八戒がいたのである。中央の岩上に結跏趺坐した釈尊の周囲に、怪奇な魔衆が群り集っている、空想の限りをつくした絵である。その中に魔衆の一人として、長い嘴を突き出した八戒が、熊手をふりあげて、強くないくせに威張った顔をして立っていた。八戒のくせに裾長の着物を着て、金の冠なんかをかぶって、不器用に熊手を振りかぶっている。子供の頃から頭の中にある、悪いことばかりしていて、その割に悪めない八戒の姿そのままがひよっくり出て来たので、大変なつかしかった。

この絵は宋初のものでとされているので、本当の玄奘三蔵法師が、唐の太宗の貞観三年に長安の都を辞して、遙々印度への旅についた頃から見ると、三百年くらいも後に描かれたことになる。しかし『西遊記』の書かれたと推定されている宋末元初の頃から見ると、ずっと古いものである。古来白骨人の収むる無しとうたわれた青海のほとりには、その頃丁度八戒などもいたのであろう。審美書院の自慢の木版摺の色でみると、千年の間土に埋れていて、今また陽光を浴びた八戒は、鮮かな朱と黄色との着物を着て、一、二年前に描かれたような色彩のまま保存されていたのである。

八戒の出現と前後して、スタインの『中央アジア踏査記』を読むに到って、私の『西遊記』の夢は益々本物になって来た。スタインの専門的な探險報告や燉煌絵画の

ような浩瀚こうかんなものには手が出ないが、この『踏查記』のような手軽なものに、彼の全仕事まことが纏まとめられているのは、大変有難ありがたかつた。それに風間かざま氏の重厚な訳もよかつた。

スタインは一九〇〇年から一九一六年にわたつて、前後三回支那西域タクラマカンの荒野に発掘の旅をつづけた。それは古代のいわゆる絹路シルクロードを確かめ、また玄奘法師やマルコ・ポーロの通つた道を、現在の地図の上に辿たどるのが主な目的であつた。

支那の奥地、今重慶政権しゅうけいが、ソ聯との連絡に懸命の努力をつくしている西北ルートの土地は、カラコラムの水河の氷がとけて流れ出る僅わずかかの流域をのぞいては、殆ど死の世界である。玉門関ぎょくもんかんを越えて、太平洋の水域の勢力の限界を一步出ると、その西は遙かに世界の屋根葱嶺パミールに至るまでのいわゆる支那トルキスタンの地方は、全くの荒蕪こうぶの砂漠と、乾燥し切つた岩山との境である。其処そこはもはや生物の世界ではなく、暗黒な砂漠の嵐あらしが狂い、大塩湖だいえんこの干上つた塩床が、探險者の足を頑強に拒こほんでいる土地である。そして僅かばかりの人間が、砂漠の砂に埋れた廢墟はいきよの古代都市のほとりに、僅かにヒマラヤの雪のとけ出た流れを汲くんで、辛うじて生命を保つているところである。

千三百年の昔に三蔵法師は、こういう土地を、本当はやはり孫悟空も八戒もつれずに、一人で歩いて行つたのであろう。「葱嶺そうれいを逾こゆるに毒風肌を切り、飛砂路みちを塞ふさぐ、溪間けいかんの懸絶けんぜつするに逢あへば、繩なわを以て梁はしとなし、空に梯はしして進む」と当時の本に

も残っているそうであるが、そういう旅であつた。

スタインの仕事は、この同じ恐ろしい土地で、三蔵法師の歩いた道を推定しながら、砂漠の中に埋れ去つた廢墟を発掘して、遺跡と遺品とを探しに行くことにあつた。探險家などというと、豪放大胆な人が多いように一般には思われているが、スタインは全くそれと反対の性質の人のようであつた。スタインの探險の成功の大半は、彼の學問に負っているようである。掘り出される紙片とか木簡もっかんとかに残されている文字が、スタインにはおぼろげながら、大体読めた。歐洲人おうしゆうにとつては恐るべき文字であるはずの古代の漢文、サンスクリット、古代印度のブラフミー文字など、そういうものまで、どうか大体の意味が解せられた。そしてその文字によつて、発掘個所の意味を推定しては、次の発掘にとりかかっているのである。

ニヤの古址こしでは、沢山の木簡が採集された。それは印度古代のカロシチー文字であつた。そしてその書体から、それはスキタイ王朝即ち第一乃至第三世紀のものであることを知つた。三蔵法師よりも四、五百年も前に使われていた木簡である、千七百年の歳月を閲えうしても、乾き切つた砂の中に埋れていた木簡は、特に二枚重かさなつたまま発掘されたものなどは、内面の文字の墨色が昨日のもののように鮮あざやかであつたそうである。

この木簡を発掘した夜、スタインは早速天幕に退いて、人夫たちを先にねかし、

自分は一人で、その解読にとりかかった。その夜の寒気は特に厳しくて、最低零下四十一度まで下ったということである。その天幕の一隅で、スタインはこのカロシチー文字を読み解いて、冒頭の一行が「国王殿下命令書」であることを知った。それは官命を伝える一種の公文書であった。古代印度語がこの世紀に少くも行政用としては遙々この中央アジアの僻地^{へきち}まで侵入していたのである。翌日スタインは次の収穫を期して、廢墟の南側の数房の発掘にとりかかった。そしてその部屋の当時の使用目的を推定して、最後の住人が残したまま、積み重ねられていた多数の木簡を発見したのである。玄奘がこの附近を通った頃は、この土地は、当時既に乾燥状態に入っていた砂漠の中に埋れていた。あらゆる生命を押し潰^{つぶ}す砂の力に追われて、最後の住人がこの土地を棄^すててから、数百年の歳月が既に過ぎていた。玄奘も印度からの帰途にこの道をとって、流砂に埋れた廢墟の姿を見たのである。

気候の長期変化ということは、気象学の方では大きい問題である。もともと文化地理学の方ではもっと大きい問題かもしれない。ハンチントン^{ハンチントン}は『気候と文明』で、太古の気候の変遷を論じている中で、アメリカの気候と西部アジアの気候との比較をしている。そしてその両者が第三世紀に到^{いた}って不一致^{きんた}を来している理由の一つとして、「支那トルキスタンにおける多くの遺跡の放棄に余が著しく感銘したがために生じたのであるかもしれない」と告白している。

第三世紀というのは、即ちスタインがニヤの古址で発掘したカロシチー木簡の最後の使用者が、流砂に追われてその住居を棄てた時である。ハンチントンがもし『西遊記』の愛読者であったならば、もつと感銘しすぎたかもしれない。

『西遊記』と限らず、この種のいわゆる支那の奇書くらい放恣な幻想がその翼をかつて、奔放に虚空を翔けまわっているものも少いであろう。そしてその幻想が『ギリシヤ神話』とか『アラビヤ夜話』とかいうものと、何処かかなり深いところで、その情趣を異にしている所以は、その幻想が支那大陸の妖しいまでに広大な自然と融合しているからであろう。

スタインの本を読んでいると、到るところで『西遊記』の情景を見ることが出来る。八百里の間ごとごとく火焰につつまれ、それを越えようとすれば黒鉄の身体でもとけてしまうという火焰山では、孫悟空は羅刹女の芭蕉扇にあおられてひどい目にあつた。その火焰山は昔孫悟空が天宮を鬧がした時、老君の丹炉を踏倒し、それが地に降つて出来たものである。それはなかなか活火山などという生易しいものではないらしい。

安西から北山山脈をこえて、トルファン盆地へ出ると、そこは北に積雪のボグド・ウラ、南はクルック・タグの侵蝕丘陵地帯に挟まれた流出口のない低地である。クルック・タグの山麓には、海面下千呎の深地がある。かつての鹹湖は今は大分

涸渴して、塩床の峻しい砂礫地である。この完全に人間の世界から隔絶された不毛の荒野を行くうちに、旅人は気圧計の針がだんだん昇つて行つて、遂に自分が、海面下千呎のところにいることを知るであろう。「北側の山麓は広漠たる乾燥した砂礫の斜面で、その縁にそつて、極度に不毛の丘陵が崛起」している。その砂岩と礫岩とより成る赤裸の山肌は、無人の境にあつて「見るからに毒々しく真赤に照り映えている。」そしてそれは昔から土地の支那人の間に「火の山」と呼ばれていたのである。それこそは活火山などよりも、もつと本當な火の山なのであろう。

玄奘法師は、その十七年の長い旅の首途において既に、この北の沙漠に路を失い水に渴え、命からがら哈密のオアシスに辿り着いたのだそうである。

「毒風肌を切る」葱嶺をこえるに當つて、玄奘は「竜王の潜む大竜池」のほとりを通つている。それは、紺碧の「無限の深淵」なのである。スタインによれば、今のグレートパミール河の水源地ヴィクトリア湖がそれであるという。スタインが其処を訪れた時は、標高一万四千呎の湖面を氷のような寒風が吹いていた。そして一片の雲もない青空は黒く澄み上り、その中に白く輝いた太陽が寂としてかかっていた。人類創成の昔から今まで、人間の力というものが全く加わっていないこの秘境で、スタインはあらゆる時の距りを忘れて、身近かに玄奘やマルコ・ポーロのいぶきを感じた。

無限の深淵の底は遠く四大洲の外につづき、東勝神州の水底深くにも達している。その東海の底、竜王のすむ水晶宮へも、孫悟空は閉水の法を使って自由に潜り入ることが出来た。またタクラマカンの死の荒野の東、ロプ海床を越え、乾上った海底に残る竜宮城の廢墟のまぼろしを眼のあたりに見ながら、玄奘は印度からの帰途を急いだことであろう。

この道を辿るべく、三十頭の駱駝にあらゆる探険用具と大氷袋とをつみ、すつかり準備をととのえたスタインの一行は、嚴冬を目ざして、ミラーンの古市を出発した。そして楼蘭を中心とする一帯の発掘に慘憺たる辛苦をなめた上に、更に楼蘭を起点とする古代支那路線をたずね、「塩の結晶の耀く無涯の曠野」ロプ海床に足を踏み入れたのである。

古代ロプ鹹湖の涸底は、峻しい粘土の丘がもつれるように起伏し、一面に塩が化石のように硬く凍りついていた。そしてやがて「最後の檉柳の残骸が塩野原に横わるのを後にすると、最早死の世界ではない。全然生を知らぬ世界」となつて来た。この「生を知らぬ世界」の中に、スタインは意外な古代路線の目印を見付けたのである。それは古代支那銅貨や珠子などの発見である。

或るところでは、塩晶の輝く沙漠の中に、約三十ヤードにわたつて二百個余りの漢代の貨幣が、東北に向つて一線をなして散乱していたそうである。その昔玉門関

を出て楼蘭に向つた駱駝の一つが、道々落して行つた品が、二千年の後に拾い出されるようなこともあつたのである。

この土地に特有な沈堆性の丘陵が甚だしい侵蝕作用のために、一見塔か寺院のよ
うな異形の姿をして立っている。それは支那の古書にある「太古の竜城の廢墟」の
記事と一致するということである。

更に進むと、一面に塩に蔽われた侵蝕高原地帯に入る。それも支那書では「白竜堆」という名で残っているものだそうである。こういう土地に育つた孫悟空が、度々竜城を訪れたことも無理のないことであろう。

今日の私たちは、皆地質学の初歩の知識をもっている。そして山から魚の化石の
出ることをそう不思議とは思わない。しかし海底が隆起して山の頂きになることは
恐ろしいことである。関東の大震災で地表が僅か四寸ばかり動くと、東京の街から
三百年の江戸文化の名残りが完全にぬぐい去られ、明治の文化すら大半を失つてし
まった。

日本は天災の多い国というが、まだまだ私たちの祖国の土は温順なのであつて、
アジアの大陸の奥地では、土地はもつと狂暴であつて、自然はもつと苛烈な面をい
つも見せているのである。地震なども、この西域の地では、関東大震災などとは桁
ちがいの強烈なものが有史以来しばしば襲っている。そして現代でも世界の屋根。パ

ミールでは、全山塊さんかいが崩壊をつづけているような所もあるのである。

一九一一年二月の地震で、パミールの中部バルダン溪谷は、一夜にしてその面貌めんぼうを改めてしまった。崩れ落ちる岩屑いわくずが、忽ちたちまにして溪谷を埋め、かつてはキルギスの絶好の牧場であったところを、美しい山湖に変えてしまったのである。それは三年後には長径十七哩マイルの湖になったのであるが、四年目にスタインが訪れた時にも、崩壊した岩屑の大堰堤だいえんていは、まだ新湖の水面上なお千二百呎をあましていた。そして山塊の崩壊はなおつづいていて、その山頂は山崩れのための土煙りで雲の如くに蔽おほわれていたそうである。眠っている地球が一度目を覚ますと、僅かにその毛一筋ひとすじの動きでも、それは人間のあらゆる空想を一度にはじきとばしてしまうであろう。

そういう風に考えると、地球物理学者や地質学者が、アルプスの山の成因を議論したり、太平洋が月のとび出した痕あとであるか否かを論じているのを孫悟空がきいたならば、われわれが『西遊記』に驚くように、きつと驚くであろう。そういうえば、現代の子供たちが、独逸ドイツからの放送をきいても、星雲の話をして、誰も余り驚かないのは、科学普及の功績であるか、罪過であるか急にはきめられない問題である。

この頃はうちの子供たちも本に夢中になって、御飯ごはんによばれても来なかつたり、夕闇ゆうやみの窓際まじぎわで電燈でんとうをつけずに読み入っていたりして、よく母親に叱しかられている。時々その本を覗のぞいてみると、今昔こんじやくの感にたえないくらい子供向きの良い本が沢山出てい

るようである。しかしああいう良い本ばかりでは少し可哀そうな気がしないでもない。

少しひねくれたような言い方になるかもしれないが、子供にもよく分って面白く為になるような本ばかり読んで育つたならば、本当の意味で自然に驚嘆する鋭い喜びを知らなくなる虞れがなくもない。

国民学校五年生の上の子供が、この頃『西遊記』に凝り出したのを見て、何だか恐ろしいような気がしている。というのは、折角買ってもらった少国民向きの上品な『西遊記』にはざっと眼を通しただけで、夢中になっているのは、大人向きの古い『西遊記』である。

「そんなむつかしい本が分るかい」ときいても「分るさ、面白いよ」と言いながら、頬を真赤に上気させ、ふり向きもしないで読んでいる。

その横顔をみながら、私は静かに少年の日の古い煤けた家の姿を心に描いてみた。すると仏壇の間のほのかな燈明のゆらぎが眼のあたり蘇って来た。

「その玄奘三蔵というお坊さんは本当にいた人なんだよ。その坊さんの書いた本もお父さまは持つてるよ。印度へお経をとりに行った途中のことが、書いてあるんだが、見せてやろうか」と言うど勿論大変なさわぎである。三人の子供が折りかさなつて、国訳『大唐西域記』を覗き込んで、「三蔵法師玄奘奉詔訳」という字に眼を光ら

せて、息をのんでゐる。

ふと山本晋道師の『天竺二紀行』^{てんじくきこう}についていた阿育石柱刻文の拓本のことを思い出して、臘伐尼林^{ラムベニリン}のところを説明しながら二行だけ読んでやる。「四天王の太子を捧げし窠堵波^{ストウバ}の側に遠からず、大なる石柱ありて、上には馬の像を作れり。無憂王^{アシヨウカ}の建つるところなり。後に悪竜^{アクリウ}が霹靂^{ヘキレキ}せしがためにその柱は中より折れて地に仆^{たお}れたり」

「その石の柱はね、三蔵法師はこの本に書いてあるようにたしかに見たんだが、その後すっかりジャングルの中に埋れてしまつて、何処^{どこ}にあるのか分らなくなつてしまつたんだ。それから千年もの間ずっと分らなかつたんだが、それがこの頃になつてやつと見付かつたんだよ」

と言つて、その拓本を開いて見せた。「これはね、その石の柱に紙をおつつけて、墨のついた綿^{わた}で叩^{たた}いて作つたんだ。だから字の刻^ほつてあるところだけ白く残つてるだろう。此処^{ここ}にあるこの白い細い筋が面白んだよ。この白い筋がね、悪竜の雷が落ちた時に折れた痕^{あと}なんだよ。三蔵法師もこの割れ目を見たんだね」

子供たちは固唾^{かたず}を呑^のんだまま、眼を円くして覗き込んでゐる。そのうちに末の子が息を吸いこんで「それじゃあやつぱり本当なんだね」と感にたえたという風にい

う。

さすがに上の子は「本当じゃないんだけど、お父ちやま、そんなもの誰^もに貰^{もら}つた

の」と妙なことをきく。講談本の盗み読みが出来ない現代の子供たちも、この拓本には驚いたらしかった。

地球の内部が火の球であると言うと、それを問題にするのは、少数の科学者だけである。おそらく殆んどすべての子供たちは、そんなことは分り切つてるさと答えるであろう。その答えは二重の意味で考えてみる必要がある。第一は、分り切つてると思い込んでいる点であり、第二は、もっと大切なことであるが、それにあまり驚かないことである。

分り切つてると思う方は、科学普及書の改善によつてあるいは是正出来るかもしれない。しかしそれに本当に驚くような心を育てるには、それだけではむづかしいであろう。ひよつとすると『西遊記』教育のようなものが、案外有効なのかもしれないが、ちよつと危険な方法なので、誰にでもすすめるというわけには行かない。しかし妻は一度踏まねば発育が悪いということは、一応知つておいてよいことである。

(昭和十八年一月一日)

私の生まれた家

私の郷里は、片山津かたやまつという、加賀かの温泉地である。今は加賀市かになって、国際観光ホテルもあり、近くに立派なゴルフ場もある。まるで昔日の面影はない。しかし私が生まれた頃は、北陸の片田舎の小さい部落であった。村ともいえないところで、本当地名は、作見村さくみ字片山津小字砂走すなわせである。村の下の字、そのまた下の小字であるから、部落の大きさの見当はつくであろう。五十年の間に、小字から四段とびをして、市になったわけである。

小字時代の片山津は、片側が薬師山やくしやま、今一方の片側は、柴山しばやま湯という湖にはさまれた、一本道の村落であった。私の家は、呉服雑貨店をやっていて、湖側にあった。前は、一本道路に面した店舗てんぽになっていて裏庭は湖に面していた。

家はもちろん旧式の木造で、二階は格子こうしのはまった部屋になっていたが、下はかなり新式に改造されていた。この土地では、まあ大きい店であった。雑貨部は、広い土間にあって、その中に、硝子張りの陳列箱ガラスが並べてあった。いろいろな土産物だの、花かんざしなどが、この陳列箱の中に並んでいるのが、美しかった。

呉服部は、腰高こしたかの畳敷たたみじきで、普通のお客は、畳に腰かけて買い物をする。しかし反物などを買う客は、畳敷の上にあがり込む。そしていろいろな反物を、畳の上に拵すわげて、品定めに、一時間も二時間も坐り込んでいた。三十畳敷近くもあったと思うが、二、三人のそういう客に坐り込まれると、店いっぱいになり、反物が並べられて、そ

の間をぬって歩くのが、たいへんだった。反物を踏んで叱られるのは、毎日のことであった。

父はハイカラ好きであつて、呉服部の一部にショー・ウインドーをつくつた。幅一間ちよつと、深さ四尺しやくくらいの小さいウインドーであつたが、出来たときは、非常に珍しがられて、付近の村の人が見に来たくらいであつた。

この頃でも、北海道の奥地へ行くと、こういう店屋を見ることがある。北海道の村というのは、非常に広く、中には、神奈川県よりも広い村もある。そういう村には、一場所、中心地があつて、それを市街地といつている。この市街地の中に、都会のデパートの役目をしている店屋が、一つくらいは必ずある。そういう店を見ると、私はよく子供の頃を思い出す。

住居は、裏にあつて、板敷の台所で、つながつていた。この台所は、食堂も兼ねていて、広さは、二十畳敷くらいもあつたであろう。真ん中に大きい食卓があり、食事のときだけ、その周囲をぐるりとかこんで、ござ奠座を敷く。家族や店の人たち、それに女中を入れて、十四、五人の大家内であつたが、食事のときは、一人か二人店番を残して、あと全員が、この板敷の奠座に坐つて、一緒に食事をした。家中のものが、皆同じものを食うということを、父は自慢にしていた。もつとも、食事は、今から考えてみれば、ずいぶん粗末なものであつた。店になつている主家の二階の一

部に、十畳と八畳とがつづいた座敷があった。ここには縁側もついていて、家で一番立派な部屋であった。しかしこれは客間であつて、使うことは、滅多になかった。二人の男の子が、一人は物理学をやり、今一人は、考古学をやることになったので、この家は、とつくに人手に渡してしまった。まだ家は残っているが、すっかり模様換えをしたので、今は昔の姿もない。それにしても、私も弟も家とはずいぶん縁の遠い商売になったものである。

(昭和三十六年四月一日)

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。